

シュタイナーとユング

〔CONTENTS〕

シュタイナーとユング①

シュタイナーの精神分析批判

- ・ GA143-5 「意識の鏡映」
- ・ GA253 「人智学協会における共存の問題」
- ・ GA178 「精神分析に関する二つの講義」

シュタイナーとユング②

ゲルハルト・ヴェーア『ユングとシュタイナー』

(ドイツ語 1972年／邦訳 1982年)

英語版 (2002) に収められている

- ・ ロバート・サルデロによる序文
- ・ ハンス・エアハルト・ラウアーによる3つの講義

シュタイナーとユング③

ゲルハルト・ヴェーア

『ユングとシュタイナー』 (英語版) より

【ロバート・サルデロによる序文】

ハンス・エアハルト・ラウアー (Hans Erhard Lauer)

3つの講義

「魂の謎——深層心理学と人智学」

- ・ まえがき
- ・ 講義 1 「深層心理学の光に照らした人間の魂の謎」
- ・ 講義 2 「人智学の光に照らした人間の魂の謎」 (前半)
- ・ 講義 3 「深層心理学と人智学」

人智学的心理学 (anthroposophic psychology) について

William Bento

『Lifting the Veil of Mental Illness:

An Approach to Anthroposophical Psychology』

『The Counselor... As If Soul and Spirit Matter』



シュタイナーとユング①

シュタイナーの精神分析批判

- ・GA143-5「意識の鏡映」
- ・GA253「人智学協会における共存の問題」
- ・GA178「精神分析に関する二つの講義」

シュタイナーとユングの視点は
相補う必要があると思われるのだが
シュタイナーとユングを相補的にとらえる視点は
数えるほどしかみられない。
主にその視点をとりあげたいと思っているが、
今回は主にシュタイナーの精神分析批判について。

シュタイナーは精神分析に対して批判的だが、
それは人智学の観点から、
魂・精神の深層を物質的・性的還元論で扱う
フロイト流アプローチを根本的に問題視したものであり、

1912年（2月25日講義）あたりから批判的ではあったのだが
（GA143-5『意識の鏡映（Spiegelungen des Bewußtseins）』）、

1914年末からの人智学会内の危機
（マリー・フォン・ジーフェルスとの結婚をめぐる起こった、
特にアリス・シュプレングルと
ハインリッヒ・ゲーシュ夫妻による投影・妄想的事件）と
密接に関連している。
それについては、1915年頃の講義集
GA253『人智学協会における共存の問題』
（Probleme des Zusammenlebens in
der Anthroposophischen Gesellschaft）で
詳しくとりあげられているので、その概略だけについてふれる。

シュタイナーは1914年12月にマリーと結婚。
これをきっかけに、一部の会員（特にアリス・シュプレングル）が、
シュタイナーから「象徴的な結婚の約束」を受けていた
という妄想を抱き、精神的に崩壊したこともあり、
ゲーシュ夫妻はこれを拡大し、シュタイナーへの個人的攻撃
（約束の不履行、手振りなどの「影響」による意識操作など）に利用。

シュプレングルは幼少期の苦痛や神秘的体験から、
シュタイナーに強い投影（理想化・性的・霊的期待）を重ねていて、
ゲーシュはフロイトの精神分析に深く影響を受けていたことから、
この事件を「無意識の性的複合体」や
抑圧の観点から理論化しようとした。

シュタイナーはこれを、「フロイト的思考様式が会員の魂に及ぼした
病理的影響」の一例として扱い、精神分析そのものを批判。

GA253では、この事件を脱個人的に分析し、人智学的理解を対置する。
事件は、精神分析の「転移」が引き起こす危険を
象徴的に示すものとなった。

この文脈において、シュタイナーは精神分析を
「部分的な真理を持ちつつ、重大な危険を伴う現代の現象」と位置づけ、
魂の無意識的存在を認める点は正しいが、
方法論・解釈が唯物論的・性的に偏り、
社会的・霊的害を及ぼすとしているのである。

その後、精神分析批判に関しては、
GA178に収められている「精神分析に関する二つの講義」
(1917年11月10日・11日)において
当時流行していたチューリヒでの精神分析や
先にふれた人智学会内での事件を念頭におきながら、
フロイトの性的還元論や転移の問題、無意識の扱い方を
人智学的視点から根本的に批判し、
ユングについても「比較的優れているが限界がある」
と位置づけている。

シュタイナーの批判は、GA253の危機を契機に深まったもので、
精神分析を「時代が魂の深みを求めつつ、唯物論に囚われた現象」と捉え、
フロイトについては性的唯物論、
ユングについては心理的象徴論の限界を指摘しつつ、
人智学における「霊的心理学」の基礎としている。
これは現代の深層心理学・トラウマ論・スピリチュアル心理学との
対話の基点ともなるのだろうが、
現代においても双方の対話は乏しいようである。

以下その観点について少しだけ具体的にその概略を整理しておきたい。

○フロイト批判の主な視点

・性的還元論の過度な強調

フロイトは神経症の原因を幼児期の性的体験・抑圧に求め、
無意識の「島」として説明しているのに対して、
シュタイナーは、これは「部分的な真理」にすぎず、
確かに幼児期の印象は無意識に働き、夢や症状に現れるが、
すべてを性欲に還元するのは唯物論の極みであり、
魂の霊的次元（カルマ、前世の影響、高次の存在）を無視し、
低次の駆動力を「科学的」真理として押し上げ、
結果として魂を「悪魔的なもの」として扱う危険性があるとしている。

・転移の問題

分析過程で患者が幼児期のエディプス感情を分析者へ投影し、

強い感情関係が生まれ、これを治療の鍵としているが、
 シュタイナーは、これは「温室的な体験」であり、
 分析者が患者の魂に侵入し、
 カルマを改変する異質な力となってしまう。
 患者の自己責任・自己原因性を損ない、
 霊的發展を妨げることもなる。
 分析家が「神のような」位置に置かれる危険も指摘している。

・肯定的側面

無意識の存在を認めた功績はあり、
 大学精神医学より優れている場合もあるが、
 それでも「四半分の真理」に過ぎず、霊的心理学の基盤にはならない。

○ユングへの言及・批判

シュタイナーはユングについては、
 直接的な詳細批判はフロイトほど多くはなく、
 フロイト派の中で「相対的に優れている」としながらも、
 根本的な限界を指摘している。

フロイト派と共通している批判点としては、
 転移の重視や無意識の扱いが霊的深みに至らない点を示唆し、
 ユングの集合的無意識や元型も、
 シュタイナーのいう霊的実在とは異なり、
 心理的投影の域を出ないとしている。

フロイト派と異なっている点としては、
 ユングはフロイトの泛性欲論から離れ、
 神話・宗教・象徴を重視しているものの、
 シュタイナーから見れば、まだ「心理学的」枠内に留まり、
 真の霊的世界における展開とはなっていない。

精神分析全体としていえば、両者を
 「ディレクタントなオカルティスト（素人オカルト主義者）」と見なし、
 時代が強いる「魂の探求」を唯物論的に歪めたものと位置づけている。

○シュタイナーによる代替としての「人智学的霊的心理学」について

魂は、肉体・エーテル体・アストラル体・自我
 という4層で構成されていて、
 症状は低次の構成要素についてだけではなく、
 高次の霊的要因（カルマ、過去生、霊的存在の影響）から来る。

真の無意識への接近のためには、
 意志による浄化・観想が求められる。
 症状を「人工的人間」として内的に直視し、
 意志で溶解可能か試す必要がある。

溶解できなければ真の霊的実在による影響である。

転移に代わって、自己責任・自己原因性を強調し、
分析者依存ではなく、個人の霊的発展を必要とする。

夢・症状の解釈については、性的な観点だけではなく、
霊的・カルマ的文脈でとらえる必要がある、

あくまでも目的は、魂を解放し、霊的成長を促すことであり、
外部傷が内症状を生むのではなく、
自己原因的な高次存在が人生を導くことである。

シュタイナーとユング②

ゲルハルト・ヴェーア『ユングとシュタイナー』
(ドイツ語 1972年／邦訳 1982年)

英語版 (2002) に収められている

- ・ロバート・サルデロによる序文
- ・ハンス・エアハルト・ラウアーによる
3つの講義

○ゲルハルト・ヴェーア
『ユングとシュタイナー』について

ゲルハルト・ヴェーア『ユングとシュタイナー』は、
それまで対立・分離しがちだった
「ユング派の心理学（魂の探求）」と
「シュタイナーの精神科学（霊の探求）」を
「統合的な手法」で結びつけ、
現代に必要な「霊的心理学」を打ち立てようとする著作。

原著は1972年に刊行されているが、
邦訳されたのは1982年（人智学出版社）。
調べてみると古書でも現在では入手が難しそうだが、
現在では英語版（2002）が電子書籍でも容易に入手できる。

しかも英語版には
ロバート・サルデロによる序文と
ハンス・エアハルト・ラウアーによる3つの講義も
収められていて、その内容は
原著を補完する意味でも重要だと思われる。

そこで、原著については概略をとりあげ、
まえがきと3つの講義を主に紹介する。

以下、まずヴェーアの『ユングとシュタイナー』での論点。

両者ともドイツ語圏で、19-20世紀の危機的時代に生き、
自然科学の限界を感じ、ゲーテや神秘思想に影響を受けているが、
シュタイナーは霊的経験を直接語り、
ユングは心理的経験として扱う違いがある。

シュタイナーは高次の「霊」へと昇っていく道であり、
個人の心を超えた宇宙の精神世界へのアクセスを求めたが、
ユングは「魂」の深層へと降りていく道であり、
個人の心の世界を探究していった。

その際に、ユングは「個性化」を
シュタイナーは高次認識の獲得による霊的認識を求め、

どちらも人間が本来の自己に目覚めるプロセスではあったが、その方向性と到達点に決定的な違いがある。

ユングの「個性化」は無意識の意識化と魂の統合でそのプロセスは心理学的・内省的なもの。意識の奥にある影・アニマ／アニムス、元型といった無意識の世界へ向かうものであり、

無意識に抑圧されていた要素を意識化し、引き受けることで、自我（エゴ）の肥大化を防ぎ、より高次の全体性である「自己（セルフ）」を確立することを目指す。

そのアプローチとしては、夢分析、能動的想像法（アクティブ・イマジネーション）、芸術表現など。

それに対し、シュタイナーの高次認識の獲得は、人間の通常の魂の境界を超え、イマジネーション、インスピレーション、イントゥイションといった高次の認識を獲得することで、宇宙に実在する高次の霊的な世界への参入しようとするもので、厳格な内的修練、思考の集中、特定の瞑想法を通じ、「自我（高次のIch）」を獲得し、地上と霊界を繋ぐ霊的な認識者」になることである。

つまり、ユングの個性化は人間の魂を健全に整えるための基礎的な土台」であり、シュタイナーの高次認識の獲得はその健全な魂を持って、高次の宇宙の精神（霊）へと参入する発展的な段階として捉えることができる。

またユングの能動的想像法（アクティブ・イマジネーション）とシュタイナーの瞑想法は、どちらも内なるイメージを扱う修行法だが、その出発点と意識の保ち方に大きな違いがある。

ユングの「能動的想像法」は、無意識から湧き上がるイメージとの対話であり、無意識の自律性を呼び起こすもので、そのイメージの登場人物（影やアニマなど）に対して、意識的な自我（エゴ）が客観的な立場で話しかけ、議論を戦わせ、映画のように眺めるのではなく、自分もそのイメージの世界に参加して行動する。

その際、イメージの展開を自分の意志でコントロールしてはだめで、無意識が自律的に見せてくる展開をそのまま受け入れ、対話を通じて無意識のエネルギーを意識に統合させる。

それに対してシュタイナーの「瞑想法」は、明晰な意識のままで、高次のシンボルに集中する日常の訓練であり、

思考を能動的にコントロールするもの。

無意識に流されるのではなく、強い意志の力を使って、
そのシンボルだけに思考を集中させ、
他の雑念を完全にシャットアウト。
十分な集中の後にそのシンボルを消去し、
心の中に「完全な真空（空虚）」を作り、
このコントロールされた真空状態のなかに、
初めて宇宙の霊的世界からのインスピレーションが流れ込む。

ユングはそれによって個人の魂の傷の癒やしと全体性の回復を、
シュタイナーは高次の霊界を認識するための感覚器官の形成をめざすが。
ユングのばあい、無意識の濁流に自我が呑み込まれるリスクがあり、
シュタイナーのばあい、感情の浄化が足りないと
幻想を真実と誤認するリスクがある。

以上は主要な論点だが、
ヴェーアには人智学が背景にあるということから、
シュタイナー寄りの視点で書かれているとの指摘もあるものの、
ユングの貢献を尊重しつつ、
現代の文化的・治療的課題への応用が展望されているが、
両者の統合がどのようになされるのかについては
明確にされていないところがある。

その視点については、
英語版で追加されているまえがきと講義によって
ヴェーアの視点が補完され、理解が深められるところがあるので、
今回は主にそれを取りあげる。
（詳細な内容が伝わるように、訳文についても別途、紹介する）

○ロバート・サルデロによる序文について

ロバート・サーデッロ（Robert Sardello, Ph.D.）は、
魂や心、そして精神性のつながりを研究する
「統合的霊性心理学（Integral Spiritual Psychology）」の
先駆者的な心理学者・研究者で、
主な研究テーマは、心理学と霊性の融合であり、
自我（エゴ）と真の個性の違い、
感情的な依存と真の親密さの違いなど、
人間の心理的な葛藤を鋭く分析しながら、
それを精神的な次元へと統合していくアプローチを行っている。

なお、1970年代半ばには、
ダラス大学の心理学・哲学研究所でプログラムを立ち上げ、
1981年にはユング派で「元型心理学」を提唱したヒルマンらと共に
「ダラス人文科学文化研究所」を設立している。

その後、元型心理学の「イメージと魂」の思想に、

ルドルフ・シュタイナーの人智学や、フランスの現象学、さらにはスピリチュアルな探求を融合させ、「統合的精神心理学 (Integral Spiritual Psychology)」という独自のアプローチへと深化させている。

英語版に収められている序文では、本の内容紹介というだけでなく、心理療法家としての実践的な視点から、ユングの「魂の心理学」とシュタイナーの「人智学」を統合し、2つの思想の「核心にある意味」を並置し、その間に生じる創造的な緊張感から「まったく新しいもの」を生み出す試みとして、現代の危機に対応する新たな「精神的心理学」を誕生させるための本質的なアプローチが提示されている。

まず、サルデロは、中世の「聖杯神話」を比喻に用い、2人のアプローチの決定的な違いと、それゆえの相補性論じている。

シュタイナーは、聖杯神話における「霊の側面」を追求し、高次の霊的世界の探求や、人間の意識の進化、霊的感覚の能動的な発達に焦点を当てているが、

ユングは、聖杯神話における「魂の側面」を追求し、無意識の深層に耳を傾け、夢や元型のイメージを通じ心の病を癒やし、自己を統合していくアプローチを行った。

サルデロは、現代の文化・地球規模の危機を乗り越えるためには、この「霊の道」と「魂の道」の両方を呼び起こす方法論の統合が必要とされているという。

しかし、ドグマ化や歪みなど、どちらか一方だけに偏ることの危険性を指摘し、

シュタイナーのみに依存すると、ユング的な「魂の心理学」を通らずに高次の霊的道を進もうとしても、自分自身の無意識の歪みや影に足をすくわれ、シュタイナーの示唆する認識へ到達することは極めて困難である。

また、ユング（深層心理学）のみに依存し、魂の領域だけに閉じこもると、自分の欲求は、それが魂から湧き出たものであるがゆえに、すべて善いことであるという独我論的な罠に陥りやすくなる。

したがって、愛と欲求を識別し、それらと知的に向き合うためにも、両者のアプローチの統合が不可欠であると説いている。

サルデロはこの2つの世界観を
 「深さ」において融合させることが、
 現代の治療的アプローチや文化の課題解決に
 どのように貢献するかを述べ、
 本書が示す統合的なアプローチは、
 シュタイナーの人智学とユングの分析心理学の双方を、
 硬直化した教条主義（ドグマの危険性）から解放する
 役割を持っているとしている。

そうすることで、現代人の意識変容に真に対応できる、
 教条的ではない「本物の精神的心理学」への
 強固な足がかりが築かれると結論づけているのである。

○ハンス・エアハルト・ラウアーによる
 3つの講義について

ハンス・エアハルト・ラウアー
 （Hans Erhard Lauer, 1899年-1979年）は、
 「人智学（アンポロボゾフィー）」を生涯にわたり研究・実践した
 オーストリア出身の思想家、教育者、ジャーナリストで、
 主に精神科学や心理学の分野において、
 人智学の視点から深い考察を行った人物として知られている。

第二次世界大戦前はウィーンの人智学協会の理事を務めるなど、
 オーストリアの人智学運動の指導的な立場にあり、
 その後、スイスへ移住し、
 人智学系雑誌の編集や執筆、講演活動を続けた。

『ユングとシュタイナー』に収められた講義は、
 1959年にまとめられたもので、

ユングの深層心理学を認めつつ
 シュタイナーの人智学によって
 現代人の魂の課題を補完・拡張する三つの講義から構成され、

ユングによる無意識の研究と、
 シュタイナーによる能動的な霊視能力の開拓を架橋し、
 深層心理学的な「自己の探求」を基盤に、
 人智学的な「真の自我の発展」を目指す
 「知識と信仰の和解」を論じている。

シュタイナーとユング③

ゲルハルト・ヴェーア『ユングとシュタイナー』（英語版）より
【ロバート・サルデロによる序文】

●基本的な視点

基本的な方法：「共観（synoptic）的方法」

単に両者の思想を比較・対照するのではなく、
魂と精神、深層と高み、無意識と覚醒意識といった対立する極を、
解決せずに緊張させたまま保持することで、
新しいものが生まれるという方法。

ユング自身が用いた手法であり、
シュタイナーの「12の異なる視点を持つ」姿勢とも通じている。
この緊張の中から生まれるのが、
聖杯（Grail）を象徴とする精神心理学である。

※訳註：シュタイナーの12の世界観について
GA151『人間の思考と宇宙の思考』において
人間の意識の成長と多角的な視点を養うための
12の世界観について論じている（12星座とも対応）。

観念論 (Idealism) 牡羊座：
新しい理念を打ち出し、精神的な種をまく力
合理主義 (Rationalism) 牡牛座：
理性によって思考を形作り、体系化する力
数学主義 (Mathematism) 双子座：
二元性や比率、数的秩序を把握する力
唯物主義 (Materialism) 蟹座：
物質という硬い殻の中に生命を閉じ込め、形態化する力
感性主義 (Sensualism) 獅子座：
外部の感覚的な輝きをそのまま受け入れる力
現象学 (Phenomenalism) 乙女座
現れたものを注意深く観察し、整理する力
実在論 (Realism) 天秤座：
主観と客観の均衡を保ち、実在を認める力
動力主義 (Dynamism) 蠍座：
表面の下で働く隠れた力や破壊・再生の力
单子論 (Monadism) 射手座：
独立した個（点）を目指して矢を放つような思考
霊魂論 (Spiritism) 山羊座：
物質の背後にある霊的な核を凝視する力
霊気論 (Pneumatism)：
水瓶座 普遍的な霊的息吹を周囲に広げ、循環させる力
心魂論 (Psychism) 魚座：
全てを包み込み、魂の内的な深みに溶け込ませる力

●要点

○聖杯の象徴と精神心理学の定義

- ・聖杯は魂の器を表し、精神世界から必要なものを開いて受け入れる受容性（receptivity）を意味している。
- ・精神心理学とは、体を伴った意識的な魂生活を育て、精神界に開かれたものとする実践であり、自分・他者・世界への愛の行為として行われる。
- ・ユングは「魂の側」（内面、イメージ、深層）、シュタイナーは「精神の側」（世界への実践的働きかけ、未来志向）をそれぞれ体現している。
両者を緊張させたまま保持することで、真の統合が生まれる。

○重要テーマ

- ・二重意識（double consciousness）

普通意識と霊的意識、
魂の内面性と世界での活動性を同時に生きること。
これは死者とのつながり体験を通じて両者に芽生えた
未来の人間意識である。

- ・欲望の浄化と愛

聖杯に盛られる「血」は欲望の象徴。
浄化され神聖に向かう欲望こそが重要。
両者とも個人的欲望を超える変容を遂げたが、
弟子たちはしばしばこれを見落としてしまう。

- ・魂と精神、I（自我）とSelf（自己）

明確に区別せず緊張を保つ。
魂はイメージと過去（運命）、
精神は活動と未来（使命）として捉え、両方を活かす。

- ・方法の統合

ユングの積極的想像・夢分析・転移体験と、
シュタイナーの瞑想・内省的訓練を組み合わせ、
個人と集団の両方で魂を鍛える新しい実践を生む。

○提言と警告

人智学者が魂仕事を軽視して内容だけを外部化したり、

ユング派が魂の深みに浸って精神界を避けたりする危険を指摘。
 真の精神心理学は、死者・霊的存在との関係を意識し、
 過去の説明（fate）だけでなく
 未来からの形成（destiny）にも開かれ、
 愛の力によって浄化される実践でなければならない。

最終的に、この統合はキリストの神秘とも深く結びつき、
 制度化された宗教ではなく、意識の構造そのものを変える
 「キリスト教的精神心理学」の可能性を示唆している。

ダンテの『神曲』のように、
 対立を保持することで愛が流入する道を、
 私たちは今、歩み始めなければならない。

●本文

過去15年間、私は心理学に新しい方向性を定着させようと尽力してきました。その取り組みの中心にあったのは、C・G・ユングの魂の心理学（魂に焦点を当てた心理学）と、ルドルフ・シュタイナーの精神科学（人智学）を結びつけることでした。この創造的な統合によって、精神界と霊界、そしてそれらとの関わりの中で人間の意識がいかに形成されるかを完全に認識した、新しい心理学が誕生すると私は信じていたのです。

ですから、ユングの重要な伝記の著者であり、人智学者でもあるゲルハルト・ヴェーアが本書を執筆したと知ったときの私の興奮を、想像してみてください。彼の著書を何度も読み返すうちに、私のこれまでの年月は無駄ではなかったと確信しました。なぜなら、ここについて、人智学者と深層心理学者の双方が評価できるような、両者を繋ぐ著作が現れたからです。

さらに、この素晴らしい本で扱われている問題は、これら2つの運動の実践者だけでなく、すべての人に当てはまる「生きている問い」でした。私たちはどのように生きれば、霊的な領域に対して心を開き、受容的になれるのでしょうか？ 自分の魂の奥底で何が起きているのかを、どうすれば知ることができるのでしょうか？ 他者や自らの仕事、そして世界に対して、どのようにすれば魂を込め、精神的な意図を持ってアプローチできるのでしょうか？

現代において、心理学は非常に誤解されています。心理学は、セラピー（治療）の試みと見なされるか、あるいは物理科学を模倣しようとして（大抵は失敗している）あまり意味のない科学分野と見なされているかのどちらかです。

ユングのおかげで、この分野は高められ、「心理学」という言葉は、魂の学問としてある程度復権しました。真の学問とは、単なる学術的な関心領域をはるかに超えるものです。人は学問を身につけ、その中に入り込み、自らがその学問そのものになります。そうやって初めて、それは自分自身を知り、世界を知るための方法となるのです。

そしてシュタイナーのおかげで、この魂の学問を、全宇宙における人間の位置づけと働きを理解するという文脈の中に置く可能性が生まれました。ユングとシュタイナーのすべてを、内面的かつ体験的な方法で徹底的に突き詰めることから生まれ得る心理学とは、実践的な心理学です。それはセラピーの診察室だけに閉じこもるものではなく、むしろ意識的な魂の人生を生きるという営みなのです。

もし人が自己知への取り組みに少しでも足を踏み入れるなら、全世界、ひいては存在の全体における自らの位置づけをイメージし直すことがすぐ必要となります。しかし、私たちのほとんどは、これを自分ひとりの力で行う能力を持ち合わせていません。そのため、多くの人が「境界の場所」に身を置くことになりま。もはや大衆意識に支配されてはいないものの、足場もなく、自らの進路を操る能力もないまま、ひとり取り残されてしまうのです。

その時私たちは、現代を導く神話——すなわちテクノロジーの神話、唯物論の神話——に自分がもはや属していないことに気づきます。私たちはどこへ向かえばよいのでしょうか。私たちは、新しい神話、つまり「自分たちが何者であるか」の理解が意味を成すような、大きな想像力を必要としています。中世において、ダンテはまさにこのような魂のコスモロジーの全体を提示しました。彼はそれをキリスト教の伝統、言語、実践のなかに表現しました。なぜなら、それらが、私たちが自らの居場所を見出せるような「大きな全体像」を伝える手段として、彼の要求を満たしていたからです。そのような宇宙論は私たちを解釈してくれます。つまり、私たちが何者であり、何をしており、どこから来て、どこへ向かっているのかを教えてください。

ユングとシュタイナーの両者は、私たちが自らを魂豊かな存在として見つめることができる宇宙論（世界観）を提示してくれました。だからこそ、両者ともに生涯をかけて研究する価値があるのです。私たちは、この二人が「ある点では一致し、別の点では分岐するシステム」を提供しているに過ぎないと考えことで、自らの課題を安易なものにしてはなりません。また、単にどちらに従うべきかを決めようとしてもいけません。両者とも「追随者」を非難し、むしろ自らの取り組みに触発された「独立した実践者」が現れることを望んでいたのです。

本書『ユングとシュタイナー』は、この二人の創造的な個人（それぞれが世界に決定的に新しいものをもたらした人物）を単に比較しているだけではありません。そのようなアプローチも興味深いかもしれませんが、それではもう一つの学術研究が生み出されるだけに終わってしまいます。本書はそれよりもはるかに先へと進んでおり、その到達点は、ヴェーアが「共観的（シノプティック）」メソッドと呼ぶ採用された手法に関係しています。ヴェーアは、二つのシステムの「外的な要素」を並べてそれぞれの類似点や相違点を探るのではなく、それぞれの「核心にある意味」を互いに戦わせるように配置しているのです。

その緊張感から、何かが新しく生み出されます。ユング自身、この手法が精神（プシュケー）の本質そのものに属していることを知っていました。彼はこれを何度も用いています。この手法には、解決を求めようとすることなく、二つの相容れない立場を共に維持し続ける能力を培うことが要求されます。そうして初めて、新しい何かが現れるのです。シュタイナーも同様のことを提唱しており、同じ問題に対して12の異なる視点を維持する能力を養うよう助言していました。さらに、シュタイナーの講義は矛盾に満ちていますが、それは、これらの矛盾が新しい意味を孕むようになる「目覚めた想像力」を持って彼の著作に没入することを求めているからなのです。

『ユングとシュタイナー』はそのすべての功績にもかかわらず、この手法を極限まで押し進めているわけではありません。この序文において、私はこの手法をさらに先へと推し進め、新しい心理学、すなわち、解決を求めることなく「深層心理学」と「人智学」という対立物の緊張を維持し続けることから浮かび上がる「精神的心理学（スピリチュアル・サイコロジー）」の輪郭を示し始めたいと考えています。

ここで関わってくる対立は極端なものです。それは、可能な限り最高度に発達した「目覚めた意識」を、最も深いレベルの「無意識」へと結びつけることに他なりません。この緊張をさらに悪化させているのは、人間を捉えるこれら二つの方法が、薄い表面一枚（目隠し）程度の違いでしか隔てられていないという事実です。その一見すると薄い隔たりの内部へと踏み込んでいくとき、私たちは同じものの両面を発見することになります。つまり、深層心理学と人智学を、本人たちも気づかぬうちに結びつけている「中心的な要

素」が存在するのです。この結合こそが、これら二つの文化的創造物の中心的神話としての「聖杯のイメージ」なのです。

『神秘学概論』のなかで、シュタイナーは人智学を明確に「聖杯の科学」として語りました。彼が言わんとしたのは、もし人智学が「地球へと働きかける宇宙の科学」であり、同時に「宇宙へと働きかける地球の科学」であるならば、人間はその関係性のまさに中心に位置しているということです。一方、ユングは徹底的な西洋人であり、彼の中心的神話もまた聖杯でした。ユングは聖杯に関する非常に鮮明な夢を見ており、それはヴェーアの本書の第11章に記述されています。彼がこの夢を見たのは長旅でインドを訪れていたときであり、その周囲の環境のすべてが、文化や象徴、神話について彼が語るべきすべての正しさを証明しているかのように思われた時期のことでした。

「魂の現実」に根ざした道と「精神の現実」に根ざした道、この二つが交わることで飛び散る火花から浮かび上がり始める新しい心理学は、「聖杯の器」によって象徴されるものとなるでしょう。この象徴は、その多面的な側面のひとつとして、私たちに「精神的な魂（意識魂）」の姿を示してくれます。器そのものは、自らを開いて受容的になり、精神界から必要とするものを何でも受け取る「魂」を象徴しています。このイメージは、私が語っている精神的心理学を完璧に表現しています。それは同時に、魂への愛と精神への愛との間で緊張を維持し続けることによって生じる、心理学の潮流をも表しているのです。私はその心理学を次のように定義します。

精神的心理学とは、肉体化された意識的な魂の人生を発達させ、その人生を精神的な領域に対して開かれ受容的なものにするための実践的な営みである。これは、自分自身、他者、そして世界に対する愛の行為として行われるものである。

シュタイナーは聖杯神話の「精神（霊）」の側に従い、ユングは「魂」の側に従いました。両者の持つ大きな魅力は、その「探求」にあります。探求のイメージが持つ途方もない動機付けの力を、私たちは過小評価することはできません。それゆえ、ユングとシュタイナーの双方において、私たちは世界の現状に対する絶え間ない批判と、直近の過去を脱ぎ捨てて人類の未来のために魂と精神の双方の視点を確立しようとする強い促しを目にすることになります。しかし、彼らの取り組みが「探求」として捉えられない限り、これら二つの非常に強力な人類の未来像は、それぞれ教条的な（ドグマに囚われた）弟子たちを生み出す結果に終わるに違いありません。

聖杯の器のなかに何が入っているかということも、同様に考慮されなければなりません。それは「血」であり、欲望のまさに本質を象徴するイメージです。欲望は不可欠なものです。ですから、魂の欲望や精神の欲望が扱われずに放置されると、それは背後からあなたを襲うことになります。それは、私たちが「創始者たちが望んだこと」と思い込んでいるものと誤認され、結果として、私たち自身の吟味されていない欲望と混同されてしまうのです。

しかし、聖杯の血は「キリストの血」でもあります。したがってそれは、個人的な欲望と混同されることなく、全面的に神聖なものへと向かうことができる「浄化された欲望」を表しています。ユングとシュタイナーの両者は、自らが従う欲望に個人的な汚れができる限り混じらないよう、自己変革を遂げました。この二人が、自らの見解が世界に受け入れられることを望む、凄まじい野心家でもあったことは疑いようがありません。しかし、彼らの追従者たちは、自分自身のなかにある欲望という要素や、何よりもまずこれに取り組むことの必要性を、愚かにも無視しがちです。彼らは、師の教えの内容を取り入れさえすれば、自分自身の欲望がそこにどう関わっているか気づかないまま、立派な人智学者や立派なユング派になれていると思いつているのです。

人智学においては、追従者の欲望は偽りの形で浄化されがちです。人智学者たちは、まるで自分には肉体がなく、すでに純粋な精神であり、世界がまさに必要としているものを届けているかのように振る舞うこと

がよくあります。一方、深層心理学においては、欲望を浄化する必要性などにはまったく気づかないまま、魂を追って深淵へと降りていく体験にただ酔いしれていることがよくあります。そこには、それが「魂」であるという理由だけで、良いものに違いないという愚かな信念のもと、その深淵の内容に身を委ねてしまう誘惑があるのです。

欲望に取り組むということは、解決を求めることなく、解決不能な緊張を維持し続けることを要求します。血の欲望に取り組む、その欲望を聖杯の器のなかに納めるための、私たちの文化における主要なモデルは、シュタイナーでもユングでもなく、ダンテかもしれません。『煉獄篇』の全体は、対立物を解決することなく共につなぎ留めておくことに、明確に関わっています。悔恨は歓喜との間で、傲慢は謙遜と、瞑想は行動と、永遠に対する責任は時代的な必要性に対する責任との間で、緊張の中に維持されます。この対立物の戯れが、最終的に魂を精神的な領域へと開くのです。

したがって、私たちはユングやシュタイナーに見出されるものよりも、さらに偉大な心理学をダンテのなかに見出せるかもしれません。あるいは、シュタイナーが極めて真面目に「最も偉大な人間」と呼んだダンテの先導に従うこともできるでしょう。それは、シュタイナーとユングを対立物の緊張の中に置き続けることを意味します。そして、そのような緊張が存在する本質的な理由は、ダンテが示しているように、これこそが「愛」の入り込む唯一の方法だからであると気づくことです。その愛とは、私たちのいかなる欲望よりも偉大な愛です。

私たちは、愛することができる可能性を賛美するものの、自ら愛を行っているわけではありません。私たちの欲望はあまりにも混乱しているため、自分中心の欲望から離れて愛することはできないのです。愛の持つ浄化の力は、不可能な矛盾を維持し続けることによって創り出される隙間、すなわち「魂の空間」を通じて入り込んでくるのです。

ここで議論に「愛」が入り込んでくるのは、ユングとシュタイナーを緊張（葛藤）の中に置き続けることから浮かび上がる「精神的心理学」において、愛こそが中心的な次元だからです。愛とは単なる感情ではなく、精神的な魂（意識魂）の行動のエッセンス（本質）そのものです。それこそが、精神的な魂の行う営みなのです。愛とは、すでに浄化された欲望のことではありません。それは、浄化されつつあるプロセス（過程）にある欲望のことなのです。

ユングは、自らのサークル（身内の輪）や魂への関心を越えた外の世界には、ほとんど関わりを持ちませんでした。一方でシュタイナーは、世界と非常に深い関わりを持っていました。彼は教育、医学、農業の新しいシステムを創り出し、絵画、オイリュトミー、建築、演劇の新しい形態を生み出しました。また、「キリスト者共同体」として知られる宗教運動にインスピレーションを与え、新しい社会秩序（社会有機体三分節化）を思考し、その他多くの文化的取り組みに従事しました。ユングを特徴づけるのは、それなしには魂の人生に身を捧げることが不可能であるような「内面性」です。彼の自伝の全体は内面的な伝記、すなわち、まったく新しい形態の伝記である「魂の回想録」として書かれています。これに対してシュタイナーの伝記は完全に外面的であり、あまりにも客観的であるため、率直に言って退屈なほどです。それは秘教的な（エソテリックな）霊的伝記のジャンルに属するものであり、そうしたジャンルでは、著者が自らの人生を三人称で語ることも珍しくありません。

したがって、ここにも維持すべき一つの緊張（対立）があります。「内面性としての魂」と、「世界へと出ていくこととしての精神」です。魂とは私たちがかつていた場所であり、記憶の深淵であり、想像力としての記憶です。精神とはたちが向かう場所であり、「いまだ来ざるもの」、そして世界の中で「これから確立されるべきもの」なのです。

注意深く読むと、ユングとシュタイナーの伝記を比較したヴェーアの章は、精神科学（人智学）と深層心理学の内面的な起源に関する、驚くべき事実を明らかにしています。シュタイナーとユングの双方が、死者

に対して特別で深い関係を持っていたのです。わずか4歳の時、シュタイナーは亡くなったある女性の訪問を受けました。この体験は彼に決定的な印象を残しました。彼はのちに、亡くなった人々との繋がりを維持し続けることの重要性について数多くの講義を行い、そのための具体的な方法さえ提示しました。ユングもまた、死者にまつわる体験をしていました。ヴェーアは、ユングが（同じく4歳の時に）父親が執り行う葬儀を目撃した経験と、それがユングに与えた奇妙な印象を指摘しています。彼の深層心理学は、同じく死者との交信を行っていた彼の従姉妹と共に実施した「連合実験」から始まったのです。

死の神秘はこれら二人の人物に強い感銘を与えましたが、その現れ方は異なっていました。シュタイナーのビジョン（霊視）においては、亡くなった女性が彼に助けを求めています。この体験が、彼の中に「死者との繋がりを維持するための方法とは何か」という科学的な関心を芽生えさせました。一方のユングは、死者の領域に対して恐れと魅力を同時に抱くという印象を残しています。彼にとって死とは、生を去るという死の悲劇性を完全に自覚している者に特有の、死の神秘との「闘い」という意味合いが強かったのです。

これら二人の人物が経験した死の体験を内面的な緊張（葛藤）の中に保持するとき、精神的心理学への道が開かれます。それは、シュタイナーとユングの両者を特徴づける「二重の意識」の道です。二人とも、死者との絶え間ない関係、つまり死者が実際に「そこに存在する」という関係を生きていましたが、これは通常の意識ではなく、「能動的想像（アクティブ・イマジネーション）」の行為として理解されなければなりません。そして二人とも、世界との絶え間ない繋がりを生きていました（もっとも、シュタイナーの方がより効果的にそれを行っていたように見えます）。

両者の中には、二つの形態の意識が並存しているのを見て取ることができます。ユングにとっては「第一人格」と「第二人格」であり、シュタイナーにとっては「通常の意識」と「霊視意識」です。この二重の意識こそが、未来の意識なのです。それは聖杯神話に属するものであり、私たち全員が発達させるよう求められているものに他なりません。私たちは、魂において精神的な領域に対して意識的に開かれ、同時に世界の中で効果的に働くことを求められているのです。

もし私たちがこの二人の人物を、残された人類のための先駆者である「秘儀参入者」として見るならば、これこそが彼らが人間の可能性として導入したものです。私たちは、世界のために働くと同時に、魂と精神のために働くことができます。それこそが、精神的心理学が促す意識のあり方なのです。ユングとシュタイナーはこの意識を持って生まれ、それぞれ異なる方法でそれを生きました。次のステップは、完全な自覚を持ってこの意識を発達させることです。この二人の秘儀参入の体験のおかげで、それが今や可能となっています。

この「二重の意識」は、死者たちによって二人のなかに参入せしめられたとすることができます。精神的心理学の本当の創始者とは、亡くなった人々であり、今なお世界に対して関心と愛を持ち続けている人々です。彼らは、ここで何が起きているかに凄まじいほどの関心を寄せています。彼らは、私たちが「地球の衣」をまとった魂と精神の存在として生きるという試練に、果たして応えることができるかどうか心を砕いているのです。

二重の意識の道は、神秘主義の伝統（秘教の伝統）においてよく知られています。例えば、エウリピデスの悲劇『バックスの信女』の中にそれを見ることができます。一方的に合理主義的なペンテウスが、肉体化された想像力の神であるディオニュソスに圧倒されたとき、彼は空を見上げて突然「二つの太陽」を目にします。この二つの太陽は、地球の意識と、死（の領域）の意識が並存していることを意味しています。これはペンテウス自身には（最終的に「狂乱する信女たち」によって八つ裂きにされてしまうため）大して役には立ちませんでした。共同体を再生させることにはなりませんでした。

私たちが「想像力を豊かでイマジナルなもの」とし続けるためには、ユングの心理学が必要です。そして、この想像力を世界の形成に適用するためには、シュタイナーの精神科学が必要です。この二つが合わさ

ることで、私たちの通常の地球的な意識の太陽と並んで、意識的で想像力豊かな「もう一つの太陽」を輝かせることが可能になるのです。

過去において、この「二つの太陽」の体験は極端な危険を意味していました。ペンテウスのように、人は理性を失い、狂気へと突き落とされてしまうかもしれないからです。だからこそ、正しい能力が形成されなければなりません。私たちは、この種の意識へと唐突に飛び込むことはできないのです。私たちは変容という激しい苦しみ（陣痛）を経る必要があり、その能力を根本的に変革するための方法は、ユングとシュタイナーの著作の中に見出されます。彼らの文章は、他のあらゆる文章とは完全に異なっています。それを読み通して、以前と同じままでいられる人などいません。ただし、彼らの著作は、単に知性だけで読むのではなく、自らの存在のすべてを懸けて、二つのアプローチを「共にあるいは連動させて」読まなければならないのです。

精神的心理学とは、この連動したアプローチに取り組んだ結果として生まれるものです。それは「死の意識」に根ざしており、自らの利益のためではなく、何かに向かって取り組むことの重要性、さらにはその方法を意味しています。もちろん、私たちは他者の利益のために寛大に働いているように見える時でさえ、自分自身の利害が関わっており、大抵はそれが最前線にあることを知っています。しかし、理論というよりも一つの「意識の様式」である精神的・心理学的視点は、自らを絶えず解体し続けること——生きる方法としての「死」——の中で機能します。これこそが、魂を精神界に対して真正に開かせ、それらの世界に誠実に奉仕することを可能にする唯一の方法なのです。

人間の意識の中心的な要因としての「死者の存在」と密接に結びついているのが、「無意識」という用語をめぐる問題です。シュタイナーにとって、意識には多くの種類が存在します。いくつか例を挙げるだけでも、覚醒意識、夢意識、睡眠意識、トランス意識などがあります。そこには「無意識」などというものは存在しません。それは単に、覚醒意識が「他の形態の意識」について語る際の方便に過ぎないのです。さらに、これらの異なる意識は単なる「状態」ではなく、「存在」です。

例えば、一見すると何もないところから現れるように見える心理的症状は、時に、忘れ去られてしまった「死者の生きた存在」に起因することがあります。つまり、意識の世界の一つは「死者の霊たち」なのと言えます。これは、ある内容を含んだサイキック（精神）な構造があり、その内容の多くが水面下に残されているとするユングの言及よりも、はるかに強力な表現方法です。心理学の正当かつ適切な領域には、死者だけでなく、無意識の中にいるのではなく、それぞれが異なる意識の世界を構成しているあらゆる種類の存在たち——諸霊、天使、神々——が含まれているのです。

もし私たちが、精神的な魂（意識魂）の能力を発達させることなく、これらの異なる存在たちの世界について語ろうとするなら、それらを完全に物質的・文字通りに捉えてしまうか（人智学のアプローチをとる場合）、あるいは単なるイメージ（象徴）と見なししてしまう（深層心理学的視点から取り組む場合）というリスクを冒すことになります。精神的心理学のゴールである精神的な魂は、文字通りのもの（現実）と想像上のもの（イマジナル）との間に明確な境界線を設定しません。これらの存在は実在するのでしょうか？ はい、実在します。では、それらは物質的であり、因果律によって私たちに影響を与えるのでしょうか？ いいえ、違います。

ある意識の世界の存在たちが私たちに影響を与えるとき、私たちは「その意識そのもの」になります。それは、岩が肉体にぶつかるように、何か外的なものが私たちに侵害するという問題ではありません。また、彼らの想像力豊かな存在が魂のコンテンツ（内容物）として作用するという問題でもありません。魂とは内容物を入れる「容器」ではなく、精神的な現実を感知するための「固有の能力」そのもののなのです。私たちは「魂と精神を持った存在」なのではなく、私たち自身が「魂であり精神である存在」なのです。

私たちは肉体も持っていますが、そうだとすると、魂と精神が私たちの物理的な存在の中で幽霊のように彷徨と漂っているわけではありません。ユングが依然として多かれ少なかれ囚われていたような「因果律」に縛られるのではなく、私たちは「共鳴（シンパシー）と反感（アンティパシー）の潮流の法則」の中で働くことに慣れていかなければなりません。そのような潮流の存在が、私たちの内に響き（レゾナンス）を創り出します。私たちはハーブのようなものであり、魂と精神の世界の存在たちが音を奏でるとき、私たちもまた鳴り響くのです。そして、この共鳴が可能なのは、私たちがその存在たちと「同じ本質（物質）」でできているからに他なりません。

人智学における身体の構造と機能の理解には明確な区分（分節化）があり、死者やその他の霊的存在のような完全に非物質的なものが、いかにして物理的な症状を引き起こすほどに私たちに影響を与えるのかを明らかにしています。生きている身体は物質で構成されていますが、同時に、非物質的なものとの媒介となる微細な「エーテル力（生命力）」によっても構成されています。エーテル体（生命体）には、理論的なものは何もあります。それはすべての精神的・秘教的な伝統によって認められているものであり、さらに、物理的身体の「生命を形成するプロセス」を通じて極めて容易に体験することができます。シュタイナーが精神分析を批判し、それが調査しようとしている現実のあり方にアプローチするための適切な道具を欠いていると語るとき、彼はとりわけ、この「エーテル体への理解の欠如」を指しているのです。

エーテル体という概念の有無によって、ユングとシュタイナーの間では、心理的症状に対する理解が完全に異なったものになります。ユングは常に症状を「元型のイメージ」へと遡らせ、病気の中に神々や諸霊、あるいは死者を探し求め、そうした姿を常に「魂の中のイメージ」として語ります。シュタイナーも同じ症状を見て、それを神々、諸霊、あるいは死者へと遡らせますが、彼はこれらの霊的存在が「人間に直接作用している」と捉えるのです。

ユングの視点がなければ、これら霊的存在による作用は、まるで彼らが（少し影が薄いという点を除けば）地球上の存在と何ら変わらないかのように、文字通り（物質的）に捉えられてしまうでしょう。その一方で、シュタイナーの視点がなければ、霊的存在が実際に「そこに存在している」という真実が回避されてしまうのです。

シュタイナーとユングの間の、解決不能な対立物の緊張（葛藤）がもたらすもう一つの現れは、「魂」と「精神」に関するものです。過去15年間、私がどこで教えていても、誰かが必ず「魂と精神を定義し、その違いを教えてほしい」と尋ねてきました。しかし、そのような質問はどこにも行き着きません。なぜなら、それはすでに知られ、感じられている何かを、通常の知性のレベルへと移行させてしまうからであり、そこでは答えることができないのです。その問いは、問いの本質へとより深く踏み込んでいくこと以外に、この混乱から抜け出す何らかの方法があると思ひ込んでしまっています。

本書は、魂と精神の間の緊張関係へと、私たちをさらに先へ、そして深くへと連れて行ってくれます。本書の中でも、この二つが時に混同されていることがあります。例えば、本書の第二部に収録されているハンス・エルハルト・ラウアーのエッセイでも、この混同は続いています。しかし、その緊張を維持し続けることで、ある種の明晰さがもたらされ始めます。

例えば、魂の「内面」と精神の「内面」は異なるものであるにせよ、魂と精神の双方が「内面的体験」として自らを表すことが分かります。ユングは、幼少期にいかにして「地球の神秘（大地の謎）」へと参入したかを語っています。シュタイナーは「宇宙の神秘」へと連れて行かれたことを語っています。両者とも「元型的な現実」について語っています。しかし、ユングが常に関心を寄せているのは、魂の人生のコンテンツ（内容物）として現れる「元型的なパターンや姿」です。一方、シュタイナーが常に関心を寄せているのは、人間と地球を形作る「元型的な存在」そのもののことです。

もう一つの違いとして、ユングにとって精神（プシュケー）とは「イメージ（像）」であり、イメージとは夢の内容であれ神話の内容であれ、特定のコンテンツ（内容）として理解されます。もちろん、ユングのイメージに関する捉え方はこれよりも洗練されており、彼の著作を読むと、イメージとは単なる絵画的な内容というよりも、むしろ「それを通じて内容が現れてくるもの」であるという明確な実感が得られます。これに対してシュタイナーにおけるイメージとは「活動」であり、霊的存在の実際の現れが形作られ、あるいは形となって現れてくる「純粋な活動」そのものです。イメージとは、私たちが霊的存在の活動に対して立ち会うための、最初の方法なのです。シュタイナーにおけるイメージは決定的に「霊的な概念」ですが、ユングにおいてはそれこそが「魂の核心」なのです。

私たちは、魂と精神をあまりにも急進的に切り離すことから生じる「分裂（不和）」に目を向けるのではなく、これら二つの方向性を関係づけ続けることの「豊かさ（生産性）」に焦点を当てることができます。

魂の視点だけを取り出すと、世界の文脈における人間の存在を忘却することに繋がります。ユングは魂を世界から封じ込めてしまい、知らず知らずのうちに自己没頭（自己という殻への閉じこもり）を助長してしまうのです。その一方で、シュタイナーの視点だけを取り出すと、文字通り（物質的）に捉えがちになり、想像力を欠いた、時にマニャックな（熱狂的な）形で霊的な性質を持つ実践的な取り組みを世界に導入しようとするようになります。そして、意識的な魂の仕事ではなく、芸術的な取り組みこそが魂の要求に応えてくれるだろうと期待してしまうのです。

精神の視点と魂の視点の双方を共に維持するとき、そこに「精神的心理学」が成立します。ユングとシュタイナーの中にその先駆者を持つこの新しい心理学は、その取り組みの核心に「精神的な魂（意識魂）」を据えています。魂と精神の間の緊張を維持することは、世界の中で働くための実践的な方法を提供する試みであり、それこそが「精神的文化」の形成に他なりません。

私たちの課題は、精神的な領域が私たちを通じて世界へと働きかけるのを許容する能力を培い、それを意識し続けることに関わっています。この仕事はどのように行われるかは、常にインスピレーション（靈感）に対して開かれたままです。それは、シュタイナーが語ったことを単に世界へと当てはめる（適用する）ような仕事ではないのです。

魂と精神という二つの視点は、別の形でも現れます。それは、ユングが内面的発達の高めとした「自己（セルフ）」への目覚めという概念と、シュタイナーが求めた「自我（I）」の発達です。これら二つのゴールは同じものなののでしょうか？ ヴェーアはこれらを結びつけていますが、私は両者を安易に同一視（瓦解）させるのを避け、二つの間に本来ある緊張関係を維持する方がよいと考えています。

「自己（セルフ）」とは、精神の境界にある魂として想像できます。「自我（I）」とは、魂の境界にある精神として想像できます。「自我（I）」とは、精神の視点から見た自己（セルフ）です。自己（セルフ）とは、魂の視点から見た「自我（I）」なのです。自己（セルフ）とは、個性のレベルへと高められた普遍的（集合的）な魂です。「自我（I）」とは、全体と繋がった個性なのです。

自己（セルフ）と「自我（I）」の間の緊張を維持することは、人智学者たちを助けることになります。なぜなら彼らは、魂の感覚を欠いていることが多いために、シュタイナーの言う「自我（I）」の理解を、自分自身の「エゴイズム（利己主義）」としばしば混同してしまうからです（シュタイナーもまた「エゴ」という言葉を複数の意味で使っています。彼が「エゴ」という用語を使うとき、時に「自我（I）」を指していることもあれば、時に通常の意味でのエゴを指していることもあります）。同様に、この緊張はユング派の流れを汲む人々をも助けることになります。なぜなら「自我（I）」という概念は、言語的にはいささか不自然ではあるものの、そこには魂の人生に執着することが神秘主義へと繋がるという誤解を防ぐだけの「確固たる堅実さ」があるからです。

「自我（I）」、「自己（セルフ）」、「自分（self）」、そして「エゴ（小文字の自己／自我）」を縛り合っている結び目は、今なお残っています。「自我（I）」と「自己（セルフ）」を同一視すべきではないのと同様に、「自分（self）」と「エゴ（ego）」も同一視すべきではないようです。また、私たちは定義によってその結び目を解こうとしてはなりません。ユングとシュタイナーにおいてこれらの概念が衝突するのを見ることの価値は、まさにそれらが「私たちの内なるもの」として衝突するからに他なりません。私たちは、私たち一人ひとりにとって生きている問題である、この問題への道を見出さなければならないのです。

例えば、「自我（I）」として記述される精神的な個性という観点から、エゴ（自我）との具体的な関係を徹底的に突き詰める必要があります。エゴの捉え方は、ユングとシュタイナーで全く同じというわけではありません。シュタイナーにとって、エゴとは私たちの内にある精神的個性の「反映（投影）」であり、私たちの真の精神的存在の、いわば「影」のようなものです。

「自我（I）」へと到達するためには、意識的な内面的発達が必要です。それには、欲望の浄化、創造的思考に対する現臨（プレゼンス）の育成、そして想像（イマジネーション）、霊聴（インスピレーション）、直観（インテュイション）への意識的な目覚めという長いプロセスが必要となります。一方、ユングにとってエゴとは、魂の人生の全体の一部でありながら、自らをその全体であると思いつまんでいるものです。決して完了することのない、自己実現（個性化）の全プロセスへ意識的に参入することが、自己（セルフ）が現臨する地点へと到達するために要求されます。自分がいつエゴの中にあり、いつ自己（セルフ）の中にあるのかを知ることが、個人的にも文化的にも計り知れない重要性を持っています。「自我（I）」を特徴づける経験の種類と、自己（セルフ）を特徴づける経験の種類について、明確な感覚を持つことが不可欠なのです。

「内なる世界」と「外なる世界」の関係もまた、突き詰められるべきもう一つの緊張関係です。シュタイナーはよりアリストテレス的な系譜に属し、ユングはプラトンの系譜に属しています。したがって、ヴェーアが試みたようにユングとシュタイナーの仕事を並べるにあたって、私たちはこの緊張を維持し、できる限り明確にその中を見通そうとしなければなりません。

シュタイナーにとって、人間に関して研究すべき領域は三つあります。「感覚の領域」、「感覚の体験が魂の人生の中でいかに生き続けるか」、そして「人間がいかにして認識するか」です。このアプローチは、ユングのものとは明らかに異なっているように見えます。ユングは、今なお魂のコンテンツとして生き続けている「元型的な存在の行為」へと遡るような、あらかじめ存在するパターン（既成の型）にはるかに関心を寄せています。

アリストテレス的視点とプラトンの視点の対比はこれ以上ないほど大きいものですが、シュタイナーが自身の三つの研究領域を徹底的に突き詰めるアプローチは、完全に、そして全面的に「内面的」なものです。それは主観的なのではなく、内面的なものです。例えば、彼はまず外的な視点から感覚とその機能を記述することから始めるかもしれません。しかし、彼は決して外的なものだけで立ち止まりません。彼は内的な視点から感覚することを探索し続け、私たちを人間の内的な見方、そして宇宙全体の内部からの見方へと、巧みにさらに先へと連れて行ってくれるのです。彼は単純なアリストテレス主義者ではありません。彼が私たちを徐々に内面へと移行させるとき、それは非の打ち所のない論理を伴って行われます。そこには、神秘主義という選択肢（逃げ道）は存在しないのです。

人智学を特徴づける「内面的な取り組み方」は、二元論とは完全に無縁です。人間の物理的な内面性にアプローチすることは、「内」対「外」を意味しません。「外」に対しても、内面的な方法でアプローチすることは可能なのです。例えば、人間の内面的な物理的存在に関するシュタイナーの最も重要な研究のなかに、人間の生理学の研究があります。彼は、人間全体が「物質界、魂の領域（霊魂界）、精神界（霊界）」という三つの世界に参加していると捉えることで、二元論を回避しています。これらの世界は、それぞれ同

じだけの正確さをもって探求できますが、それは非二元論的な知覚と思考の能力、すなわち「自我（I）」の発達を通じてのみ可能なのです。

二元論は、「世界は一つしか存在しない」という誤り（錯覚）に基づいています。そのため、精神を身体から切り離し、身体を物理的世界の一部として位置づけてしまいます。また、魂や精神を、身体や世界から切り離してしまい、その後に「並行論」や「還元論」といった奇妙な結びつきを探し求めることになるのです。

ユングもまた、内なる世界に対して完全に忠実です。厳密に言えば、彼はプラトンのというよりもカント的です（元型心理学者のジェームズ・ヒルマンは、ユングのプラトンの側面を強調し、カント的な側面を過小評価していますが）。ユングが「魂」を強調することは、いささか誤解を招きやすいものです。なぜなら、彼の心理学では魂の宇宙論（コスモロジー）的レベルにまで到達することはなく、到達することもできないからです。彼は常に魂の「コンテンツ（内容物）」に関心を持っており、それらの内容が「実在する」霊的存在の行為を反映しているかどうかについて語ることは、完全に避けています。

これが重要であるのは、シュタイナーの助けを借りることで、ユングをよりプラトンの想像力の中へと「再設定」することが可能になるからです。それは単に、元型的な姿を「実在するもの」として、それ自体で存在しているものとして捉えるという問題です。しかし、その一步を踏み出すにはシュタイナーが必要です。なぜなら、単に「そうだ」と主張するだけでは不十分だからです。霊的存在の本質を明らかにするような「意識の能力」が発達させられなければなりません。シュタイナーはそうした能力を発達させ、他の人々も同様にそれらが発達させる方法について広範に書き残しました。

カントは、客体（対象）、すなわち超越的な「物自体（ものじたい）」には絶対にアクセスできないため、経験的世界、つまり有限なものや「現象（現れ）」のなかに自らを限定しなければならないと述べました。ユングは自身の心理学の揺るぎない土台として、カントの言う現象世界への制限を採用し、英知界（物自体の世界／ヌーメノン）への扉を閉ざしました。だからこそユングは元型の存在を仮定したものの、「心理学的」に語り得る範囲を超えて、それらの実在性について語ることは決してしなかったのです。したがってユングにとって、真理への問いは閉じられているか、あるいはよく見積もっても、完全に悪用されやすい特殊な真理の概念——すなわち「内なる真理」——を持つにとどまっています。

自らの仕事を内なる魂のイメージに限定し、完全に経験主義（実証主義）にとどまるというユングの決定を暴いてしまうと、ユングとシュタイナーの比較はそこで終わらなければならないように思えるかもしれません。シュタイナーは霊的存在の実在性について多くを語っています。彼の見解では、それらは完全に自律した存在であり、私たちはこれらの現実を知覚するための器官として魂を発達させることを要求されています。しかし、ユングが内面的人生にもたらす現象学的な「洞察力」があるからこそ、その緊張関係は維持される必要があるのです。

シュタイナーは超越的なもの（物自体）に対する明確な概念を持っており、いかなる科学者にも匹敵する観察の正確さとともに、信じられないほどの描写能力でそれを追い求めています。さらに彼は、目に見えない精神的な領域を観察するための能力を発達させています。しかし彼は、自らが見たものを「諸霊との内面的な対話」として報告するのではなく、私たちの意識が彼の体験した現実中最も近づくことができる「理念」として報告するという方法をとっています。私たちは、シュタイナーが精神界を直に体験したその瞬間の直接的な報告（生の声）を持っているわけではありません。私たちは、それらの領域を描写するものとして彼が提示した「理念」を持っているのです。

しかし、ほとんどの人にとって精神的な領域は閉じられたままであるため、シュタイナー自身が「それらを何度も検証しなさい」と繰り返し述べているにもかかわらず、彼の理念をそのまま鵜呑み（額面通りに受容）にしてしまう極めて強い傾向があります。しかし、それらを検証するためには、それらの理念の「内

部」へと入り込む能力が必要となります。単に通常の意識でそれらを吟味するのではなく、私たちの内でそれらを体験しなければなりません。つまり、私たちは「理念の魂」の中へと入っていかなければならないのです。

ここで、ユングの存在が絶対に不可欠なものとして関わってきます。ユングは、物事の内部への道を見出し、その内部に「住まう」方法を教えてくれているのです。ユングがいなければ、人智学は「内面的な理解を伴わない、一人の並外れた個人の理念を教条的（ドグマ的）に当てはめるもの」になってしまう、と私は提起します。それらのアイディアの「魂の本質」を発見する能力を持たないまま、理念を適用することは、それらを他者へと「押し付ける（強制する）」ことになってしまいます。長期的に見れば、そのような押し付けは、例えば「生活が豊かになるから」という理由で私たちに押し付けられている「テクノロジー的な世界観」の強制と、何ら変わらない結果を招くことになるでしょう。

何年も前、私は人智学者たちの大きな集まりで講演し、ユングとシュタイナーに根ざした「精神的心理学」の基本的な見取り図を紹介したことがあります。しかし、その演説はほとんど熱意をもって迎えられませんでした。実際、多くの聴衆が不快感で胃をひっくり返しているような気配すら察せられたほどです。一人の人物が力強く立ち上がり、「シュタイナーがいるのだから、私たちには心理学など絶対に必要ない」といった趣旨のことを言い放ちました。集まった人々の多くが、この盲目的な意見に同意したのです。

それにもかかわらず、シュタイナーが魂を探求したという事実があるからといって、私たちがシュタイナーの発見をただ受け入れるだけで、魂の現実「内面から」立ち会う必要性から免れるわけではありません。シュタイナーは魂のあり方について多くのことを示してくれますが、今度はそれを「生きる」という問題が生じます。そしてそれは、魂の内部への道を見出すことによつてのみ可能なものであり、それこそがユングの独壇場なのです。

ここで、重要な問いが浮上します。もしユングがカントに依拠しているために直接的な「現象」のなかに閉じ込められているのだとしたら、なぜ、極めて鋭敏なユング派のヴォルフガング・ギーゲリッヒが試みたように（彼の著書『魂の論理的な生命』を参照）、ヘーゲルのような人物ではなく、シュタイナーに「霊的存在の現実へと突き抜ける道」を求めるべきなのでしょうか。

その答えは、ヘーゲルはカントよりもユングにとって優れた哲学的基盤を提供するかもしれない一方で、彼のアプローチは魂にとって破壊的なものになり得るからです。イメージ（像）への意識が、抽象的な思考によつて失われてしまうのです。魂と精神の双方を包括できる必要な基盤を提供してくれるのはシュタイナーだけであり、それ自体が心理学の内部における基盤なのです。ヴェーアがこれら二人の人物の仕事を並べ、意味のある比較を行うことができるという事実そのものが、彼らが魂と精神という共通の基盤を分かち合っているからに他なりません。

神話、記憶、物語の「絵画的な内容（コンテンツ）」という観点から魂を捉えるという問題は、残念ながらヴェーアによつてもある程度、永続させられてしまっています。彼はテキストの中でしばしば内容指向の言語を使用しているからです。魂に内容物（コンテンツ）があるかのように語るとは、イメージで満たされた一種の「容器」のような印象を与えます。しかし、魂とは少なくとも部分的には、絵画的な内容そのものではなく、「像を描く行為」に関わっているのです。神話もまた、絵画的な内容ではなく、像を描く営みの世界です。――もし、神話が今なお生きているものとして捉えるならば、ですが。もし神話がすでに完成し、死に絶えているのだとしたら、確かに私たちに残されているのは、その死体、すなわち絵画的な内容だけです。

内容としての「絵」ではなく、能動的なプロセスとしての「像を描くこと」という観点から想像することを学ぶのは、私がシュタイナーから学んだ最も重要なことの一つです。魂に関する彼の最も深遠な著作『人智学・心智学・霊智学』（訳註：GA115）の中で、彼は魂がどのように機能するかを記述しています。

その最も重要な側面のひとつは、魂が「未来からの時間流」を捉えるということです。これこそが、私の言っている「像を描く行為」です。それは内容（コンテンツ）に関わるものではありません。なぜなら、私たちに向かってやってくる未来には、いまだ内容がないからです。そこに内容が生じた瞬間、それは必然的に「過去」からのものとなります。これはエーテル体の中で起こる反射（投影）であり、そこには個人的なもの、あるいは元型的なものを含んだ、過去からの写真（絵）のようなものが存在しています。しかし、この未来からの時間流は、本物であり実在するものです。ここでの未来とは、私たちの存在の「可能性」に関わっています。

この概念は縁遠いものに聞こえるかもしれませんが、決してそうではありません。私たちは、自分が下すあらゆる動き（動作）とともに、この時間流を体験しています。私が立ち上がり、ドアに向かうとします。深い意志の領域において、これから起こることは、それが起こる前に「すでに起こって」います。それが単なる知的なアイデア（思考）に過ぎないのだとしたら、私はドアにたどり着くことすらできないでしょう。ドアに到達することは、私がドアに近づくにつれて、私の「動きのなかにすでに存在している」のです。この小さな例は、私たちの人生の全体が、いかにして未来から私たちへと近づいてくるかを示す、縮小版に過ぎません。

私たちが実践する個々の行為は、内面的に私たちの人生の全体と結びついており、その全体に属するものとして自らを表します。しかし、その全体の多くはいまだ起こっていません。これこそが未来からの時間流であり、シュタイナーは『身体・魂・精神の心理学』の中で、この潮流を魂の「アストラル体」と呼びました。それは、まさに「生成のプロセス（これから成ろうとする過程）」における像の描写です。魂の生命は、宇宙（コスモス）の全体から形作られます。「アストラル（星の）」という言葉は、「星」を意味する語根に由来しています。この世界は全体（一なるもの）ですが、開かれており、未完成なのです。

これに対して、内容としての像——記憶、そして元型的なイメージも同様——は、過去から、すなわちすでに起こったことからやってきます。シュタイナーはこの潮流を魂の「エーテル体」として語っています。エーテル体のイメージはすでに完成し、終わったものです。それらは必ずしも死に絶えて消え去ったわけではありません。今なお生き続けてはいるものの、新しい意味に対しては「閉じられている」のです。

したがって、私は魂が「宿命」に浸ること——私たちがいかに過去によって形作られるか——と、魂が「運命」に浸ること——私たちがいかに未来から形作られるか——を区別しています。ユングの心理学はより前者に属し、人智学はより後者に属します。精神的心理学はその両者を同時に扱いながら、その違いを意識しようと試みるのです。

例えば、私たちの人生において、通常の経験から大きく逸脱するような出来事に遭遇したとき、それは「宿命（過去からの因果）」なのでしょうか、それとも「運命（未来からの招き）」なのでしょうか。これらの言葉はしばしば混同して使われますが、明確に異なる体験です。それぞれの現れに立ち会う方法を知っていれば、その違いは非常にクリアになります。

この点において、深層心理学は人智学から学ぶべきことが多くあります。これまでの心理学が「過去による説明」へと偏ってきたために、心理学の半分が置き去りにされてきたかのようです。重要なのは、イメージ（それが元型的・神話的なイメージであっても）を、過去へと後ろ向きに振り返るのではなく、それが「これから何がやってくるかをいかに暗示（予兆）しているか」という観点から見つめることなのです。

個人の内面的発達の方法もまた、解決を求めることなくユングとシュタイナーの両者を共に維持し続けることが実りをもたらす、もう一つの領域を明らかにしています。ユングは、現代の西洋世界において利用可能な唯一の秘儀参入への道として「分析」を挙げました。彼はシュタイナーのことをよく知らなかったか、

あるいは、シュタイナーの仕事が何よりも「個人の内面的発達之道」であるという事実を、侮蔑的に認めようとはしなかったかのどちらかです。

ユングとシュタイナーの方法は、一見すると無関係のように思えます。ユングにとっての方法とは、他者の分析です（ただし、自分自身が分析を経験していることが前提となります）。そして分析の内部においては、夢を用いた絶え間ない内面の仕事であり、イメージに近づき、その生きた臨在を感じ、神話を通じてイメージを増幅させ、そして何よりも、本物の変容が起こる場である「転移」に関わっていくことです。さらに選ばれた一部の人のためには、「能動的想像（アクティブ・イマジネーション）」の仕事があります。これは、個性化のプロセスに参入した人々が取り組む仕事です。

一方、シュタイナーの方法は「瞑想」です。これは、意識の完全なコントロールを維持する能力、すなわち、瞑想者が意図的に置いたもの以外は何も意識の中に侵入させない能力を発達させることに焦点を当てています。そして、そこに置かれるべきものとは、感覚世界（目に見える世界）とは無関係な思想やイメージです。例えば、感覚世界には存在しない「薔薇十字」について瞑想するかもしれません。このイメージをしばらくの間、他のものを一切入れずに意識の中に保持した後、集中していたその内容を消去し、「空虚な意識」を創り出します。そこから先はただ待ちます。なぜなら、意識は空虚なままで留まることはないからです。そこに霊界からの応答として、ひとつのイメージ、思想、あるいは洞察が入り込んできます。

シュタイナーは、一日の出来事を後ろ向きに振り返る「回顧」や、思考・感情・意志をコントロールするためのエクササイズ、カルマ（業）を体験する能力を発達させるための特別な瞑想実践など、他にも数多くのエクササイズを推奨しています。また、彼が手がけた医学、農業、教育といった個々の領域に対するシュタイナーの提言にも、それぞれ特有の瞑想エクササイズが含まれています。

これら二つの方法の根本的な違いは、ユングの瞑想的な仕事が主に「セラピストという他者の存在」の前で行われるのに対し、シュタイナーのものは「私的な空間」で行われる点にあります。人智学においては、グループでの瞑想ワークは推奨されず、それどころか軽視されることさえありました。

ユングとシュタイナーの方法を見る際、最も重要なのは、瞑想がどのように構築されているか（構造）ではなく、どのような「能力」が発達させられつつあるのかを見つめることです。シュタイナーはこの点について、実際非常に明確に語っています。例えば、先述した薔薇十字の瞑想のような実践において中心となるのは、思想を「構築する力」と、それを「消去するために要する力」です。ここでは、まるで魂が「筋力トレーニング（エクササイズ）」によって強さを培っている筋肉であるかのようです。これによって、実践者は意識的な方法で魂の中に留まることが可能になります。

ユングの方法を注意深く見るなら、最も本質なのは「個人とセラピストとの関係性」です。これこそが、分析、夢の仕事、能動的想像を推し進めるための「強さ」が集中する場所です。当然、素材（夢やイメージ）に取り組むことから多くが得られますが、魂の変容は「転移」に関わっています。そして転移とは、自律的に現れる「愛の臨在」を、それを行動に移すことも、個人的なものへと還元することもなく、そのまま感じ取る能力の別名に他なりません。

実は、シュタイナーの方法の中にも、この「転移」に似た要素が存在しています。その要素とは、すべての瞑想は強い「畏敬の念」を持って行われなければならないというシュタイナーの主張です。ここにおいて、いまだ見ぬ未知の他者との間に「愛の関係性」が確立されます。シュタイナーの瞑想は孤独なものであり、ユングのものは共同体的なものであるとする解釈は、最初は最も強く印象に残るものの、私は間違った方向へ進んでいると考えます。

これら二つの方法を共に維持するとき、私たちは「精神的心理学」の方法へとたどり着きます。精神的心理学はグループでの瞑想ワークを価値あるものと認めます。それは主にユングから、瞑想の仕事において

「感情」の要素は「思考」の要素と同じくらい重要であるという認識を受け継いでいるからです。同時に、シュタイナーの先導に従うことで、精神的心理学はセラピーを文字通り（物質的・医学的）に捉えることを拒み、むしろ個人の瞑想ワークを本来的に「治療的」なものであると見なします。

グループという文脈のなかで、個人の瞑想ワークを行うことは完全に可能です。ここでのエクササイズはシュタイナーが提案したものに近く、魂の「内なる強さ」を培うことが最も重要視されます。そして、エクササイズの結果はグループ内で話し合われます。これが魂の「感情の次元」を発達させ、同時に「共に魂の研究を行う方法」としても機能するのです。

精神的心理学の方法とは、セラピーを（安易にエゴ中心主義へと陥りがちな）「個人的な事柄への集中」から脱却させると同時に、あらゆる治療的な癒やしの核心である「魂と精神の力」を強化する、新しい形態のセラピー（治療的ワーク）なのです。

本書の付録として収録されているハンス・エルハルト・ラウアーによる貴重な講義は、ユングとシュタイナーの関係をいささか異なる視点から捉えています。私は、深層心理学と人智学を土台とする精神的心理学への貢献という観点から、この素材からもエッセンスを汲み取りたいと考えています。

最初のエッセイは、深層心理学に対して共感的な一人の人智学者が、深層心理学のビジョン、意味、そして方法をどのように解釈しているかを巧みに描き出しています。一見すると、このエッセイは深層心理学の教科書に書かれているような内容に似ているように思えるかもしれませんが、しかし、その思考の内面的な明晰さと、ラウアーがどのようにゆっくりと自身のテーマを構築していくかに注目してください。

ラウアーはまず、深層心理学の潮流の中に「個人（個性）」と「集合的な諸力（共同体の力）」との戯れを見出します。その戯れの極性は、集合的な端をフロイトが代表し——「性」として知られる集合的な力を強調しました——、個人の端をアドラーが代表しています。そしてユングは、その中間のまさに中心に着地したのです。ユングにとって、病気とはこれらの極性が衝突したときに現れるものです。彼の深層心理学は、魂の集合的な諸力や元型を探索するとともに、自律的な象徴（シンボル）の形態がいかに意識へと浸透し、それらの形態を意識的に受け入れる能力がないときにいかに病気を引き起こすかを研究しています。ラウアーは、ユングが「集合的な内なる諸力」と「個人」との完全な分裂を防ぐ助けになっていると捉えています。

シュタイナーもまた、この分裂を癒やすことを望んでいましたが、ユングとは全く異なる角度からアプローチしました。彼の仕事は、エゴ（自我）が意識的な「自我（I）」、すなわち、世界の中で実践的な霊的活動に従事しながら深淵から湧き上がるものに精神的な意味を与えることができる「精神的個性」へと至るまで、個人の能力を発達させることに他なりません。これは確かに、極めて壮大な要求（課題）です。

これらの能力が精神的に発達させられないとき、その分裂はさらに広がることになります。シュタイナーが開始した実践的な文化的形態——教育、医学、農業、絵画、科学、演劇、オイリュトミーなど——に従事する多くの人智学者たちにとって、そこには、気づかれないまま深刻な障害（心の不調）を発達させてしまう本来的なリスクが存在しています。シュタイナーの仕事の様々な領域の「内容（コンテンツ）」は取り入れられるものの、多くの場合、「瞑想の仕事」は取り入れられません。瞑想の実践を実際に行っている人々でさえ、現代文化における「個人」と「集合（社会）」の間の分裂の大きさと深刻さを計算に入れていないか、あるいは自分たちはどういうわけかこの分裂から免れていると感じているのです。しかし実際のところ、分裂はあまりにも進んでおり、魂の仕事（心理的な自己吟味）を伴わずに精神的な実践を行うことは、極めて危険であると私は考えています。

人智学の中には、シュタイナーが創り出したものの内容は、それ自体で世界に有益をもたらすことができるという考え方があります。しかし、魂の人生との意識的な繋がりを欠き、単にその内容（コンテンツ）だ

けでなく「意識的な人生の活動」との内面的な繋がりを持たないまま単独で取り出されるなら、人智学は世界一般と同じ「眠れる意識」から作動している、単なるもう一つの「コンテンツ（知識）」に過ぎなくなってしまう。

さらに、自分自身の内に実際の基盤を持たない「精神的権威」を引き合いに出すことは、意識へと漏れ出てくる急増する（無意識の）諸力を伴うとき、致命的なものとなります。この権威主義的な姿勢は、虐待、残酷さ、教条主義（ドグマティズム）、偽りの優越感、そして人智学コミュニティの外の世界からの自己孤立へと繋がる可能性があるのです。

ラウアーによれば、深層心理学は現代科学と同じ種類の意識から機能しています。つまり、人間の魂に関する理論や仮説を立て、それをセラピーを通じて調査するということです。ここでラウアーは、ユングの持つ現象学的な基盤や、転移の持つ中心的重要性を見落としています。その一方で、ラウアーによれば、人智学を取り入れる人々は、瞑想の仕事を通じて、身体から独立して魂を内面的に体験できるようになります。この瞑想の仕事は、潜在的に「完全に意識的な自我（I）」へと繋がります。魂の集合的な諸力から湧き上がるいかなるものにも立ち向かうことができると考えられているのは、まさにこの完全に意識的な「自我（I）」なのです。

エゴ（自我）の人生の多くは、意識されていません。これこそが人智学の本当の発見（真実）なのですが、人智学の内部においてさえ気づかれないままになっています。エゴの無意識的な側面と、魂の集合的な領域との間では、常に内面的な「共謀（馴れ合い）」が起こっています。私たちの通常の正気のエゴは、高慢、自己肥大、怒り、嫉妬、その他多くのものに満ちています。何よりも、エゴとは「恐怖の構造」そのもののなのです。フロイトが提示した約50個に及ぶ見事な「自我防衛機制」のリストは、エゴの人生の無意識的な側面を実に見事に描写しています。エゴは、否認、投影、内摂取（同一視）といった、完全に無意識的な方法で自らを防衛するのです。

シュタイナーが推奨した瞑想の養生法を最後まで忠実に実行するごく少数の人々にとって、深淵からやってくるいかなるものにも立ち向かう能力を持ちながら、世界の中で実践的かつ精神的な仕事を行う可能性は存在します。しかしながら、人智学的なトレーニングは、内なる「魂の仕事」におけるいかなる指導も伴わず、深層心理学の重要性への認識もなく、シュタイナーが推奨した瞑想の仕事における指導もほとんどないまま進められています。これらの事柄において、学習者はたった一人で切り抜けるよう放置されているのです。そのためエゴは、通常の形でのエゴの満足や発達から孤立したまま残されてしまいます。魂の集合的な諸力との健全な繋がりを見出すための援助からも切り離され、「自我（I）」へと至るための指導からも切り離されているのです。

人智学の道は、それ単独で進む場合、瞑想エクササイズを通じて「魂を身体から独立したものとして体験すること」を人に要求します。また、思考の内容（コンテンツ）ではなく、「思考の活動（プロセス）」そのものに参入できることを要求します。この発達が、想像的意識（イマジネーション）を開くのです。さらにこの道は、感情の人生の内容ではなく「感情の活動」そのものへと参入することを可能にするエクササイズを経ることを要求します。そこでは、霊聴（インスピレーション）が「実際の霊的存在の活動」として体験されます。その後、意志の内容ではなく「意志の活動」そのものへと参入することを可能にするエクササイズを経ます。そこでは、直観（インテュイション）が「霊的存在との直接的な参与」として体験されるのです。

これらすべてが、魂の人生において最も深刻な分裂が起こっており、個人主義が君臨し、魂の集合的な諸力との繋がりが一切失われているような「現代文化のただ中」で起こり得ると期待されているのです。

深層心理学と人智学の創造的な統合である「精神的心理学」は、あらゆる種類の精神的（霊的）な仕事を行うための、必要不可欠な前段階（準備）として、内なる魂の仕事（自己吟味）を捉えています。ここでの

「前段階」とは、例えば音楽家が行う「ウォーミングアップ」のようなものを意味しています。どれほど高度な演奏技術を持つ音楽家であっても、指の練習をなくすことはできません。現代において、自らの魂の人生と健全な繋がりを持たず、またその繋がりを持続するための多大な努力を怠ったまま、瞑想のエクササイズに取り組もうとすることは、まったくの愚気の沙汰なのです。

どのようにして心を開き、これらの繋がりを持続していくか、そして具体的に、自分が世界の中で行う仕事（職業）の内部において、いかにしてそれを実践していくか——これこそが精神的心理学の仕事に他なりません。実践であり行動である精神的心理学は、すべてのシュタイナー学校（ヴァルドルフ）の教員養成プログラム、すべての人智学医学のトレーニングプログラム、そしてその他すべての人智学的な取り組みの環境として組み込まれる必要があります。

ラウアーのエッセイを熟考するうちに、読者は「精神的な魂（意識魂）の領域で働くためには、身体から離れなければならないのだ」という印象を持つかもしれません。ラウアーはそれを強く暗示しています。しかしラウアーも（そしてヴェーアも）、シュタイナーの仕事には「身体の諸器官の想像（イマジネーション）へと参入し、それらを通じて、その根底にある魂と精神の世界へと入っていく能力」を発達させることに関する、丸ごと一つの次元が存在していることに触れていません。人智学においては、その大半が「身体から自由な（離脱した）瞑想」を好んで宣伝しますが、それは必ずしも要求される方向性ではないのです。シュタイナーの瞑想エクササイズや、彼の著書『オカルト生理学』で報告されているそれらのエクササイズの成果へと遡ることで、ユングとシュタイナーの「共観的（シノプティック）な比較」を発達させることは、極めて実り豊かなものとなるでしょう。

私は、ユングとシュタイナーの共観的な比較、そして精神的心理学の形成における、最も困難な問題についての熟考を避けるつもりはありません。それは、人智学の中心における「キリストの位置づけ」と、ユングにおける「キリストの重要性」についてです。

残念ながら、人智学においてこの焦点（キリスト）は、ほぼ常にセンチメンタルなもの（感傷的な教理）へと落とし込まれてしまっています。シュタイナー自身はそれをセンチメンタルに扱ってはいません。彼は、キリストの真の神秘の一端を示す深遠な精神的体験を経て、人智学の方向性を再定位しました。しかし、シュタイナーの仕事の「瞑想的な側面」が実践されないとき、人間の中心的な自由は、シュタイナーの秘教的キリスト教の視点によって正当化された、目隠しをされた（隠蔽された）「宗教」へと滑り落ちてしまいます。人智学は（激しく否定されはするものの）キリスト教という宗教として実践されているのです。多くの人智学者は、どちらの恩恵も都合よく得ようとし、自らを完全に自由な「自我（I）の存在」として体験したいと望む一方で、キリストが自分の内に働いているとも信じたいのです。——キリスト教徒であるか否かを問わず、誰もが生き延びる中で抱えている「キリスト教的信仰の重荷（固定観念）」のすべてを、自ら突き詰めて整理することなしに。

ユングもシュタイナーも、キリスト教の信仰を求めてはいません。しかし両者とも、キリストのあり方に向き合うことなしに、死者や諸神、そして精神界の心理学を語ることは「まったくの愚気の沙汰」であると認識しています。ユングはプシュケー（精神）の宗教的性質を明確に強調していますが、魂はキリスト教の神話だけでなく、他にも多くの元型的な神話の影響を受けているという立場を維持しようとしています。しかしそれでも彼は、キリスト教の神話のなかに「プシュケーの未来」を見えています。すなわち、個性化（自己実現）とは「自己（セルフ）」の具現化であり、キリストとは「自己（セルフ）の元型」であるという見方です。

ユングの視点を単に受け入れるだけでなく、それについて、そしてキリストに関するユングの著作について深く瞑想するならば、彼の語ることは十分に理にかなっており、人智学者たちが直面している障壁を突き抜ける道を提供してくれます。この障壁とは、通常の「エゴ（自我）」の意識からは、他者によって外部から与えられたもの（既成の教義）を通じてしか、キリストを捉える方法がないという事実には他なりません。人

智学におけるリスクとは、キリストという宗教的観念との関係性を形成しておきながら、それを「発達した精神的意識による直接体験」であると思い込んでしまうことです。真の「自我（I）」の能力の発達が必要とされているのであり、もしそれが実現するならば、私たちはまさに「キリスト教的精神的心理学」を手にすることになるでしょう。

シュタイナーの著作は、キリストを完全に人間化してしまう宗教や、逆に完全に神格化してしまう宗教よりも、はるかに強力で鋭敏なキリストの概念を普及させてきました。しかし、シュタイナーの語ることを単にそのまま受け入れる（鵜呑みにする）ことは、宗教へと転落することを意味します。（実のところ、宗教へと転落すること自体に悪いことは何もありません。はるかに悪いのは、それが起こったことに「自分自身で気づかないまま」転落することです。）

ここで関心があるのは、ある特定の信仰構造をひとつの学問（ディシプリン）へと押し付けるのとは異なる、「キリスト教的精神的心理学」と呼べるようなものが存在し得るのか、という点です。この点において、シュタイナーはユングよりも助けになりますが、シュタイナーの全体の仕事を徹底的に突き詰める必要があります。それは、意識、自然界、文化や文明、地球、そして肉体・魂・精神における人間の「構造と意味そのもの」が、キリストという諸力によって浸透（充満）されていることを見出すに至るという意味です。したがって、「キリスト教的精神的心理学」を持たないことなど不可能なのです。不可能なのは、「精神的心理学とは、キリスト教心理学と完全に同じものである」という事実を否定することだけです。

この序文の最後にあたって、このように語ることは、決して断定的な宣告を意図しているわけではありません。これは意図的な挑発であり、既存の、あるいは隠蔽された「制度的宗教」へと転落することなく、キリスト教的精神的心理学の細部を徹底的に突き詰めていこうという呼びかけなのです。

ハンス・エアハルト・ラウアー (Hans Erhard Lauer)

3つの講義

「魂の謎——深層心理学と人智学」①

- ・まえがき
- ・講義1「深層心理学の光に照らした人間の魂の謎」

●基本的な視点（講義1）

20世紀における魂認識の大きな進展として、
深層心理学の成果を概観する。

深層心理学は、魂の深層に光を当て、
現代の文化的危機を診断したが、それはまだ序の口で、
ルドルフ・シュタイナーの人智学は、深層心理学の真理を認めつつ、
さらに深い魂の次元（霊的領域）を開き、魂認識に新たな次元をもたらす。

●要点（講義1）

○深層心理学の成立

深層心理学は精神科医の実際的必要から生まれた。
ジークムント・フロイトによる精神分析を起点に、
アルフレッド・アドラー、C.G.ユングがそれを発展させた。
最大の貢献は無意識の発見であり、
19世紀までの心理学が意識中心だったのに対し、
無意識が人間の心の大部分を占め、
精神疾患の根本原因であることが明らかになった。

○無意識を知る手がかり

- ・日常の失言・失念
- ・夢（特に象徴的な夢）
- ・自由連想や誘導質問による現象

これらを総合的に観察することで、無意識の働きを理論化する。
方法論は自然科学に似ており、意識に現れる現象から
その背後にある無意識の「刺激」を推測する仮説的アプローチ。

○各学派の特徴

1. フロイトの精神分析

心の根本駆動力は性欲（リビドー）。
幼児期にすでに父殺し・母との結婚願望である
オイディプスコンプレックスが見られる。
社会・道徳による抑圧が起き、欲求が無意識に溜まると「鬱血」、
神経症やヒステリーとして現れる。

治療は抑圧の原因を取り除くこと。

2. アドラーの個人心理学

根本駆動力は自我の主張・権力への意志（劣等感の克服）。
人間は生まれながらに無力で劣等感を抱き、それを補償しようとする。
育児の失敗などで劣等感が過剰になると、
支配欲が抑圧され、病的な形で現れる。
治療は教育的に、幻想を現実と調和させる。

3. ユングのコンプレックス心理学

フロイトとアドラーの両方を部分的に認め、より包括的な理論を構築。
人間の心には二つの流れがある：

- ・個人化・意識化の流れ（個我＝Ego）
- ・種としての集団的・無意識の流れ（集合的無意識）

元型（Archetype）や象徴（父なる神、大母神、三位一体、神人など）は、
世界の宗教・神話に共通して現れる集合的無意識の表現。
これらは意識では抽象概念として現れる。

○現代の文化的病理

20世紀に精神疾患が爆発的に増加した理由は、
意識（科学・個人主義）と無意識（宗教・象徴・集合的）の分裂。
近代は「神は死んだ」と象徴世界を迷信として抑圧し、
集合的無意識を無視した。
その反動として、個人では幻覚・神経症が、
集団ではスワスティカ（卐）やファシズムなどの
擬似宗教的マス・ヒステリーが起きた。

○ユングの解決策：個性化

心の二つの極（昼の側＝意識・個我 / 夜の側＝無意識・集合的）を
対立させたまま発展させるのではなく、統合・和解させること。

これにより、エゴを超えた新たな中心である自己（Self）が生まれ、
真の全体的人間が実現する。
これは古代の霊的指導者たちが目指した境地と同じ。

●本文・まえがき

多くの要望に応える形で、様々なバージョンや場所で最初に行われたこれらの講義を出版することになりました。最初の2つの講義のテキストはテープ録音から書き起こされたもので、編集は最小限に留めています。これにより、話し言葉の流動的なスタイルがそのまま残されています。3番目の講義の内容については、私のノートから要約した形でまとめています。

最初の講義で行った様々なタイプの深層心理学の概観は、大まかな指標を示すことだけを意図しています。この分野の文献は、支持者と反対者の双方によって非常に膨大なものとなっているため、ここで改めて網羅する必要はありません。私がこの点に触れたのは、魂の意識的な領域と無意識的な領域を区別したときに生じる謎という、本講義で議論したい問題を深層心理学が明確に浮き彫りにしたからに他なりません。

もちろん、人智学と深層心理学を比較することは不可能だと考える人々がいることも承知しています。その反対意見にはもっともな理由があるかもしれませんが、それにもかかわらず、私は3番目の講義の中で、そのような比較を試みるべき説得力のある理由を提示しました。結局のところ、これら2つの重要な研究手法が同時に生まれたのは偶然ではありません。両者は、たとえ認識のレベルが異なり、しばしば異なる方向へ進むとしても、私たちの時代の同じ深い衝動から湧き出ているのです。

ハンス・エルハルト・ラウアーバーゼル、1959年 春

●本文・講義1

「暗い哲学者」と呼ばれたヘラクレイトスが語ったとされる、次のような言葉が古代ギリシャから私たちに伝わっています。

「たとえ世界のすべての道を探索したとしても、
人間の魂の深さを解き明かすことは決してできない。
魂という存在は、それほどまでにすべてを包括しているのだ」

これは人間の魂を知ることの不可能性を指摘しています。しかしその一方で、伝説によれば、デルファイの神殿の入り口に刻まれていたというもう一つの格言もあります。

「汝自身を知れ」

この後者の言葉は、私たちが魂を完全に理解することは決してできないと知りつつも、人生のさまざまな時期において、できる限り魂の神秘へと突き進むよう私たちに勧告しています。これは、人間の本性によって私たちに与えられた責任なのです。

実際、歴史を通じて、人間の努力と思索にとって魂の謎ほど重要な難問はほかにありませんでした。時代の流れの中で、人々はこの謎の答えを求めて多くの方法を見出し、多くの道を探索してきました。そして、魂という無限の領域において、何度も何度も多くの新しい発見をしてきたのです。

この一連の講義における私の目的は、20世紀に「魂の認識」の領域でもたらされたいくつかの成果についてお話しすることです。

一方では、「魂の科学（心理学）」が過去3、4世紀と比べ、今世紀（20世紀）に力強い飛躍を遂げ、著しい深みを獲得しました。これは主に、20世紀初頭に創始され、科学界に広く受け入れられた「深層心理学」によってもたらされたものです。深層心理学は、現代の精神世界に極めて大きな影響を与えてきました。

そして他方では、まったく同じ時期に、ルドルフ・シュタイナーの人智学もまた、その歩みを始めていたのです。

人智学は、深層心理学とは異なる方法、異なる道をたどりながらも、魂の認識に並外れた深みをもたらしました。それがもたらした深みは、私たちが深層心理学に負っているものさえも凌駕しています。

今晚は、深層心理学の研究によって達成された最も重要な成果の概要から始めたいと思います。明日には、ルドルフ・シュタイナーの人智学が提示する魂の像をご紹介します予定です。ここでのどちらの描写もかなり大まかなものにとどまらざるを得ないため、3回目であり最後となる講義では、これら二つの概念のより細かな点について比較検討します。

周知の通り、深層心理学はジークムント・フロイトによって「精神分析」という名で創始されました。それはアルフレッド・アドラーによって拡張され、さらにカール・グスタフ・ユングの「コンプレックス心理学」によって発展を遂げました。この探求領域全体の発展における出発点となったのは、人間の魂における「無意識」の発見でした。

この発見は、それ以前に無意識がまったく知られていなかったという意味にとらえてはなりません。決してそのようなことはありませんでした。1870年代に出版されたエドゥアルト・フォン・ハルトマンの著書『無意識の哲学』を思い起こすだけで十分でしょう。ただ、前世紀の主要な心理学者たちが、無意識を人間の魂のあまり重要ではない部分とみなしていたにすぎません。そのため、彼らはそれをさらに探索するためのいかなる方法も開発しませんでした。

いわゆる「無意識の発見」が意味したのは、ある時点で、人間の魂全体における無意識の計り知れない重要性が認識されたということにすぎません。この認識によって、無意識を探索するための具体的な方法を開発することが急務となったのです。無意識の発見と、それをさらに探索する必要性のどちらも、深層心理学が誕生したその経緯に起因していました。

深層心理学の誕生は、実践的な精神医学のニーズに根ざしています。純粋な知識への関心から生まれたわけではありません。その創始者や実践者は全員、当時も今も精神科医であり、今日に至るまで、この分野のほとんどの研究は精神医学や心理療法のニーズに貢献しています。それにもかかわらず、その根本的な心理学の原則は広く認められるようになり、現代社会の考え方に極めて大きな影響を与えてきました。

当初、調査の対象となったのは健康な精神ではなく、病める人間の精神でした。「精神疾患はどのようにして生じるのか、そしてそれを癒すために何ができるのか」という問いが立てられたのです。

いわゆる無意識の発見は、神経症やヒステリーなどの精神疾患の研究において、その症状に関連している可能性のある身体的な状態（原因）が何も見つからなかった瞬間に起こりました。これは、19世紀の信念とは対照的に、これらの疾患の原因はもはや身体（特に神経系）の障害には求められず、精神そのものの中に求められなければならないことを意味していました。

さらに古い時代——中世から18世紀にかけて——には、精神疾患の人は悪霊に取り憑かれていると信じられていました。これはある意味で「霊的な説明」でした。そのため、人々は悪魔祓いによって悪霊を追い出そうとするか、さもなければ、患っている人々を単に閉じ込めたり鎖でつないだりしていたのです。

20世紀になると、身体的な原因は考慮されなくなりました。精神疾患の謎に迫る唯一の方法は、原因を精神そのもの、特に無意識の中に求めることでした。なぜなら、患者自身が自分の病気の原因について意識的な知識を持っていないだけでなく、観察する医師にとっても、うつ状態や幻覚、あるいは強迫的で不合理な行動といった症状が、精神の神秘的な深みから湧き起こり、患者を圧倒しているように見えたことは明白だったからです。

〔無意識の謎〕

ここで次のような問いが生じました。「その性質上、意識的な認識から切り離されている『無意識』の知識を、どのようにして獲得できるのだろうか？」

これが可能になるのは、通常意識の中に、無意識と特別な関係を持つ現象を見出せる場合だけです。そうした現象が見つければ、精神の無意識の領域がどのような性質を持っているのかについて、結論を導き出すことができるようになります。それらの現象は精神疾患の患者には確かに現れていましたが、それだけでは無意識との結びつきを証明する十分な証拠にはなりませんでした。

そこで、それとは対照的に、無意識に関する結論をより確実なものにできるような、別の現象を「正常な（健康な）」人の意識の中に探することが当面の課題となりました。フロイトの根本的な科学的業績は、通常意識の中に、いくつかの関連する現象を発見したことです。

その第一が、日常生活で発生する意図しない「失錯行為（フロイト的失言など）」です。これには、物忘れ、言い間違い、聞き間違い、誤った行動（し損じ）などが含まれます。もし私がある人について「彼は私の最高の友人（friend）だ」と言いたいのに、代わりに「彼は私の最高の敵（enemy）だ」と言ってしまった、ある時間と場所で誰かと会う約束をしたのにその約束を忘れてしまったりするとき、私の無意識の中にある何かが悪戯をしているように見えます。これは病気と呼べるようなものではなく、私たちの日常生活で起こることです。それでも、不吉な結果をもたらすことはあります。

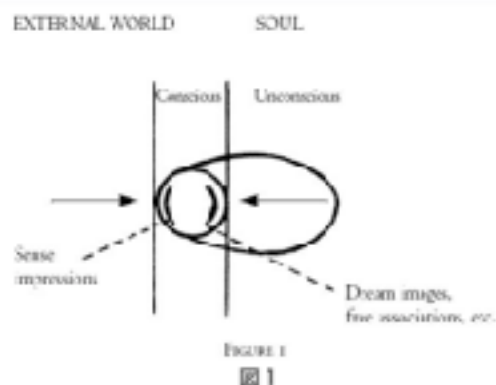
第二の現象は、夢の体験です。夢は、私たちの通常目覚めている意識（覚醒意識）から生じるのではなく、より薄暗い（朧げな）意識から生じます。一方では、私たちの夢の多くは単にその日の体験を反映し、それを「消化」するのを助けているだけだ、と正当に言うことができます。しかし他方では、しばしば「ありふれた」イメージに混じって、私たちににとって象徴的な意味を持っているように見える夢のイメージも存在します。それらは単にここ数日間の出来事だけでは説明できません。むしろ、精神の深層で進行しているプロセスの象徴的な表現であるように思われます。

第三の現象は、セラピスト（治療者）が患者に特定の誘導的な質問を投げかけることによって、人工的に引き出すことができる現象です。これにより、通常であれば無意識から自発的には出てこないような答えを引き出すことができます。

第四のグループには、ユングが患者の治療に広く用いた現象、いわゆる「自由連想」が含まれます。これは、内的な必要性に駆られて伝えたいと感じることを、言葉で語ったり、書き留めたり、描いたり、あるいは彫刻したりするよう、医師が患者に促したときに生じるものです。

深層心理学のさまざまな学派は、健康な精神と病める精神の双方におけるこれらすべての異なる現象を包括的に比較（対照）することによって、無意識に対する多様な解釈に到達しました。彼らが無意識を暴くために用いた方法は、現代の自然科学者が感覚世界の現象と人間の意識との関係を説明するために適用した方法と、本質的に同じものでした。これを簡単な図（図1）で説明します。

【図1】



(図1の) 上の小さな円は、私たちの意識の領域を表しています。それは一方の側で、外部の感覚世界と直接接しています。この外部世界と接する場所で、私たちは感覚印象——目に見える色彩、耳に聞こえる音調、匂いなど——を体験します。これらの体験が、感覚世界にある何かが何らかの方法で私たちの知覚器官に影響を与えることによって生じるのは疑いようがありません。

[夢のイメージ、自由連想など]

現代の自然科学は、私たちの意識の中に生じる温かさ、音調、色彩といった性質（クオリア）は、外部世界そのものには存在しないという見解をとっています。この見方によれば、外部世界は単に、本来備わっている力によってさまざまな方法で運動し、振動している「物質」のみで構成されています。これら物質の多様な振動が私たちの感覚に接触したとき、視覚や聴覚などが呼び起こされるのです。科学研究の課題は、これらの振動や運動のどれが、どの感覚印象を引き起こすのかを突き止めることです。この研究の成果が、物理世界の特徴と人間の意識との関係に関する科学的理論の内容を形成します。現代科学の見解では、私たちは物質世界に直接アクセスすることはできないため、これらの理論は必然的に単なる仮説、すなわち推測の性質を帯びることになります。私たちは自分自身の意識の限界の内に閉じ込められており、その限界を超えることはできないのです。

深層心理学は、私たちの精神における無意識を、まったく同じように捉えています。もともと、無意識は意識とともに人間の精神全体を形成しているように見えるため、物質世界ほど通常の意識から遠ざかっているわけではありません。それにもかかわらず、通常の意識の内側の面、つまり無意識と接触する境界こそが、私がこれまでに言及したすべての現象——日常生活で起こるし損じ（失錯行為）、夢のイメージ、自由連想、そして精神疾患の諸症状——を私たちが体験する場所であることは明らかなです。深層心理学は、これらすべての現象が、無意識が意識の領域に与える特定の刺激によって引き起こされると考えます。

しかし、深層心理学は、私たちの意識に現れる現象そのものは、無意識の中には存在しないと考えます。なぜなら、それらの現象自体は「意識化」されたものであるのに対し、無意識はその名の通り「無意識」だからです。

深層心理学研究の課題は、ある場合には夢のイメージを、別の場合には失錯行為を、また別の場合には幻覚を引き起こすような、無意識の中で起きている出来事を発見することです。そして、この研究の成果が無意識に関する理論を形成します。これらの理論は、物質世界と人間の意識との関係に関する自然科学の理論と同じように、仮説的な性質を持っています。

無意識に関する理論が初めて発表されたとき、それは科学界だけでなく一般社会にも衝撃を与えました。それらは、人々がそれまで抱いていた概念と完全に矛盾していたからです。最初の大反発を経て、科学者たちにその理論が受け入れられるようになったのは、ようやくその後のことでした。

[精神分析学と個人心理学]

ここからは、深層心理学のさまざまな流派の特徴について、まずはフロイトの精神分析学に焦点を当てて説明します。限られた時間のため、ここではフロイトが最初に発展させた初期の精神分析学の形態のみを扱います（後年、彼はこれに多少の修正と拡大を加えました）。

おそらくご存知のように、フロイトは、私たちが意識するようになる精神のすべての体験や活動は、根源的かつ基本的な推進力を表す一つの共通の根源に遡ることができると考えるに至りました。フロイトはこれを「欲求」や「快楽（リビドー）」、特に「性的衝動（性欲）」であると信じました。その結果、フロイトはこの衝動が、幼い子どもにさえ非常に高い度合いで存在していると考えたのです。彼は、この衝動が子どもにおいて、ギリシャ神話のエディプス（父親を殺し、母親と結婚した英雄）に象徴されるような「無意識

の願望」の形で表現されると考えました。男児においてはこのような形で、女児においてはその性別に応じた対応する形で、同様の願望が存在するとされたのです。

周知のように、人間の精神は、実際には性的衝動を満たす願望だけに占有されるような形では発達しません。その理由は、私たちが大人へと発達していく過程（ここでは個人だけでなく、人類全体についても言えます）において、私たちが無意識の状態から、より意識的な状態へと上昇していくからです。

この意識の光が増していくことと足並みをそろえて、基本的な衝動の洗練や精神的な成長——あるいはフロイトが言うところの基本的な衝動の「昇華」——が起こります。この発達の過程で、私たちの意識の中にはある種の理想や道徳的な価値判断が生まれ、生々しい性的衝動を満足させることを、粗野で、卑しく、あるいは罪深いことだとみなすようになります。

例外として認められるのは、性行為が人類の繁殖というニーズに奉仕することで正当化される場合だけです。さて、場合によっては、精神によるこの昇華のプロセスが十分に達成されないことがあります。しかし、社会のタブーや個人自身の道徳的信念といった外部の状況のために、これらの強い性的衝動を満たす可能性はありません。

その結果、ある人が強い性的魅力を感じる特定の人物に出会ったとしても、上述のタブーのために、その感情を認める勇気が持てなくなります。代わりに、それらの感情は無意識の中へと押し込まれます——フロイトの言う「抑圧」です。このようにして無意識の中に「鬱積」が生じ、この鬱積が過度になると、意識的な精神の中に病気として現れることがあります。固執観念（固定観念）や強迫観念、あるいは強迫行為は、患者に対して、隠された衝動を歪んだ形で満足させる役割を果たすことがあるのです。

かつてフロイトの弟子であったアルフレッド・アドラーは、人間の精神の本質について異なる解釈に到達しました。彼は、人間の魂の発達において最も重要な成果は、その根源が無意識にあるように見えても、「意識を獲得すること」であるという事実には焦点を当てざるを得ないと感じました。さらに彼は、人間の意識の本質的な特徴であり、動物の意識と一線を画すものは「自我（I）」であるという事実を目を向けなければなりません。私たちが体験し、行うすべてのことは、この「自我」に関連付けられています。私たちは「私は考える、私は知覚する、私は感じる、私は思い出す」などと言います。

アドラーは次のように語りました。

「もし人間の魂の発達の最終的な結果が『自我意識』の達成であるならば、それこそが魂の本来の目的であるに違いない。植物が最初に芽を出し、次に茎、葉、そして最後に花を咲かせ、実を結ぶのを見れば、これらすべてはこの最終的な結果を達成するために、いわば最初からプログラミングされていると想定せねばならない。人間の精神についても同じことが言えるという結論に達せざるを得ない。ここから、人間の魂における本質的な推進力は、性的衝動ではなく、『自我』を主張しようとする衝動、すなわち自己主張の衝動であるということになる」

さらにアドラーは、単に「自我」を発達させるだけでなく、世界の中でその「自我」が、個人に権力や影響力を与える重要なものとして認められる方法を見出すことも必要だと考えました。そこからアドラーは、精神における推進力はエゴイズム——ニーチェの言う「権力への意志」——であると結論づけたのです。

アドラーは、動物の発達と人間の発達を比較したときに、この信念をさらに強めました。生まれてすぐに生活に対処できるようになり、極めて短期間で生存に必要なすべてのスキルを身につける動物とは対照的に、人間は無力で何のスキルも持たずに生まれてきます。人間は、両親による長期的かつ入念な養育を必要とします。そして、直立歩行、言語、思考といった人間特有の属性はすべて、長い時間をかけて自らの努力によって獲得されなければなりません。

アドラーは、この長く退屈なプロセスの状況が、人間に周囲に対する「劣等感」を生み出すと考えました。人間は、他者からの敬意と承認を勝ち取ることを可能にする強いエゴイズムを発達させることによって、この劣等感を「補償」するのです。またアドラーは、正常な発達の過程において、この強いエゴイズムはある程度和らげられ、抑えられるため、魂の中に理想主義や他者との共同体感覚が生まれ、共同生活が可能になるのだと観察しました。歴史を通じて、共同生活はさまざまな形態で存在してきました。もしそうでなければ、人生は「万人の万人に対する絶え間ない闘争」になっていたでしょう。

しかし、一部の個人においては、強いエゴイズムの緩和、すなわち手なずけることが十分に達成されないことが時折起こります。アドラーによれば、これは子どもに野心や出世主義、自己愛（ナルシズム）を助長した「誤った養育」に起因する場合もあれば、身体器官の異常（そのほとんどは遺伝的な弱さ）に由来する場合もあります。この身体の弱さが、若い人に強化された劣等感を引き起こし、それが支配への特に強い欲求によって「過補償」されることになるのです。

概して、このような人物は、他者を支配したいという自分の願望を実行に移すには自分あまりにも無力であると感じているか、あるいはそのような行動の不適切さについて独自の考えを持っています。そのため、その人物は衝動を抑圧し、それらは無意識のものとなります。ここでもまた、無意識のなかに「鬱積」が生じ、その圧力が大きくなりすぎると、衝動が神経症やヒステリーという形で打破して現れるのです。

実際、神経症の人と一緒に暮らしたことがある人なら誰でも、そのような人物が自分の周囲を支配できるという経験をしたことがあります。誰もがその人を甘やかし、その人とその気まぐれに屈し、常にその人のことを心配せざるを得なくなります。このようにして、患者は他者を暴君のごとく支配したいという密かな願望を、病理学的な形で実行に移すのです。

これら二つの簡潔な説明からお分りのように、フロイトとアドラーは、少なくともその定式化の方法においては、精神疾患の起源をかなり似た方法で説明しました。しかし、彼らはそれぞれ、疾患の根底にある非常に異なる推進力を想定していたため、そのアプローチは決して同じではありませんでした。

精神の原動力を性的衝動（性欲）に見たフロイトは、精神疾患をほとんど自然の力のようなものとみなし、自然科学者の方法でそれを探求し、主に性衝動の抑圧によって引き起こされるものとして説明しました。その結果、彼が開発した治療方法は、主に疾患の原因を取り除くことに主眼が置かれました。

これに対して、自我が自己主張を挫折させられたことに疾患の原因を見たアドラーは、精神が持ちうる「目的」に着目しました。彼の見解では、自我は常に人生における特定の目標を達成するために働いているため、アドラーはむしろ教育者のように行動しようとしていました。彼は、患者が自分の願望に含まれる幻想や矛盾を認識し、それらを現実生活の必要性和調和させることができるよう手助けをすることで、患者に影響を与えようとしたのです。

[ユングの心理学]

ユングは、人間の精神に関するまた別の基本的な理解へと導かれました。もちろん、彼はフロイトの精神分析学とアドラーの「個人心理学」の双方を熟知していました。彼は、精神疾患の原因を説明しようとしたこれら二つの理論のそれぞれに、ある程度の真理が含まれていることを疑いませんでした。

特定の精神病はフロイトの解釈を必要としますし、別の精神病はアドラーの解釈に合致するように思われます。さらには、双方の理論で説明できるものさえあります。しかし、まさにこれら二つの理論のそれぞれがある程度の真理を含んでいるからこそ、それらは完全に「半分正しい」わけではなく、「部分的に正しい」

にすぎないことが分かります。彼らはそれぞれ精神の特定の側面を見ており、したがって、よく言っても精神疾患のそれら特定の側面しか説明できないのです。

ユングは、人間の精神の全体性を考慮に入れることができるほど、広範で包括的な理論を発現させたいという野心を持っていました。そうすれば、あらゆる形態の精神疾患を理解することも可能になるからです。これを達成するためには、二つの問いに答える必要がありました。すなわち、「フロイトとアドラーの理論における共通分母は何であるか」、そして「両者が異なるより深い理由は何であるか」という問いです。

私が指摘してきたように、これらの理論に共通しているのは、どちらも無意識における特定の強い衝動の抑圧によってもたらされる危機を、疾患の原因として見出している点です。しかしながら、彼らはこれら衝動の性質を全く異なって理解しています。彼らの相違、彼らの矛盾の正確な理由とは、一体何なのでしょう。

もう一度、アドラーの理論を見てみましょう。前述のように、彼の理論は「人間の精神の発達が個人の意識へと至り、その意識は自我を中心に据えている」という彼の観察から発展したものでした。ユングは、（確かに否定することのできない）上記の事実から次のように結論づけました。「人間の精神において意識をもたらす力は、私たちの中に『個性』、すなわち自分は唯一無二であり、他の誰とも違うという感覚を生み出す力と同一である」と。ユングは、これら意識を生み出す力が精神の中で働いている唯一のものなのか、それとも他にも発見されるべき力があるのかについては、判断を保留しました。アドラーが自身の理論を「個人心理学」と呼んだのは、個人を発達させることが精神の最重要の特性であると感じたからでした。

では、今度はフロイトの理論をもう一度見てみましょう。彼は性的衝動（性欲）を精神の発達における主要な原動力であると言明しました。彼は、他にも働いている力があるかもしれないという推測はしませんでした。これが意味するのは、フロイトが人間を主に「種（しゅ）」の文脈において捉えていたということです。なぜなら、性衝動は本質的に種の繁殖に奉仕するものだからです。私たちが性衝動に従うとき、私たちは個人としてではなく、自らの種の一員として行動しているのです。

ここで、私たちの意識を発達させるために働いている力は個別性をもたらす力と同一である一方で、逆に、私たちを単に種の一部にすぎなくさせる力は、その性質上、意識とは何の関わりもないということを考えてみましょう。性行為を表現するのに「添い寝する（sleeping together＝共にする）」という言葉を使うことには知恵が隠されています。それは、生命に関わるプロセス、特に生殖に関わるプロセスは、それ自体が意識というよりもむしろ無意識に関連しているという事実を指し示しているのです。それらは目覚めている状態（覚醒）ではなく、眠っている状態に似ています。

ユングは以上のことから、意識と無意識の間の極性（対立）は、次のように特徴づけることもできると結論づけました。私たちはここで二つの異なる潮流を扱っているのだ、と。一つは意識をもたらす潮流であり、もう一つは私たちを種の一員にする潮流です。

フロイトとアドラーはどちらも、すべての精神疾患は意識と無意識の間の圧倒的な不一致（ズレ）によって引き起こされると考えていましたが、ユングは、人間が「私たちを種の一員にするもの」と「私たちを個人にするもの」との間の葛藤に圧倒されたときに疾患が顕在化する、と結論づけました。

ユングは、人の生涯において何がこの葛藤、すなわち精神疾患を引き起こす魂の中の不一致をもたらす原因になり得るのだろうかと考えました。彼は、研究手段として自身の「自由連想」の手法をしばしば用いました。それによって無意識を理解しようと試みた彼は、私たちが「種の一員」であるのは、自分が持つ肉体を通じてだけでなく、個人になろうとする衝動のなか、すなわち私たちの「魂の生活（精神生活）」においても同様であるということを発見したのです。

ユングにとって、人間の精神はフロイトやアドラーが考えていたような単純な実体ではないことが明らかになりました。ユングにとって精神とは、多数の衝動を含む「コンプレックスな（錯綜した）構造」だったのです。そのため、彼は自身の理論を「コンプレックス心理学」と名付けました。これは実際には何を意味するのでしょうか。

それは、人間の精神には、個人としての主張（個別性）とは無関係に、それが「人間の精神である」というただそれだけの理由で生じるプロセスや体験が存在する、ということを意味します。これらは、すべての人間に同様の形で起こります。ユングはこれらを私たちの「集合的体験（普遍的体験）」と呼び、これらは通常、完全に無意識のものです。

しかし、種全体に共通するこれら無意識の体験の一部が、意識へと染み出し始める（漏れ出てくる）ことが常に起こります。これは健康な個人にも、病める個人にも起こることです。それは非常に特徴的な形で起こるため、ここに無意識からの「暗示（予兆）」が関わっていることを明確に示しています。つまり、その体験は「象徴」という形で衣服をまとって現れるのです。象徴が私たちの意識に現れるやいなや、それは個人の個別性を帯びます。なぜなら、意識の領域において私たちは確かに個人だからです。

しかし、その多様な個人の表現の違いは、音楽の「変奏曲」の違いと同じようなものにすぎません。ユング曰く、作曲家が変奏曲を書くとき、たとえそれを20曲、30曲と書いたとしても、念頭に置いている主題は同一なのです。

では、すべての人間に共通するこれらの象徴、ユングが「元型（アーキタイプ）」と呼んだものは、一体どこに見出されるのでしょうか。

それら（元型）は、世界の偉大な宗教の本質的な内容の中や、人類の歴史に織り込まれてきた神秘教義（ミステリー・スクール）、すなわち秘密の教えの中に見出されます。

たとえば、天にまします「父」という象徴があるとしましょう。これはギリシャ神話のゼウス、ヘブライ人のヤハウェ、そしてインドのブラフマー（梵天）に見出すことができます。もう一つの象徴は「大母神」であり、これはギリシャ神話のデメテル、エジプトのイシス、キリスト教の聖母マリア、さらには中国の観音の姿として現れます。あるいは「聖三位一体」の概念を例にとってみましょう。これはキリスト教だけでなく、インドの三神一体にも見られ、同様にギリシャやエジプトの神話にも存在します。また、多くの宗教に登場する「神人」の象徴もあります。最後に、あらゆる宗教に最も多様な形で現れる悪魔「サタン」が挙げられます。

ユングが指摘したように、これらの象徴は個人から生じたものではありません。それらは匿名の（作者のわからない）起源を持っており、何百万もの人々を惹きつけ、人々にそれを自分のもの（信仰）とさせる力を持っているのです。

これが無意識の領域です。では、これを目覚めた意識の領域とどのように対比させればよいのでしょうか。意識の特徴は、象徴的なイメージではなく「抽象的な概念」を生み出す点にあります。これらは哲学や自然科学で見出される概念です。象徴とは異なり、これらはその思考を世界で最初に抱いた「個人」によって定式化されます。そのため、たとえ普遍的に認められたものであっても、常に個人の創始者（発案者）と結びついています。この意味において、私たちはプラトン、デカルト、カント、ライプニッツ、あるいはヘーゲルの哲学と呼び、ダーウィンの種の起源論、アインシュタインの相対性理論、あるいはプランクの量子論と呼ぶのです。無意識の世界と意識の世界という、これら二つの世界が、私たちの精神の中で向かい合って存在しています。

ここで次のような問いが生じます。

「精神疾患はどのようにして生じるのか？」

その答えの一部として、ユングは、精神疾患はある程度どの時代にも存在してきたものの、20世紀になってそれらが爆発的に増加したという事実を指摘しました。フロイトとアドラーもこのことを認識していましたが、ユングは特にこの点を強く主張しました。彼は、精神疾患を現代という時代の「典型的かつ象徴的な症状（時代の病）」とみなしたのです。

この種の疾患は確かに過去の時代にも存在していましたが、現在では雪崩のような規模に達しており、どれほど多くの精神医療施設を建設しても、すべての患者を収容することはできません。実際、これほど多くの苦しむ人々を救わなければならないという途方もないニーズがなかったならば、深層心理学そのものが誕生することはなかったでしょう。現代において神経症や精神病は、特定の個人だけに起こるのではなく、今世紀（20世紀）に私たちが身を以て体験したように、大規模な流行病（エピデミック）や「集団精神病（マス・サイコース）」として発生しています。それらはまさに、集団的な狂気という印象を与えています。

これらすべての理由は何でしょうか。

無意識と意識の領域は、歴史を通じて近代に至るまで、かなり調和のとれたバランスを保って存在していました。しかしそれ以来、二つの領域の間の緊張が高まり、それは「信仰と知識（科学）」あるいは「宗教と科学」の間の葛藤として特徴づけられるようになりました。この葛藤について私が詳しく説明する必要はないでしょう。なぜなら、現代的な教育を少しでも受けた人であれば誰でも、この葛藤の中で育ち、何らかの形でそれに対処せねばならないからです。

しかしながら、19世紀半ば以降の現代社会がこの問題をどのように解決しようとしてきたかについては、指摘しておかねばなりません。過去100年間にわたり、個々の哲学者や科学者の発見が「受け入れられるべき真理」となったことは周知の事実です。その一方で、匿名（集団的）の性質を持ち、宗教や神話の本質である「集合的な象徴イメージ」は、迷信や老婆の戯言として烙印を押されてしまいました。現代的で啓蒙された人間として認められたいと願う人は誰でも、これら「古い迷信」を投げ捨てる傾向にありました。1870年代にニーチェが「神は死んだ」と宣言したとき、一体誰がまだ悪魔の存在を信じていたでしょうか。

宗教的・象徴的なイメージは、現代社会によってますます抑圧され、ついにその時代の意識からほとんど姿を消してしまいました。その結果、大規模な現象が引き起こされることになります。本来であれば意識の一部となり、通常なら健康な精神へと「染み出てくる」はずの無意識の内容が、もはや正常な方法ではそうすることができなくなってしまったのです。人間の魂の生活が引き裂かれ、意識と無意識の間の結びつきが完全に失われてしまうという危険が生じました。

最終的に、抑圧された「集合的無意識」が凄まじい力で突き破って出てくることなしに、この危険から逃れる道はありませんでした。これは、個人が（しばしば宗教的な性質を帯びた）幻覚を経験するような、個人の精神疾患という形で発生しました。しかしそれだけでなく、歪んだ宗教体験や「擬似宗教的な狂信」が見られるような、「集団精神病」の形で発生したのです。

これらの集団的狂信において、何百万もの人々がある特定の強力な象徴の周りに結集しました。その一つが、国家社会主義者（ナチス）によって用いられた古代の宗教的・宇宙的象徴である「スワスティカ（逆hook十字／ハーケンクロイツ）」でした。他には、イタリア・ファシストの「ファスケス（束桿）」や、ソビエトの「赤い星」が挙げられます。今世紀に膨大な数の信者を獲得したカトリック内部の聖母マリア運動も、肉体を持ったまま復活したマリアをその象徴としています。

これらすべての運動は、現代の哲学的・科学的概念を一掃し、影響下にある人々から独立性と自己決定権を奪い去るほどに強力な「集合的体験」に基づいています。そこでは「大衆意識（集団意識）」が主導権を握り、大衆のすべての構成員が、彼らが熱愛する象徴の中に表現された全く同一の体験を共有することになるのです。

これが、この状況に対するユングの見解です。彼は自らに問いかけました。「個人の病気だけでなく、現代の『大いなる文化的疾病』と正当に呼びうるものをも治療する手段を、どのようにして見出せばよいのだろうか」と。

ユングは、治療は自らが「コンプレックス心理学」の中で描写したような、精神の真の本質を徹底的に理解することによってのみ達成されると信じていました。この心理学が語るところによれば、精神の中には、同じ根源に由来しながらも異なる方向へと発達していく二つの潮流が存在します。魂が成熟するにつれて、これら二つの潮流はますます正反対のものとなり、魂の二つの側面を「昼の側面」と「夜の側面」と呼ぶことができるようになります。

これら二つの極が発達することは、人間の魂の性質に内在しています。それこそが「個人の意識」と「集合的無意識」なのです。このプロセスは、思春期において人間の男性的な側面と女性的な側面が明確に定義されていく様（さま）に例えることができるかもしれませんが、これら二つの極の発達は、その内に精神疾患の種を宿しています。これは外部から魂に課されるものではありません。魂に本来備わっているものであり、二つの極が互いに遠く離れすぎて過度な圧力が生じたときに危険なものとなるのです。

では、何がこの不健康な圧力を生み出すのでしょうか。

それは、個別化された「昼の意識」がますます明るく目覚めていくことを許される一方で、「夜の側面」である集合的無意識が、半ば気づいている状態（半意識）から、さらに深い闇へと沈み込んでいくときに起こります。その結果、私たちは最終的に、自分自身を個人であると感じる「昼の意識」こそが、私たちが持つ唯一の意識であると信じ込むようになってしまいます。無意識は忘却の彼方へと追いやられ、あるいは存在すらしないと信じられるようになります。

これこそが、私たちの近代・現代の歴史において実際に起きたことです。近代哲学および心理学の祖であるデカルト以来、魂は意識と同一であると宣言され、19世紀に至るまで、無意識に特別な注意を払う者は誰もいませんでした。デカルトの有名な言葉「コギト・エルゴ・スム（我思う、ゆえに我あり）」は、個人的で抽象的な思考を形成する能力の中に人間の精神の存在を証明しようとしたものでした。こうして、精神のもう一方の側面である「集合的な側面」は放棄され、私たちの西洋文化を支配し形成してきた強力な「個人主義」が発展するための道が切り拓かれたのです。そして、すでにこの講義の中で仄めかしてきたような「激しい反動」が起こることになりました。

ユングは、現代において新しく包括的な心理学が創設されねばならないと確信していました。この心理学は、ゲーテが『ファウスト』の中で「わが胸に宿る二つの魂」と呼んだものを理解するための道を示すことになるでしょう。もっとも、このように表現することは完全に正しいわけではありません。二つの魂があるのではなく、二つのアスペクト（側面）、二つの面を持つ一つの魂があるのです。

一方の側面には「意識」があり、そこでは抽象的な思考を定式化し、自らの思考によって世界を理解しようと試みながら、私たちは自分自身の個別性を体験します。

私たちはもう一方の側面に対しては無意識ですが、その側面を通じて、私たちは他のすべての人類、そして宇宙の知恵（普遍的な叡智）と結びついています。このもう一方の側面が意識へと上昇するとき、それは象徴的なイメージとなって現れるのです。

人間は、魂に関する限り、私たちは単に考え、理性を働かせるだけの個人以上の存在であることを認めねばなりません。私たちは全人類にも属しており、自らの内に古代の知恵を宿しているのです。私たちは、全体の真理が抽象的な思考や哲学することの中だけに存在するのではなく、古代の象徴の中にも求められねばならないということを理解せねばなりません。これが理解されれば、信仰と知識、宗教と科学の統合へと到達できるだけでなく、私たちの個人主義と、共通の人間性（人類愛）とを調和させることも可能になるでしょう。

私たちが人生を営む上でこれらの洞察を適用するとき、私たちは自らの精神における二つの極の調和（和解）を経験することになります。引き裂かれていたものは再び結びつき、あるいはユングが表現するように、分化されていたものが「再統合」されて、再び一つになります。

この再統合がもたらす重要な結果は、私たちの精神の中に「新しい中心」が形成されることです。現在の意識状態において、私たちが気づいているのは「自我（エゴ）」だけです。しかし、もし私たちが精神の二つの半面を調和的な方法で結びつけるならば、私たちは「自己（セルフ）」に気づくようになるでしょう。自己の誕生があって初めて、人は完全な人間になることができるのです。

ユングは、この自己を見出すプロセスを「個性化」と呼びました。彼は個性化を、魂の発達において人類が達成できる最高目標であるとみなしています。人類の偉大な精神的指導者たちは、多くの異なる定式化やイメージによってこの目標を指し示してきました。

ユングは「自己」を、人間に立つべき確固たる基盤を与える「新しい均衡の中心」と呼び、次のように語っています。

「このような視覚化（イメージ化）は、表現しがたく、描写しがたい心理的事実を定式化しようとする、不器用な知性の試みにすぎないことを私は認めよう。私はおそらく、聖パウロの言葉を借りて、同じ概念を『生きているのは、もはや私ではない。キリストが私の内に生きておられるのである』という言葉で表現することもできるだろう。あるいは、老子を引用して、万物の中心であり中道である彼の『道（タオ）』を私自身のものとすることもできる。いずれの場合も、その意味するところは同じである」

このように、ユングの深層心理学は、単に個人の精神疾患の診断と治療にとどまるものではないことが分かります。彼は、西洋世界全体の現代における歴史的・文化的なジレンマを診断し、この危険な状況から抜け出す道を示そうとしているのです。

以上が、深層心理学のさまざまな潮流について、本日は皆刑にお伝えしたかったことです。

明日、人間の魂の認識に対する人智学（アンプロポゾフィー）的アプローチについてお話しするとき、人智学が深層心理学に含まれる重要な真理を完全に受け入れていることを、皆さんはお分かりになるでしょう。その上で、人智学は私たちの魂への理解をかなり深めることができます。人智学独自の研究方法は、深層心理学がまだ触れてさえいない、魂の体験の「新しい次元」を切り拓きます。この新しい次元は、人間の魂の最も内奥にある領域への扉を開いたのです。明日の講義の目的は、これらのことについて詳しく描写することにあります。

ハンス・エアハルト・ラウアー (Hans Erhard Lauer)

3つの講義

「魂の謎——深層心理学と人智学」

・講義2「人智学の光に照らした人間の魂の謎」

●基本的な視点

人智学は深層心理学（特にユング）の発見

——集合的無意識と元型——を全面的に認めつつ、

それらをさらに深く、霊的実在として明らかにする。

無意識を「未知の暗黒」として仮説で扱うのではなく、
高められた意識で直接経験可能にする。

人智学は魂の深さを完全に解き明かしたとは決して主張しないが、
現代が直面する「魂の喪失」と「人間の動物化」の危機に対して、
魂と精神の尊厳を科学的に（霊的に）再発見する道を提供する。

●要点

○深層心理学との根本的な違い

- ・深層心理学：無意識を直接探る（自然科学的な仮説的方法）。
- ・人智学：まず通常意識の内側から出発し、意識そのものを高めていく。

魂を「明るい部屋（意識）」と「暗い部屋（無意識）」に例えれば、
深層心理学は暗い部屋に光を入れようとするのに対し、
人智学はまず「思考活動そのもの」という
意識の中の暗部を照らすことから始める。

○人智学の研究方法（内的な訓練）

シュタイナーの『いかにして高次世界を認識するか』などに記された
思考の集中訓練と瞑想により、思考の「内容」ではなく
「活動そのもの」を観察可能にする。
このことによって以下の段階が展開する。

1. イマジネーション認識

- ・思考活動を観察できるようになると、
魂が肉体（脳・神経系）から独立していることを実感できる。
- ・真の「Ich（自我・霊的個我）」を発見する。
- ・自然界の内側にまで魂が達していることがわかる。
自然の形を形作るエーテル的形成力や、
生き生きとした思考元型（archetype）が見える。
- ・通常意識はこれらを抑圧することで「Ich」を確立している。

2. インスピレーション認識

- ・感情・心の訓練を加えることで、さらに高い段階へ。
- ・霊的階層存在と直接出会う。
- ・これは「球の音楽」や「宇宙の言葉」として体験される。
- ・深い眠りの状態と同じ世界に、より明晰な意識で入る。
- ・宗教感情の根源にあるのは、
毎夜の眠りの中で霊的存在と出会っていることによる。

3. イントゥイション認識

- ・意志の道徳的訓練を加えた最高段階。
- ・霊的存在と完全に一体となり、
人間は本来それら霊的存在の「子」であり、
同じ本質を持つことがわかる。
- ・死の謎が解ける。
肉体と通常的人格は消えるが、霊的「Ich」の核心は不滅。
- ・転生輪廻
一回の生涯では到底尽くせない才能と地球体験を、
何度も繰り返して展開する。

○人間の誕生の尊厳

人智学はフロイトの

「性欲が心の根本駆動力」という見解に明確に反対する。

古代の人々は誕生を単なる種の繁殖ではなく、
霊的個我の受肉として深く理解し、結
婚・出産の儀式に大きな意味を与えていた。

キリスト教ではマリアの受胎がその象徴であり、
ラファエロの『システィーナの聖母』も、
子供が天から降りてくる姿として、誕生の神秘を象徴的に伝える。

近代のダーウィン進化論とフロイト心理学は、
人間を「最も発達した動物」に貶め、誕生の尊厳を失わせる危険がある。

●本文

前回の講義では、深層心理学のさまざまな学派内で行われた研究の最も重要な成果について、その特徴を説明しようと試みました。私たちは、深層心理学が魂の「無意識」と、それが人間の意識と結びつく関係性を研究することに関わっているのを見てきました。また、その研究方法が、外部の物理世界と人間の意識との関係性を研究する現代の自然科学の方法と類似していることも確認しました。

本日は、魂の領域における「人智学」的研究の成果について描写します。まず初めに言及しておかねばならないのは、深層心理学と人智学は異なる根源から生じているということです。昨日申し上げたように、深層

心理学が精神医学の実践的なニーズから生じたのに対し、人智学はその根源を「純粋な知識へのニーズ」に持っています。それはすなわち、人間の本性全般に関する、真実で包括的な知識へのニーズを意味します。

双方が認識しているのは、私たちの日常の意識によって体験できるのは精神の一部にすぎず、魂の生活の大部分は無意識の暗闇に包まれているということです。だからこそ、真の自己認識はこれほどまでに困難なのです。

しかしながら、深層心理学と人智学の研究方法は、まさにその出発点から異なっていることが分かります。前者が無意識を直接的に探索することに関わっているのに対し、後者は初期の段階においては意識の領域にとどまります。これがなぜであるかを、次のように説明することができます。

魂の「意識的」な側面と「無意識的」な側面の間の違いは、おそらくこれらを二つの部屋として想像することで特徴づけられるでしょう。一つの部屋は光で満ちており、その中にあるすべてのものをはっきりと見ることができます。もう一つの部屋は暗闇に包まれており、その中にあるものは何も見えません。（ここでは差し当たり、両者の間にある移行領域〔前意識など〕については無視することにします。）

物事をこのように捉えるならば、あなたの目的が「二番目の部屋の暗闇に何らかの光をもたらすこと」になると想定するのは、極めて理にかなっています。

人智学のアプローチは異なります。人智学は、二つの異なる部屋という魂のイメージは完全に正確ではないと主張します。

昨日見たように、私たちが自らの内的な意識から形成する概念は、感覚印象によって引き起こされない限り、抽象的でイメージを持たない思考という性質を帯びています。これとは対照的に、無意識から「染み出してくる」概念は、常にイメージや象徴の形で現れます。私たちが最も目覚めているのは、数学や論理学を扱っているときに形成する思考であり、そこにおいて私たちは可能な限り最も明晰な思考を達成しています。

人智学は、ほとんどの哲学や心理学がまだ考慮に入れていない、ある事実を指摘します。それは、たとえば私たちが数学的な作業をしているとき、私たちの明晰な思考は思考の「対象（内容）」には向けられていますが、思考の「活動そのもの」には向けられていないという事実です。これは最初は奇妙に思えるかもしれませんが、次のような比較をすれば、より明確になるでしょう。

私は自分の腕を曲げようと決めることができます。これは私の「意志」の決定です。何が起こるでしょうか。この決定を下すやいなや、それは何らかの方法で私の筋肉へと伝えられ、私は腕を曲げます。私はこれが起こるのを見ることができるため、それを意識することができます。しかし、私の決定とその行為との間で「実際に何が起こったのか」を、私は観察することも知ることもできません。現代の生理学はこの関連において運動神経の機能について語りますが、これは単なる推測や理論にすぎず、直接的な経験から生じたものではありません。

さて、学生が試験で直面するように、私が数学や物理の問題に直面したとき、私は先ほど説明したのと全く同じ状況に置かれていることに気づきます。私は何をするのでしょうか。私は自分の思考を動かし、運が良ければ問題の解決策を見出します。それは私の内で何らかの形でパッとひらめきます。そのとき私は、アルキメデスのように「エウレカ（分かったぞ）！」と叫ぶことができるかもしれません。しかし、自分の腕を曲げようと決めた後にどうやって腕が曲がったのかが全く分からないのと同じように、正しい思考を「点灯」させるために自分の魂の中で実際に何が起こったのかを、私は知りません。

この場合、人は解決策を「見つけた」と言います。ですから、もしそれを見つけることができたのであれば、それは私の意識のどこかに存在していたに違いありません。しかし、それがどこにあるのかは、私の経験からは隠されています。

このように、人智学は、私たちの意識の中には「暗い領域」のようなものが存在せねばならず、この暗い領域とは、活動として捉えられた場合の「思考そのもの」であると示唆しています。この認識から、無意識の領域に取り組もうとする前に、この暗い領域、すなわち「思考する行為そのもの」を探索し、そこに光を当てる必要性が生じるのです。

[人智学の研究方法]

人智学は、魂の秘密を発見するために、深層心理学とは根本的に異なるアプローチをとります。理論や仮説を形成する代わりに、「直接的な経験」に到達することを目指すのです。

私たちは自分自身の思考の活動を直接経験することはできないため、内的な知覚の領域が強化され、広げられ、それまで見えなかったものが見えるようになるという方法で、自らの思考生活を「再訓練」することができます。このような内的知覚の再訓練は、自発的に「自己教育の道」を始めることによって達成されます。

この内的修練は、集中した思考の訓練と、特定の瞑想から構成されています。これらは、ルドルフ・シュタイナーの基本著作である『いかにして高次世界の認識を得るか』や『神秘学概論』、その他多くの著作に記述されています。ここでは、これらの訓練の原理について仄めかすことしかできません。詳細に関心のある方は、上記の書籍で見つけることができるでしょう。

特定の運動を長期間にわたって定期的に繰り返すことで腕や脚を強化できるのと同じように、思考の訓練を定期的かつ根気強く、勤勉に行うことによって、自らの思考生活の範囲と強度を高めることができます。認めざるを得ないのは、ここで私たちが話しているのは数週間単位のことではなく、むしろ数ヶ月、数年単位のことだということです。

そのような訓練は、数学の定理の証明や、かつてあなたを特定の洞察へと導いた哲学的な思考に関わるものであるかもしれません。重要なのは、単にその概念を思い出すことだけでなく、その思考に至った論理の道筋を、最初から、あの最初の理解のひらめきをもう一度体験できるところまでたどることです。

このような訓練を長期間にわたって定期的に繰り返すと、思考の力が大幅に強化され、思考の対象だけでなく、「思考の活動そのもの」をも経験できるようになります。いわば、自分が思考している姿を自分自身で観察できるようになるのです。

これを経験することは、魂の生活における真の突破口であり、深い変容です。この経験にはいくつかの異なる側面があります。ここでは三つの概要だけを説明します。

第一に、精神を訓練することによって、ここで説明した方法で自分自身の思考を観察できるようになるとき、その瞬間の人間の魂は「肉体に依存していません」。魂は脳や神経系から独立しているのです。私たちはここで、純粋な魂の活動を扱っています。したがって、人智学は、魂を肉体とは別にそれ自体の現実性を持った「独立した実体（個別の存在）」として認識します。

私たちが自分自身の思考を観察する能力を獲得するとき、自らの真の「自我（I）」を発見することが真に可能になります。自分自身に対して「私は（I）」と言うことは、確かに個人の魂の内的な認識を表現したものです。

これは象徴的に、自分の尾を噛む蛇（ウロボロス）のイメージや、完全な正円のイメージで表現することができます。私たちは日常の意識の中でもよく「私は」と言いますが、ここで述べた決定的な発見をした後には、これまでは決して本物の「自我」へと到達していなかったのだということに気づきます。あの象徴的な円は、完全に閉じられたことがなかったのです。

通常の意識において、私たちはある意味で常に自己発見の「途上」にあり、その目標に完全に到達することはありません。したがって、私たちが自分自身に向かって「私は」と言うとき、名前を呼ぶことができる外部の対象のように、明確に定義された概念を思い描いているわけではありません。私たちの「自我」は常に私たちのために暗い領域にとどまっており、どちらかといえば漠然とした感覚に近いものです。自己認識の円が閉じられるのは、私たちが自分自身の「思考の活動そのもの」を観察できる段階に到達したときだけなのです。

私たちの内で思考しているものは、明らかに私たちの「自我」であり、私たち自身です。したがって、私たちが思考している自分自身を観察できるとき、私たちはその完全な現実性において自らの「自我」をも発見するのです。

こうして人智学は、私たちの思考を取り囲んでいるように見える、私たちの内なるこの「暗い領域」こそが、通常の意識のすべての活動が関連付けられている私たちの核心、すなわち私たちの「自我」にほかならないという、注目すべき結論に達します。奇妙なことに、私たちのすべての思考や努力が内なる核心に関連付けられているにもかかわらず、その核心自体は、生涯を通じて私たちの意識から多かれ少なかれ隠されたままになっています。私たちが内的修練のプロセスを経た後に、内面で自分自身の思考を観察できるようになって初めて、意識の完全な光の中にそれを見ることができるようなのです。

ですから、人智学の学生が初めて自らの「自我」を捉えるとき、それはまるで通常の意識の真ただ中で「目が覚める」かのようです。新しい現実、より高い意識へと目覚めるのです。後述するように、人智学はこの高次の意識を「イマジネーション認識」と呼びます。

イマジネーション認識が達成されたとき、第三の事実が現れます。日常生活の意識の神秘を解き明かすことが可能になるのです。この神秘は、たとえば次のような問題の中に現れます。

昨日、私の図は、私たちの通常の意識が、感覚印象を受け取る周囲の世界とどのように境界を接しているかを示しました。しかし、私たちは感覚印象を受け取るだけではありません。私たちはそれらの印象に向かって、自分自身の思考や概念をも適用しています。私たちは自らの概念を感覚印象へと結びつけているのです。ここで、これがどのような重要性を持つのかを問うことができます。私たちの感覚印象と概念の間には、一体どのような結びつきがあるのでしょうか。

哲学者たちは、古代ギリシャから現代に至るまで、人類の歴史を通じてこの根本的な問いを立ててきました。私たちが日常生活の意識とその経験の限界内にとどまっている限り、この問いに答えることはできません。もっとも、これまでに最も多様な答えが与えられてこなかったという意味ではありません。しかし、これらすべての答えは単なる理論や仮説を構成しているにすぎず、本物の経験から生じたものではないのです。

ここでは、特に中世に激しく議論された、最も有名な二つの理論だけを挙げたいと思います。

一方の理論の支持者たちは、自らを「実念論者」と呼びました。彼らは、思考は人間の精神の中に存在するだけでなく、世界の外部にある現実の一部でもあると主張しました。実念論者にとって、外部の現実とは物理的な物質だけでなく、「思考の物質（思考実体）」からも構成されていたのです。そして、人間が目で行

うように色彩を見、耳で行うように音調を聞くのと同じように、私たちは自分の思考を一種の「霊の目（霊的器官）」のように適用し、それによって世界に含まれている思考を「知覚」することができると考えました。私たちが魂の中で自らの思考を感覚知覚と結びつけるとき、私たちは異なる知覚器官で経験したものを再び統合しているにすぎないというわけです。

実念論者に対抗したのが「唯名論者」でした。彼らは、思考そのものは私たちを取り囲む世界とは何の関係もないと主張しました。彼らは、人間の精神と魂が自らの内から思考を生み出しているのであり、それらは精神の中にしか存在しないと信じました。概念とは、世界のさまざまな現象に対して私たちが与える単なる「名前（nomina）」や記述にすぎないというのです。私たちは、物事を分類し整理して理解しやすくするために、それらに名前をつけます。ご存知のように、この唯名論的な態度が勝利を収め、現代の自然科学における判断の基礎となりました。

[イマジネーション認識]

物事が実際にはどうであるかは、イマジネーション認識という高次の視点からしか経験できません。最初は、この意識の唯一の内容が、いまや内なる目に見えるようになった「自我」の核心だけであるかのように思われるかもしれません。しかし、そうではありません。それは経験の一側面にすぎないのです。

人智学的な科学者が自らの高次の意識へと目覚める瞬間、彼はそれが通常の意識よりも遥かに広大な領域を持っていることを発見します。言い換えるなら、彼は——これ以外の表現はできませんが——自然の内なる働きの中に、自らを「直接没入させる」ことができるのです。もちろん、物理的な意味ではなく、霊的な意味においてです。

このようにして人智学的な科学者は、中世の実念論者たちがある意味で正しかったことを認識します。私たちが自然の中で出会うすべてのもの——鉱物、植物、動物——は、物質的な物質（物質実体）だけでなく、「思考の物質（思考実体）」からも構成されているのです。それらはすべて、客観的な「宇宙の思考（宇宙の叡智）」を含んでいます。すべての自然現象の中にいわば隠されているこれら宇宙の思考は、思考する者が上述の訓練を通じて自らの受容能力を強化したために、霊的認識の対象となります。彼は、植物がある一定の成長期間を経て花を咲かせるのと同じように、自らの内に新しい知覚器官を生じさせたのです。

人智学はこの高次の意識を「イマジネーション」と呼びます。なぜなら、それはイメージの経験であり、超感覚的な「見る行為（霊視）」だからです。

ここで、自然に含まれている客観的な思考は、中世の実念論者たちが想像していたものとは多少異なっていることが明らかになります。それらは単なる抽象的な思考ではなく、生きているもの——動物、植物、さらには鉱物——にそれぞれの具体的な形態を与える、生きた、創造的な、形を与え変容させる「力（形成力）」なのです。

たとえば、何千もの葉の一枚一枚が同じ特徴的な形と色彩を持つオーク（櫟）の木を見るとき、あるいは、どの個体も典型的な形態を持つ羊の群れを考慮するとき、あなたには次のような疑問が湧くかもしれません。「この木の中で、液汁の組織的な流れや化学的組成を導き、すべての葉が同じ形状と色彩を持つように働いている力とは、一体何なのだろうか？」あるいはもう一方の例で言えば、「群れの中のすべての羊が、羊としての特徴的な形態や典型的な行動をとるようにさせている力とは何なのか？」と。

これらこそが、まさに超感覚的な力です。それは物質的な物質で満たされる能力を持った、自然の形態の「霊的で思考のような元型（アーキタイプ）」なのです。これらこそがイマジネーション認識に見えるようになる力であり、それによって人智学的な研究に対して、人間の魂が通常の昼の意識が認識しているよりも

遥かに広い範囲を持っていることを明らかにします。極めてリアルな方法で、魂は自然の内なる領域へと届いているのです。

当然のことながら、私たちは日常の目覚めている意識（覚醒意識）においては、これらについて何も知りませんし、それには正当な理由があります。もし私たちが毎日これらの事実を直接経験していたならば、私たちは自分自身の魂と周囲の世界を区別することができなくなってしまうでしょう。私たちは自然とあまりにも織り合わされてしまい、自分自身を一つの「自我」として認識できなくなってしまうはずです。私たちが個人の「自我」を発達させることができるのは、発達の過程において、これら（自然との）相互の結びつきの経験を「抑圧」し、それらを無意識のままに保って何も知らない状態でいられる、私たちの能力のおかげなのです。

これらの霊的な事実の抑圧は、別の方法で説明することもできます。同じプロセスですが、表現が異なるだけです。私たちが通常の意識を発達させるとき、私たちは自らの経験の範囲を、それがもはや自然の領域の内部には届かず、その「境界」にしか届かない程度にまで制限します。そして、私たちがこの境界に触れるとき、私たちはそれを自分自身とは異なるものとして認識し、自分自身を一つの「自我」として経験するのです。

同じ状況は、さらに別の方法でも説明できます。私たちの魂は、通常の意識を発達させる過程において、自らを肉体（物理的な身体）と完全に結びつけ、それと全面的に同化します。その結果として、魂は感覚器官が捉えることのできるものしか認識できなくなるのです。肉体的な感覚器官は、私たちが自然をいわば「外側から」知覚するように機能します。感覚器官は、自然の内なる領域へと浸透することはできません。

いまや私たちは、感覚印象が私たちに伝えてくれるものは物語の片面であることを見出すことができます。魂は自らの思考をもって、その感覚印象に応答します。この活動の最中に、一体何が起きているのでしょうか。

ここでもまた、ここで起きていることはイマジネーション認識の視点からしか観察することはできません。魂は、特定の感覚印象に直面したとき、自らの内なる存在へと、まるで探照灯のような超感覚的な器官を拡張し、その感覚印象に属する思考を探し出します。これらの思考は、私たちの魂の中だけでなく自然の中にも存在しています。なぜなら、私たちが意識していなくとも、魂は自然の領域へと突き出ているのを私たちは見てきたからです。適切な思考を見つけ出すと、魂はそれらを意識へと引き上げます。そして、このために魂は、外部の自然を知覚するために感覚器官を用いるのと同じように、脳や神経系を用いるのです。

しかし、この驚くべきプロセスは、さらにもう少し複雑です。自然の中だけでなく人間の魂の中にも存在する、この「生きている、創造的な、形を与える（形成的な）力」は、私たちの目覚めた意識へと直接入ることはできません。私たちの意識に入るものは、生きている現実の、単なる「写し」であり「鏡像」にすぎないのです。そして、この像を作り出す鏡こそが、私たちの「脳」なのです。

私たちは、生きている宇宙の思考を自らの脳と結びつけることで、脳がその写しを作り出せるようにし、それを通常の意識で知覚します。したがって人智学は、「思考そのもの」——それが世界の中、そして私たちの魂の中に織りなされている生きた思考を捉えようとする活動であると考えらるならば——は、脳から完全に独立した魂の活動であると仮定します。脳は、日常の意識がそれを目にすることができるよう、生きた現実の鏡像を作り出すためにのみ必要なのです。人智学的な研究の立場から見ると、認識のプロセスとは実にそれほどまでに複雑なものなのです。

これらすべての中に、日常の意識の神秘が隠されています。前に述べたように、私たちの日常の意識は、私たちが自分自身を「自我（I）」として経験できるよう、周囲の自然界から自分自身を切り離す能力を私たちに与えるように構造化されています。

この意味において、人智学は、私たちの日常の意識を作り出す力は、自分自身を「自我」と呼ぶ存在へと私たちを仕立て上げる力と同じものであるという、アドラーやユングの主張と完全に一致しています。私たちはさらに一歩進んで、アドラーが極めて強く強調した「自我意識は常に強いエゴイズム（利己心）と足並みをそろえて進む」という点にも同意することができます。これは確かにその通りです。

しかしながら、人智学は、エゴイズムの原因についてアドラー心理学とは異なる理由を特定しています。アドラー心理学は、エゴイズムは人間本来の特定の劣等感を補償するために生じると教えています。これに対して人智学の立場からは、エゴイズムの根源は次の二つの状況にあると考えられます。

第一に、私たちが大人へと成長するにつれて、私たちは自分自身の肉体とますます同化し、周囲の世界から切り離されているように感じます。このことが、私たちに自分のエゴを強く主張させようとするのです。第二の理由は、日常の意識の中では「私は誰なのか？」という問いに対する答えが、私たちは決して完全には見出せないという点にあります。このことが、文字通りの意味でのエゴイスティック（利己的）で「自己を追い求める（利己的な）」人間に私たちをさせてしまうのです。この自己追求は、「私はある（I am：自我の本質）」という内的な経験が真に感じられたときに初めて静まり、満たされます。なぜなら、そのとき不穏な努力は終わりを迎えるからです。そしてこれは、意識が「イマジネーション」という高次のレベルへと引き上げられたときにしか起こり得ません。

経験が示しているのは、高次の意識が達成されると、私たちの自然に見える傾向のいくつかが逆転（反転）するということです。この新しい意識の一部となるのは、「これまでに私たちの日常の意識を形成してきた力は、人間を宇宙から遠ざけるような、収縮させ、狭める作用を持っていた」という認識です。私は、それらが「反感」の力であり、お望みなら「憎しみ」の力であるということもできます。

この新しい高次の意識が達成されるやいなや、内的な発達新しい方向へと向かいます。反感、憎しみ、そして収縮の力は、その目標に到達しました。それらは今や「共感」、愛、そして「拡張」の力へと転じることができるのです。イマジネーション認識は、自我が肉体から独立していることを見出しているため、拡張していくことができます。

この段階において、高次の知識を追い求める者には、さらにもう一つの現象が姿を現します。人間は大人になって完全に目覚めた意識（覚醒意識）を獲得したとしても、常に目覚めたままではありません。定期的な間隔で、別の形態の意識へと入っていきます。そのうちの 하나가「夢の状態」です。私たちが夜に眠りに落ち、夢の状態に入るとき、実際には何が起きているのでしょうか。

イマジネーション認識から見ると、目覚めている間は完全に肉体に委ねられていた魂が、ある程度まで肉体を「離脱している」ように見えます。その離脱の度合いは、イマジネーション認識を達成した人の場合と全く同じです。したがって、夢を見ている人の内ではある種の「意識の拡張」が起きており、それは高次意識が精神科学者に提供するのと同じ拡張です。しかしながら、必要な訓練を経ない人の場合、意識は拡張するにつれて「朧げ（薄暗く）」になってしまいます。これをもう一度、図（図2）で説明しましょう。

【図2】

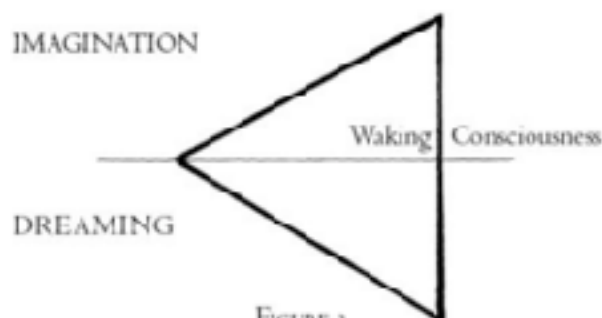


図2

真ん中の線が、私たちの目覚めている意識（覚醒意識）の明晰さのレベルを表していると仮定しましょう。夢における明晰さは、それよりも幾分薄暗い（朧げな）ものです。意識が朧げになるにつれて、私たちの核心である「自我（I）」の経験も同様に薄れていきます。

私たちが夢を見ているとき、私たちは実際、精神研究者がイマジネーション認識において離脱しているのと全く同じくらい肉体から離れており、私たちの意識もそれと同じくらい拡張しています。これを逆にして、次のように言うこともできます。「精神研究者は、夢を見ている人と同じ世界にいる」と。しかし、精神研究者がこの世界にいるときの意識の明晰さは、夢を見ている人の意識が通常の意識より下にあるのと同じくらい、通常の意識より遥かに高次のレベルにあります。同時に、「自我」の意識は、夢を見ている人の内で薄暗くなっているのと同じくらい、研究者の内では遥かに明るく輝いているのです。

このため、精神研究者は超感覚的な観察の助けを借りて、夢の状態の本質を説明できる立場にあります。それでは、夢の本質とは一体何なのでしょう。

私たちが夢を見ているとき、私たちの魂は文字通り、肉体を超えて非常に広大な範囲へと広がっています。魂は、世界全体を相互に貫いている「生きている客観的な思考」の領域と織り合わされているのです。この領域には、あらゆる生きている動物や植物の根底に元型（アーキタイプ）が存在するのと全く同じように、私たち自身の肉体の根底にある「生きている、形を与える元型」も属しています。

シュタイナーは、これらの生きている、形態を創造する思考の存在（思考実体）を、その非物質的でありながら能動的に形を作る（可塑的な）性質を強調するために、「エーテル形成力（ätherische Bildekräfte）」と呼びました。実際に、人間の肉体はこのようなエーテル形成力の組織によって支えられています。これらは、出生の前後に肉体にその特徴的な形態を提供するだけでなく、呼吸、循環、消化、代謝といった生命機能を常に維持することによって、生涯を通じて肉体を崩壊や分解の力から守っているのです。

時折、これらの力の活動の内部に「異常」が生じることがあります。これは、その異常の度合いに応じて、体調不良や病気という形で顕在化します。夢の状態において、人はこれらエーテル形成力の活動を直接的に察知しています。夢を見ている人は、特に病気の時期において、これらに対して敏感になります。しかし、それらは実際の形態ではなく、「象徴的なイメージ」となって現れるのです。

したがって人智学は、「すべての夢の経験は魂から直接生じる」という深層心理学の仮定には同意できません。夢のいくつかは、健康な肉体、あるいは病める肉体における「生理学的な機能」によって引き起こされた単なるイメージなのです。もちろん、他にも別の種類の夢は存在しますし、それらについても後でお話しします。しかし、ここでの描写からお分かりのように、イマジネーション認識を達成した精神研究者は、自然の内なる働きの中に浸透することができるだけでなく、目覚めと睡眠の間に横たわるゾーン——すなわち「夢の状態」——の中にも参入することができるのです。

[インスピレーション認識]

精神科学（霊学）的研究の道は、イマジネーション認識の達成によって完了するわけではありません。それは第一段階にすぎないのです。ここにはさらに二つの段階があり、かなり大まかな形ではありますが、ここでそれらについて描写します。

第一段階へと導く思考の訓練に、さらに「感情」の訓練、すなわち「心」の訓練を加えることができます。これらの訓練は、周囲の外部世界に対する思いやり（ケア）、献身（帰依）、そして開放性の力を著しく高めることになります。

イマジネーション認識を達成した後に、このような感情生活の修練が加えられ、望む目標に到達したとき、探求者は第一段階のときよりもさらに高い度合いで、自らを肉体から解放（離脱）させることが可能になります。その結果として、彼らは自らの内なる存在のさらに深いレベルである「自己（セルフ）」へと目覚め、以前よりもさらに明るく明晰な意識を獲得するのです——彼らは「自我」のより深いところへと到達します。

これもまた、コインの片面にすぎません。もう一方の面は、意識が再び大きな規模で拡張し、世界の思考、すなわち元型（アーキタイプ）の背後に横たわっているもの、それらを生み出しているものを直接経験できるようになる、という点です。

この経験とは一体何でしょうか。現代人にとっては信じがたく、幻想的に聞こえるかもしれませんが、これはリアルな経験なのです。人は、階層的な秩序を持って現れる、分化された「霊的諸存在」を目にすることになります。私たちは彼らを「神聖な存在（神々）」と呼ぶこともできます。なぜなら、彼らこそが古代の人々が神々と呼んだ存在であり、キリスト教の秘教的伝統が、天使、大天使、権天使、能天使、座天使などの「階層（ヒエラルキー）」として語ってきた存在だからです。人智学の研究者はこれらの存在と直接接触し、お望みなら、彼らと「霊的な対話」を交わすことになります。

このレベルにおける経験は、単なる観照（見る行為）にとどまらず、強烈な「傾聴（聴く行為）」のようでもあります。そして、そこで聞こえてくるものこそが、「天球の音楽（球体音楽）」、すなわち宇宙の音楽と呼ばれてきたものです。それは、これら神聖な存在たちが聴き手の魂に向かって語りかける方法なのです。この聴覚体験は、霊的な「吸気（息を吸い込むこと）」のようにも知覚されます。そのため、人智学はこの経験を「インスピレーション」と呼びます。

この豊かな経験の一つの側面についてだけ言及しましょう。この段階において探求者に明かされるのは、これら霊的な階層（ヒエラルキー）と接触するのは自分だけではなく、すべての「一人の人間」が同じように接触しているという事実です。これは、私たちが「深く、夢のない睡眠（熟睡）」に落ちるたびに、生涯を通じて定期的な間隔で起こっています。

私たちが眠りに落ちて昼の意識（日常の意識）を失うとき、私たちの魂は、夢の状態にあるときよりもさらに大きく肉体から分離（離脱）します。私たちの意識が拡張すると同時に、それはさらに高い度合いで臙げになり、ほとんど「無意識」と呼べるほどになります。それは完全な無意識ではなく、極めて薄暗い（臙げな）気づきの状態です。その瞬間、私たちの「自我」の意識は完全に消滅しています。

私たちはこのとき、精神研究者がインスピレーション認識を達成したときに見出すのと全く同じ環境の中に身を置いています。あるいは、逆の言い方をすることもできるでしょう。精神研究者は、インスピレーション認識の状態にあるとき、眠っている人と同じ世界にいますが、研究者の意識は自らの昼の意識よりも遥かに明るく、眠っている人の意識はそれよりも遥かに薄暗い（臙げな）のです。

通常、私たちは目覚めている意識（覚醒意識）とは対照的に、睡眠状態を「無意識」の状態とみなし、これら二つの間に夢の状態を位置づけています。

しかし、インスピレーション認識はあまりにも著しく明るいため、それを達成した者から見れば、通常の意識は一種の「睡眠」——すなわち、霊世界に気づいていない「霊的な睡眠」——のように思えてしまいます。そのような人は、イマジネーション認識のことを、高次の意味における「夢の状態」として捉えるのです。

さて、ルドルフ・シュタイナーはインスピレーション認識を獲得した最初の人物ではありません。彼の前には長きにわたる「秘儀参入者（イニシエート）」の系譜が存在します。彼らはこのインスピレーション認

識の状態に、ある名前を与えました。それこそが「悟りの状態」です。菩提樹の下でのブッダの体験を思い起こしていただくだけで十分でしょう。

人智学の研究者は、眠っている人と全く同じ状態にありながら、それを「完全な意識」のなかで 経験するため、睡眠中に実際に何が起きているのかを観察することができます。これについては極めて多くのことを語り得ますが、ここでは一つの現象だけを厳選してお話しします。

先ほど申し上げたように、すべての人は、睡眠中、気づかないうちに特定の高次元の靈的諸存在の面前に身を置いています。睡眠から目覚めたとき、私たちはこれらの出会いについて何も知りません。しかし、私たちは睡眠中に経験したことの「残光（余韻）」のようなものを目覚めの生活（日常の生活）へと持ち帰っています。それこそが、「宗教的な感情や思考を持つ能力」なのです。

注目すべき事実は、ほとんどの人々が、そのような睡眠中の出会いについて何も知らないにもかかわらず、通常の生活の背後には何か超感覚的で、超人間的で、創造的、かつ神聖なものが隠されているに違いないという、ある種の深い感覚を抱いているということです。そして彼らは、「レリギオ（religio＝再び結びつくこと）」という言葉に表現されるような深い憧憬を持っています。それは、物理世界の背後にあると感じられる神聖なる靈的なものと、どうかして再び結びつきたいという憧憬です。

この憧憬は、実は毎晩の睡眠において満たされているのですが、そのために私たちが支払う代償 は「目覚めた意識の喪失」です。私たちは無意識の底深くへと沈み込み、朝目覚めるときに、多かれ少なかれ宗教的な感情を自らに携えて戻ってくるのです。これは、私たちが睡眠の経験から受け取る大いなる贈り物です。

もし誰かを長期間にわたって睡眠から遠ざけることが可能だったとしたら、他の好ましくない結果とともに、その人が宗教的な感情を持つ能力は完全に死に絶えてしまうでしょう。その人は確信に満ちた無神論者になってしまうはずです。私たちが宗教的な思考を持つことができるのは、毎晩眠りにつくという事実のおかげなのです。多くの皆さんには奇妙に聞こえるかもしれませんが、睡眠の中にこそ、宗教的な感情の「源泉」が存在しています。古代において、人々は睡眠の神聖さをよく認識していました。より近い時代では、詩人ノヴァーリスがその著書『夜の賛歌』の中で、このような思想を表現しています。

さらに、人智学的な研究に対して姿を現すもう一つの事柄があります。私たちが睡眠から目覚めるとき、私たちは睡眠経験のこのような全般的な残光を持ち帰るだけでなく、より具体的で「特定の影響」をも持ち帰っています。

地上におけるその魂の生の「運命（カルマ）」に応じて、魂は自らと特別な関係を持つ靈的諸存在と出会います。そして魂が、夢の世界とエーテル形成力の領域を通過して目覚めの意識へと戻るとき、これらの靈的諸存在は、私たちがすでに指摘した「無意識から意識へと染み出てくる」あの象徴的なイメージの衣服を身にまとうのです。

それらこそが、ユングが発見し、世界の大宗教の本質的な内容を構成していると彼が主張した「集合的無意識の元型（アーキタイプ）」の正体なのです。

ここでもまた、人智学はこの発見についてユングと心から同意することができます。これらの元型は確かに存在しています。しかし、自動車、飛行機、ラジオ、テレビなどによって引き起こされる外部世界の印象があまりにも圧倒的で騒がしく、無意識のより微細な印象をかき消し、追い出してしまう現代という時代においては、私たちが元型を意識することはほとんどなくなっていました。それらは、しばしば歪んだ形で、病理学的な状態においてのみ姿を現すように見えます。

日常生活がより単純で、静かで、より規則正しかった古い時代には、元型は人々の意識に対してより強い影響力を持っていました。それは人々がより夢の状態に近いところで生きていたからでもあります。ここで人智学はさらなる一步を進め、これらの元型（アーキタイプ）の経験が集合的な性質のものであり、誰にでも得られるものであるという点でユングと同意することができます。ジョーンズ氏であろうとミラー夫人であろうと関係なく、すべての男性と女性がこれらの経験をするようになります。それらは、異なる文化や人種の条件、あるいはそれらが顕在化する時代に依拠して分化しているにすぎないのです。

ここで再び、人智学は深層心理学の発見を拡大し、明確にすることさえできます。ユングは単に「元型が存在する」と言明することしかできません。それらは集合的無意識からやってきて、象徴として現れ、無意識のうちに経験されるものであり、その真の現実は無意識から奪い取ることができない（認識できない）というわけです。したがってユングにとって、元型の源泉は暗闇に包まれたままであり、彼にできるのはその性質についての仮説を立てることだけです。

初期の著作でユングは、元型を「遺伝の潮流に入り込んだ数千年に及ぶ人類の経験の結果」と考えていました。後年になると、彼は元型を「人間に本来根ざしている、認識・経験・行動における構造的な素質（心性的構え）」として捉えるようになりました。

それに応じて、彼は元型に対して単なる「心理学的な意義」しか認めず、その内容を、超人間的な存在のイメージや象徴とみなしています。そして、これら存在との個人の関係を、精神が形而上学的・超越的な領域へと行った単なる「投影」とであると見なしているのです。

これとは対照的に、人智学は「実際の経験」に言及することができます。なぜなら、高次の意識状態においては、研究者に対して、いわゆる無意識が照らし出されるからです。私たちは、父なる神、大母神、三位一体、神人、悪魔といった元型が、霊世界の特定の現実と、それと人間との関係性に起源を持っていることを発見します。人智学は、それぞれの元型の起源を具体的な方法でたどることができるのです。この講義の枠組みの中では詳細に立ち入ることはできませんので、これらについてはシュタイナーの著作や講義録を参照してください。次の講義では、これらの元型のうちの一つだけを詳細に議論する予定です。

[イントゥイション認識]

私たちは、精神科学的研究の道のまだ終点には到達していません。上述した思考と感情の訓練に、第三の訓練である「意志の訓練」を加えることによって、この道における第三段階に到達することが可能です。

これは何よりもまず、自らの意志に対して、言葉の最高レベルの意味における「道徳的修練」を与えることから構成されています。ここでも、関連する訓練はシュタイナーの基本著作に見出すことができます。意図した目標を達成するためにこれらが十分に実行されると、人はイマジネーション認識やインスピレーション認識において持っていたものよりも、肉体から独立して、自らの魂的・霊的な存在の中で「さらに多くの経験を持つ能力」を獲得します。

そのようなとき、人は文字通り自らの最も内奥にある核心へと目覚めるのです。これは、現在の発達段階において人間が到達しうる、最高度の「悟りの意識（目覚めた意識）」への上昇を意味します。人智学はこの段階を「イントゥイション認識」と呼びます。

やはり、ここまでの私の描写は、起こっていることの片面を扱っているにすぎません。もう一方の面として、イントゥイション認識はインスピレーション認識よりも遥かに広い範囲を持っています。それは、より高次の霊的諸存在を「より直接的に経験する機会」を提示するのです。それはまるで、その存在のなかに自らが完全に「没入（融合）」するかのようです。以前は彼ら（霊的諸存在）がイメージ（イマジネーショ

ン)や「天球の音楽」、あるいは「宇宙の言葉(ロゴス:インスピレーション)」の中で自らを表していたのに対し、今や彼らは、この意識状態にある人間と完全に融合するのです(図3)。

【図3】

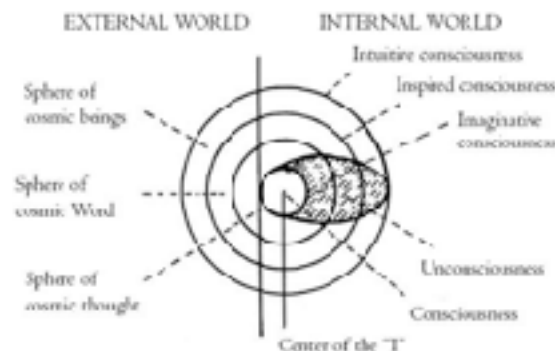


FIGURE 3
図3

人智学が導くことのできる、この超感覚的意識の最高段階において、もう一つの重要な真理が明かされます。それは、人間の内なる核心(コア)において、人間は上述した世界の中に織りなされ世界を創造している高次の霊的諸存在と「本質的に同一である」という事実です。

ここで一つのイメージを用いることが許されるなら、世界全体を巡り流れる「霊の海」の一滴が、すべての人間の内なる存在の中に生きているのです。探求者はいまや、植物や動物、鉱物とは異なり、人類は神聖なる存在たちの被造物であるだけでなく、彼らの「継承者」であり、彼らの「子孫」であることを見出すことができます。人間の親から生まれた子どもが人間であるのと全く同じように、人間は自らをこれら高次の存在たちの「神なる子」と呼ぶことができるのです。これらの存在は、宇宙的な意味における私たちの親であり、私たちの先祖なのです。

しかし、この高次の意識段階においては、さらにもう一つのことが明かされます。人間の生存の過程において、私たちは、困難な訓練を経験した参加者と全く同じように、霊的諸存在と直接接触することが何度も繰り返されています。これは、魂の肉体からの分離(離脱)が夢の状態よりも、さらには睡眠のときよりもさらに先へと進むとき、すなわち「死が訪れるとき」に、あらゆる人に起こることなのです。

古代より、死は「睡眠の兄弟」と呼ばれてきました。死において、魂は肉体からあまりにも完全に分離するため、肉体は崩壊し「塵へと戻り」ます。しかし、崩壊するのは肉体だけではありません。私たちが日常の目覚めている意識の中で持っているような「自我」の経験もまた、同様に崩壊するのです。それは睡眠のときのように一時的に消滅するだけでなく、永続的に、そして完全に消滅します。これが意味するのは、私たちが地上の生活の中で知り、自分自身であると同化していた「人格」は、死によって消え去るということです。それは私たちの死を超えて存続することはありません。

しかし、あるものは確かに残り、存続します。それこそが、ここで私が描写してきた高次の意識段階へと秘儀参加(イニシエート)されない限り、私たちが生涯を通じて見つけることのできない「(真の)自我」なのです。この自我は生き残り、最終的に私たちの存在の最も内奥にある核心へと蒸留(抽出)されます。そしてこの核心は、いわば自らの年上の兄や姉たちに対するかのように、霊的存在たちとの直接的な交流の中で生きることになります。

ここで私は、これをもう一度逆の言い方で表現することができます。精神研究者は、イントゥイション認識の状態にあるとき、死者と「全く同じ状態」にあります。ただ唯一、精神研究者はこれを、まだ生きて肉体の中にいながらにして、「完全な意識」の中で経験しているという点だけが異なるのです（図4）。

【図4】

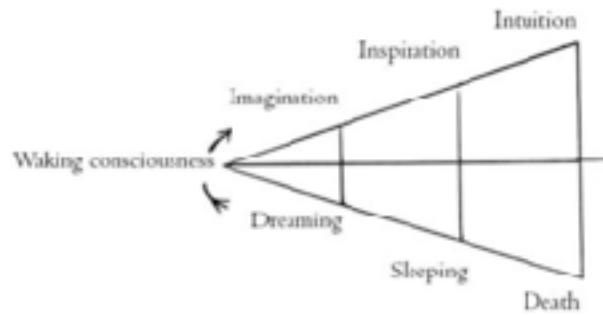


FIGURE 4

図4

このように、精神科学（霊学）は死の謎を解き明かす立場にあります。そして、この謎に対する答えこそが「不滅（不死）」なのです。もちろん、通常のパーソナリティ（日常の個性・人格）が不滅なのではなく、人間の内なる「霊的な核心（コア）」が不滅なのです。これは地上の生活の中では、イントゥイション認識においてのみ明かされるものです。人間の内なる核心の不滅性は、イントゥイションという意識状態において「直接の経験」となります。

このため、人智学は「死後の世界がどのようなものであるか」を具体的に描写することもできるのです。精神研究者に明かされるのは、人間の核心は、霊世界である一定の期間を過ごした後にそこへ永遠にとどまるのではなく、再び地上へと戻り、新しい生へと入るという事実です。言い換えるなら、精神科学は「輪廻転生」という事実到達するのであり、同時に輪廻転生の持つ意味も明かされることになります。

すべての人間は、あまりにも豊かな才能と潜在能力を秘めているため、単一の地上の人生だけでは、それらすべてを発達させるには決して十分ではありません。その一方で、この地上の生活が一生の過程において私たちに提供してくれる可能性——物質的な地球という試練、私たちが強さや不屈の精神を発達させるのを助けてくれる障害や困難——もまた、一度きりの人生で完全に汲み尽くすことはできません。したがって、魂は永遠にではないにせよ、何度も、そして多くの異なる条件下で地上へと降りてこなければならないのです。それは、この地上で学び経験できるすべてのものを獲得するために必要な回数だけ繰り返されます。魂がこれらすべてを発達させきったとき、それはまた別の形態の存在へと進むことになります。これらについては、今の段階でお話しすることはできません。この講義の限界を超えてしまうからです。

これまでのすべての内容によって、何が語られたことになるでしょうか。

死の本質（性質）だけでなく、人間の「誕生の秘密」をも知ることが可能になる、ということです。死の秘密とは、魂が肉体から「離肉（エクスカーネーション：霊化）」するという事実にあると学ぶのと同様に、人間の誕生の神秘は、魂が「新しい肉体へと受肉（インカーネーション）」するのを目にするときに解き明かされます。その新しい肉体は、遺伝的な特徴や才能の正確な組み合わせをもって、その魂のためにあらかじめ準備されているのです。

この認識によって、私たちは人間の誕生が持つ「尊厳」への理解を、もう一度勝ち取ることになります。真の人間としての尊厳は、人類が動物の場合のように、単に「種を永続させている」だけではないという事実にあります。（地上では）人間の「個別性」がここ地球上で自らの潜在能力を完全に発達させられるよ

う、その「鞘（からだ）」が何度も何度も準備されているのです。人間の誕生が持つより深い意味とは、人間のケースにおいては、種の進化に「より高い目的」が与えられているという点にあります。すなわちそれは、一つの受肉から次の受肉へと、個別性（個々の魂）が発達していくために奉仕しているのです。

〔人間の誕生の尊厳〕

さて、私は、人智学が（この講義の前半で指摘した事例のように）深層心理学の特定の視点を拡張したり修正したりする以上のことを、どうしても行わなければならない局面に到達しました。「性的衝動（性欲）、すなわち繁殖への衝動こそが、人間の精神におけるすべてを包括する推進力である」と主張するフロイトの見解に対して、私たちはそのような理論とは「真っ向から対立する」立場にあることを宣言せねばなりません。

私たちの現在の状態から、今日ほど昼の意識（日常の意識）がまだ発達していなかった初期の時代（古代）を振り返ると、当時の人類は、夢や睡眠の領域、そして誕生や死の彼方に横たわる意識状態と、はるかに緊密に結びついていたことが分かります。当時の神話、宗教、そして儀礼的な慣行は、この事実に深い感銘を与える証拠となっています。

当時は、世代の継承、結婚、そして子孫の誕生に関わるすべての事柄に、極めて大きな重要性が置かれていました。これらすべては、若い男女が課せられた「元服の儀礼（成人儀礼／イニシエーション）」から始まり、当時実践され、その一部が今日まで生き残っている数多く多様な結婚儀式に至るまで、豊かな儀礼、カルト（祭祀）、そしてセレモニーの中に表現されていたのです。

精神分析学が「人間の根源的かつ基本的な衝動は性的衝動である」と主張するとき、それは「甚だしい誤解」であるとしか言いようがありません。

子孫の誕生をめぐる数多くの儀礼や習慣が存在した理由は、こういうことでした。当時、人々は人間の誕生の神秘について、単に物理的（肉体的）な側面をはるかに超えた理解をまだ持っていたのです。私たちは、古代インドをはじめとする他の古い文化の中に、輪廻転生の知識を見出します。すべての古代文化において、私たちは、誕生前における人間の魂の「前存在（プレ・エグジスタンス：生まれる前から魂が存在していること）」、そして「誕生とは本質的に受肉のプロセスである」という事実に対する、少なくとも微かな予感や感覚を見出すことができます。

これらすべての習慣やセレモニーは、若い世代が人生と誕生のより深い結びつき（つながり）を理解し、これらの経験に対して正しい心構え（態度）を持って臨めるよう、彼らに結婚と子育てへの準備をさせるためのものだったのです。このことは、古代の成人儀礼や結婚儀礼について知られていることから、完全に証明することができます。

時代の流れとともに、人類は私たちが今日持っているような、明晰な昼の意識（日常の意識）をますます発達させ始めました。それに伴い、私たちが人間の誕生の神秘に関する知識を完全に失ってしまうという危険が生じました。このことは、誕生のプロセスが持つ尊厳に対する私たちの態度を変化させ、それを単なる「肉体的な機能（生理現象）」としてのみ見なす原因となってしまいました。

この危険を回避するために、ある出来事が起こりました。それは（他のあらゆる重要な結果とともに）、人類がもう一度、誕生の神秘についての真の理解を持てるようにし、私たちの人間の尊厳を維持させるためのものでした。私がここで話しているのは、「キリスト事件（キリストの地上降臨）」のことです。

キリストの誕生について、天使ガブリエルがマリアに語った次のような言葉が伝えられています。

「おめでとう、恵まれた方、主があなたとともにおられます。あなたは身ごもって男の子を産むでしょう。その子をキリスト（イエス）と名付けなさい」
 マリアは答えました。
 「私は主の仕え女です。お言葉の通りに、この身になりますように」

マリアの姿の中に、私たちは、あらゆる時代において人間の誕生に対する正しい態度の模範となりうる一人の女性、一人の母親を見出します。そして、マリアは聖霊によってその息子を身ごもるのだと伝えられます。これによって、すべての「人間の誕生の最も内奥にある秘密」が明かされているのです。

なぜなら、人間のあらゆる母親は、自らの子どもを聖霊から受け取っているからです。それは、人間の個々の魂が新しい人生を始めるために降りてくる「霊世界」から、その子が生まれてくるという意味においてです。ただ、聖書の物語においては、人類の根源的な代表者（元型的な代表）として特徴づけられているキリストへの特別な言及として、この秘密が語られているにすぎません。彼は「神の子」と呼ばれています。しかし彼において明かされているのは、私がすでに申し上げたように、すべての間の誕生の内なる秘密にはかならないのです。中世において聖母マリアに捧げられた温かく深い崇敬（マリア信仰）は、当時の文化全体のために人間の尊厳を守り抜く役割を果たした、と言明できるでしょう。

15世紀から16世紀（ルネサンス期）を迎えるまでに、人間の意識はその進化において、私たちが霊世界の認識からほぼ完全に切り離されてしまうほどの段階にまで達していました。目覚めた昼の意識（覚醒意識）が主導権を握っていたのです。私たちが人間の誕生の秘密を完全に忘れてしまうという危険は、さらに大きなものとなりました。

そして今、私たちは、誕生の神秘へと私たちを目覚めさせうる「注目すべき事柄」が起こるのを目にします。今回、それは歴史的な出来事という形ではなく、一枚の「驚くべき絵画」の中で起こりました。私が話しているのは、ラファエロの『システィーナの聖母』のことです。

この絵画を見ると、その内容について知っている知的な知識をすべて忘れ、ただ絵の中の人物たちがあなたに何を語りかけているのかを見ようと試みてください。地面に膝を突き、ひざまずいている二人の人物（一人の男性と一人の女性）が見えます。彼らの上には、まるで天から地球へと浮遊して降りてくるかのような聖母がいます。彼女は腕にその子どもを抱いており、その子どもは、背景にあるすべての小さな天使の頭（顔）からたった今切り離され、母親の腕の中へと飛び込んできたかのように見えます。それは、母親が自分を地上へと連れて降りていけるようにするためです。

この絵の中の子どもが天から下降しているのは明白です。この母親を「人間の魂」の象徴、そして子どもを、受肉の途上にある若き「自我（I）」の象徴として捉えることができます。何世紀にもわたり、この絵画はそれを見つめた多くの人々に深い感銘を与えてきました。このようにして、それはおそらく、少なくとも「感情のレベル」において、私たちが自らの誕生の秘密に対する微かな予感をもう一度抱くのを助けてくれたのです。

19世紀半ばになって初めてダーウィンの進化論が登場し、大半の人々に多大な熱意をもって受け入れられました。この理論によって、人間は「最も発達した動物」という地位にまで格下げされ、それに伴い、人間は動物と同じように「種の中の一存在」にすぎないという仮定がもたらされました。このような思考様式（パラダイム）の中では、人間の誕生の秘密、すなわちその尊厳は完全に忘れ去られてしまいます。

これがフロイトの精神分析学への道を切り拓きました。精神分析学とは、本質的に「心理学的なダーウィニズム」、あるいは「ダーウィン化された心理学」にはかならないのです。精神分析学は、種の存続のために不可欠である性的衝動を、人間の魂における根本的で最も重要な衝動であると言明します。もしこの見解が私たちの文化において優勢なものとなってしまうとすれば、人間の誕生は最終的に動物の誕生と何ら変わらない

ものと見なされるようになってしまうでしょう。私たちの生存全体が動物のようなものとなり、文化は「野蛮（バルバリズム）」へと陥ってしまうはずです。私たちの今世紀（20世紀）には、これが本当に起こりうるということを示す、多くの警告的な兆候が存在しています。

この理由から、現代という時代においては、人間の誕生の神秘が「もう一度」明かされることが必要となったのです。しかし今度は、科学的な説明を要求する私たちの時代の傾向に適した形態でなければなりませんでした。

私の評価では、ここにこそ人智学の最も重要な貢献の一つがあります。なぜなら、人智学は真に「科学的な研究方法」を通じて、人間の誕生の秘密を解き明かすことができたからです。人智学の研究の道は、確かに通常の自然科学的アプローチとは異なりますが、これは調査対象となっている事柄の性質上、必要なことなのです。

人間の本質的な核心である「自我」の不滅性という経験に到達することによって、私たちはそれが「繰り返される地上の生涯（転生）」を通過していくのを目にし、人間の誕生はもう一度「受肉のプロセス」として認識されるようになります。

もちろん、新しい人間の誕生によって人類という種が繁殖しているのも事実ですし、私たちの下位の性質（動物的本性）において性的衝動が確かに活動しているのも事実です。しかし、私たちの本質的な存在は、性的衝動の中に自らを表現しているものではありません。その自然な衝動は、より高い目的、すなわち「個性（個々の魂）の進化」に奉仕するために高められているのです。もしこの知識が私たちの感情や情緒の中に受け入れられるならば、私たちは人間の尊厳にかなった、誕生のプロセスに対する道徳的かつ実践的な態度へと到達することができるでしょう。

私はここで、人間の魂の謎が、深層心理学と人智学においてどのようにその答えを見出すかを示そうと試みてきました。これまで見てきたように、人智学が、深層心理学のさまざまな流派が提供できるものを遥かに超えているとしても、私たちはこれらの謎への研究がいかなる意味でも完了しているとは全く考えていません。

私たちは、この一連の講義の冒頭で引用したヘラクレイトスとともに告白します。「たとえ世界のすべての隅々まで歩いたとしても、人間の魂の深さを解き明かすことは誰にもできない」

私たちは、魂に関する完全な認識が達成されることは決してないと確信しています。未来は、魂の働きに対する、より多く、そしてより深い洞察をもたらすでしょう。それは、私たちが今日では夢にも思わないような洞察なのです。

人智学は、この主題について知るべきすべてのことを発見したなどと自負してはいません。しかし、私たちの魂の次元と尊厳を認識するのを助けてくれるこれら事実の発見は、現代という時代のために重要な貢献を提示しました。人間の魂に対するこの「刷新された見方」がなければ、人類が人間以下の存在（亜人間的生存）の深淵へと沈み込んでしまう危険が、確かに存在しているのです。

ハンス・エアハルト・ラウアー (Hans Erhard Lauer)

3つの講義

「魂の謎——深層心理学と人智学」

・講義3「深層心理学と人智学」

●基本的な視点

深層心理学と人智学の根本的な違いと関係を詳しく比較する。

深層心理学は魂の深層に光を当て、
現代の文化的病理を診断する大きな貢献をしたが、
人智学はその真理を認めつつ、さらに深く、
霊的実在と人間の尊厳を明らかにする。

現代人は知識と信仰の分裂による内面的危機にさらされている。
人智学はこの分裂を癒し、
科学の精神から宗教を新しく生み出すという現代の課題に応える、
唯一の包括的な道であると言える。

●要点

○深層心理学と人智学の根本的な相違点

- ・深層心理学：
通常意識の範囲内に留まり、無意識を仮説的に研究。
魂の領域のみを扱う。
- ・人智学：
意識を段階的に高め
(イマジネーション・インスピレーション・イントゥイション)、
霊的実在の世界を直接経験。
魂だけでなく、精神(霊)の領域まで認識する。

深層心理学が「無意識」と呼ぶものは、
人智学では未だ発見されていない霊的要素に他ならない。

○魂と精神の捉え方

- ・深層心理学では、精神的なものは
魂の領域に「投影」された形でしか現れない。
- フロイト：道徳的衝動としてわずかに垣間見える。
- アドラー：共同性・社会性として現れる。
- ユング：集合的無意識と元型として最も明確に現れるが、
それでも魂の投影として捉え、真の霊的実在としては認識しない。

ユングの「自己(Self)」は

シュタイナーのいう不滅の「Ich（靈的自我）」に極めて近い概念であり、「個性化」も人智学の個性化過程と重なる。
しかし、ユングは転生輪廻を認めず、「自己（Self）」を魂の領域を超えた靈的実在としては捉えていない。

○イマジネーション認識と元型の世界

ユングが体験した元型の世界は、
人智学のイマジネーション認識に相当するが、

ユングは元型を魂の象徴・イメージとして扱い、
危険を避けるためもあり、そこに留まる。

人智学は、思考訓練により「Ich」を強化し、
元型を生き生きとした（エーテル的）形成力として客観的に認識。
さらにその先へ進む。

人智学では、イメージの世界を意図的に「消去」することで
インスピレーション認識へ移行し、高次の靈的存在と直接出会う。
これは古代の秘儀的入門に相当するが、
それが現代の意識にふさわしい形で可能となった。

○キリスト存在の意義（最大の相違点）

ユングは、キリストを「元型の元型」として、内的な個性化の象徴と見なす。

人智学は、キリストは実在の神靈存在であり、
ゴルゴタの秘儀は歴史的事実であると同時に
メタ歴史的な宇宙的事実であるとする。

このことによって、人間の意識構造自体が根本的に変化し、
現代における覚醒した「Ich」の発展と靈界認識が可能となった。

○歴史と人間の進化

人智学は、人類意識の進化を以下の流れとして捉える。

- ・古代：靈界が見えていたが「Ich」が弱かった。
- ・近代：外界の意識が強くなり、靈界は完全に無意識化（「墮落」）。
- ・ゴルゴタ以降：キリストの力により、覚醒した「Ich」をもって
再び靈界と結びつく道が開かれる。

○知識と信仰の和解

ユング心理学は宗教と科学の架け橋として一定の役割を果たしたが、
魂の領域に留まるため、真の和解には至らない。

人智学は、科学的精神（厳密な認識方法）をもって靈的世界を明らかにし、。

宗教的体験を「感情・信仰」から「明晰な認識」へと高める。
知識と信仰、科学と宗教を本質を損なうことなく真に和解させる現代の道である。

●本文（意識）

最初の2回の講義では、人間の魂という謎に対して、深層心理学と人智学（がそれぞれ提示してきた答えを見てきました。私たちの比較を締めくくるにあたり、今夜はこれら2つの研究手法の違いについて、さらに詳しく掘り下げていきます。

過去2回の私の講義から、人智学がどのようにして答えを見出しているか、十分に明確になったことと思います。人智学は、「宇宙的思考」「宇宙の言葉」「現れ出る霊的存在たちの世界」という3つの段階として立ち現れる、客観的に実在する神聖な精神世界（霊界）を認識することによって、その答えを見出しているのです。深層心理学には、これらについての言及は一切ありません。

また、これら2つの研究手法が異なる結果をもたらすのは、対象にアプローチする際の両者の「初期の態度」に起因している、とも説明しました。深層心理学は完全に通常の意識の領域にとどまり、そこから結論を導き出すと同時に、無意識についての理論的な仮説を提示します。これに対して人智学は、意識の拡張へとつながる独自の修行の道を開発しているため、いわゆる無意識を「意識化」することでその真の姿を認識できるだけでなく、3つの側面を持つ人間の魂が神聖な精神世界（霊界）とどのように結びついているかを説明することができます。

両者のアプローチの違いは、次のようにも表現できます。人智学的な研究は精神（霊）的な要素の中で行われ、魂を「肉体的な要素」「魂の要素」「精神（霊）的な要素」という明確に異なる3つの部分として認識します。一方、深層心理学は完全に「魂の要素」の中にとどまります。

ここで、人智学の用語において、精神（霊）的な要素は人間の「核（コア）」を構成するものであることを思い出してください。それは私たちの通常の意識からは隠されており、「イマジネーション」「インスピレーション」「インテュイション」という高次の意識レベルに達したときに初めて目覚めるものです。これに対して魂の要素は、夢を見ている状態ではぼんやりと経験され、通常が目覚めている状態において完全に鮮明に経験されます。

[深層心理学と人智学における「魂」と「精神（霊）」]

深層心理学が精神的なものを無視し、魂の要素だけを扱っているという事実は、「ロゴセラピー」の創始者であるヴィクトール・フランクルによっても批判的に認識されていました。深層心理学側はこのような批判に対し、自らの最大の関心は常に「プシュケー（心・魂）」であったと指摘して自己弁護するかもしれませんが、それは確かに正当な理由です。しかし問題は、深層心理学が特に「無意識の探求」に関わっている点にあります。人智学にとって、いわゆる無意識とは、ベールに包まれた未発見の「精神（霊）的な要素」にほかなりません。この観点から見れば、深層心理学も実際には人間の精神的なものに関わっていると認めざるを得ないのです。

だからこそ、私はこれら2つの重要な学問分野を非常に厳密に比較したいと考えています。人智学が人間を「高次の自己」の発展へと導き、それによって真の自己認識へと導くことを目指すのに対し、深層心理学は精神（魂）の領域への投影を通じてしか高次の自己を捉えることができません。しかし、この方法では、本来最終的な目標であるべきことを達成することは不可能です。この不十分さこそが、ヴィクトール・フランクルに「ロゴセラピー」を開発させるきっかけとなりました。

もちろん、深層心理学の理論にも精神的な要素は明らかに現れています。なぜなら、現実の人間は常にその全体性において活動しているからです。しかし、精神分析や個人心理学（アドラー心理学）が描く魂のイメージにおいて、精神的なものは極めて控えめに、ほとんど認識できないほどに微かに輝いているにすぎません。

フロイトの理論でいえば、彼が道徳的衝動や価値判断について語る部分にそれを見出す必要があります。またアドラーの理論では、社会的衝動や共通の理想の中にそれが見られます。これらは確かに魂の発達において非常に重要な要素ですが、その起源や有効性についての十分な説明がなされているとは言えません。そのため、フロイトは晩年、性衝動に加えて、心のなかに第二の基本衝動である「死の願望（タナトス）」を想定する必要に迫られました。彼はこれが良心の根底にあると考えたのです。また、個人心理学の支持者であるE・ウェクスバークは1928年に次のように告白せざるを得ませんでした。「一方で高まる個人主義とパーソナリティ崇拜、他方で共同体感覚を発達させる必要性、この両者の対立する力が、個人の生活だけでなく国家の生活においても、悲劇的に何度も繰り返される克服不可能な問題を引き起こしているのである」

ユングの「コンプレックス心理学」においては、精神（霊）的なものは明らかに一段と顕著になります。それは「集合的無意識」や「元型（アーキタイプ）」の世界として表現されています。それでもなお、それは真の姿や現実性を持って現れるのではなく、投影という形で魂の要素をまとめて現れるにすぎません。元型を呼び起こすプロセスや体験は無意識から決して奪い取ることはできない、というユングの仮定のなかに、彼の深層心理学においては人間の「精神（霊）的目覚め」について語ることはできないという証拠が見出されます。

確かに、ユングは精神的目覚めの方向へ向けて、非常に重要な第一歩を踏み出しました。彼は、意識と無意識という二つに引き裂かれた魂の要素を再統合することの必要性を説いています。そして、彼が「自己（セルフ）」（意識と無意識の間に位置するもの）と呼んだ人間の中心核の再覚醒こそが、人間の発達における最高目標であると考えています。

さらに、ユングが日常的な自我（エゴ）と対比して「自己（セルフ）」と呼ぶものは、ルドルフ・シュタイナーが「不滅の『私（自我）』」あるいは「高次の自我」と呼んだものと同一視することができます。これは、繰り返される地上の生涯（転生）のプロセスを通り抜けていくものです。そして最後に、ユングは真の自分になるプロセスである「個性化プロセス」について語っていますが、これは最高目標として達成されるべき、シュタイナーの「個体化のプロセス」の概念と同一のものです。しかし、こうした類似性があるにもかかわらず、ユングは「輪廻転生」について何も語っていないため、自己（セルフ）の性質を完全には認識していません。

[イマジネーション認識におけるイメージの世界]

ユング自身が高次の意識状態にあったときに会った「元型の世界」についての彼の描写から判断すると、この体験はシュタイナーが「イマジネーション認識」と呼ぶものと同等とみなすことができます。これは人智学の文献に記述されている最初の段階です。実際、「イマジネーション」という概念はユングにとって非常になじみ深いものです。彼やその弟子たちは、神話、おとぎ話、幻視、儀式、錬金術の操作などに見出される、想像力豊かな象徴的イメージを心理学的に解釈し、解き明かすことを好みます。しかし、彼らは元型の発見という探求の道をそれ以上進む勇気を持ちません。なぜなら、それは危険であるか、あるいは不可能でさえあると仮定しているからです。

ユングによれば、元型の世界へと浸透していくことには、人の精神的健康を脅かすような、増大し続ける危険が伴います。このイメージの世界は、圧倒的な力を持っていることが証明されています。これに身を委ねようとする者は誰も、いわば自分の自我が押しつぶされるかのように感じられます。あるいは、イメージと過度に一体化してしまうと、誇大妄想に苦しむことになるかもしれません。

これらの危険は人智学においてもよく知られており、高次の認識への道において直面するものです。私が前回の講義でそれらに言及しなかったのは、人智学のイニシエーションの段階について概要を概説したかっただけだからです。人智学がこれらの危険にもかかわらず、啓発へのさらなるステップを促すのは、修行者が特別な準備（アサナや瞑想などの修行）を行うからです。これにより、学生にはこれらの圧倒的な体験に耐える強さが与えられ、害から守られます。

前回の講義では、新しい方法で自然界に没頭する能力へとつながる、特定の思考のエクササイズについてお話ししました。そこでは「宇宙的思考」、すなわちすべての自然物に形を与える、生きた「形成力（フォルム形成の力）」が明らかにあります。

イマジネーション認識の体験を通じて、人智学者は深層心理学とは異なる、自分自身の魂との関係を獲得するだけでなく、現代の自然科学が保持しているものとは異なる、自然界への視界が開かれます。前回の講義で見たように、深層心理学は自然界を完全に物質からなるものとみなしている点において、自然科学の視点を完全に共有しています。この基盤から、最新の科学的知見に応じて変化し続けるあらゆる種類の理論や仮説が構築されます。人智学はこれを超え、自然現象の「背後」にある、創造的で形成的な精神（霊）を発見したのです。

このようにして捉えられた精神（霊）は、この意識段階における強力な体験によって人智学の研究者が圧倒されてしまう危険から、その身を守ってくれます。これは次のように表現することもできます。私たちは、先述の思考のエクササイズによってイマジネーション認識が達成されることを見てきました。これらのエクササイズは、思考の強度とエネルギーを非常に高いレベルにまで強化します。その結果、（これまでに見てきたように）物理的な脳とは完全に独立して思考プロセスの中で活動している「私（自我）」が、生き生きとした画像（イメージ）の猛襲に対して、自分自身をしっかりと維持することができるようになるのです。

精神科学者（人智学研究者）は、この新しい体験にゆっくりと慣れていくにつれて、幻想的な方法でそれらの画像と一体化してしまうことなく、自由にそれらを観察し、自分自身の創造的な方法で利用できるようになります。シュタイナーはこの世界を「自由なイマジネーションの世界」と呼びました。これらは、私たちが夢の中で経験する「強制的（執拗）」な形態のイマジネーションとは対照的に、自由なものです。

高次の意識段階において、私たちはこれらの夢の画像を正しく解釈することができます。では、それらはどのように「強制的」なのでしょう。私は昨日、夢の状態において魂が身体から離脱する度合いは、イマジネーション認識において離脱する度合いと同じであると言いました。ここで、この発言をいくつか修正しなければなりません。この場合の「身体」とは、私たちが日常の意識のために必要とする、脳と神経系の機能のことを指しています。昨日申し上げたように、夢の意識は、イマジネーション認識が鮮明になるのと同じ度合いで薄暗くなります。

この違いをどう説明すればよいのでしょうか。それは、魂が脳や神経系の機能から退くにつれて、呼吸、血液循環、そして新陳代謝のプロセスにより密接に結びつくようになるからです。これらは、昨日の講義で言及した、生き生きとした、創造的な「形成力」の助けを借りて身体の中で働いています。このように、夢の状態において、魂は目覚めている状態とは異なる身体機能と結びついています。このことが原因で、夢の画像が生理学的なプロセスによって支配されるだけでなく、非常に強い強制力を持つようになることがよくあります。夢見ている人が、その強力な画像から自らを解き放つことが不可能であるケースもしばしば見られます。

古代から人々の夢に現れてきた神話的な画像についても、同じことが言えます。これは、独立した思考が進化する前の時代、特にギリシャ時代以前において顕著でした。これらの夢のイメージは、偉大で元素的な

（自然本来の）力を持って立ち現れ、消し去ることができませんでした。その起源が物理的な身体とその機能に結びついていたため、それらのイメージは、他の意味合いは別としても、生理学的な意義も有していたのです。

精神科学的（人智学的）な修行を積むことなく、深層心理学的あるいは自己分析的な方法によって、夢の画像の世界を通常の意識へと引き上げ、それを文学的あるいは芸術的な手法で解釈しようとするときにも、これと似たようなことが起こります。いわゆる「自由連想」は、実際には自由なものではなく、半意識的な夢の印象によって引き起こされているのです。このような方法で夢の画像を扱うことには、その暗示的な力に囚われてしまう危険が伴います。

ユング自身も「受動的イマジネーション」と「能動的イマジネーション」を区別し、能動的イマジネーションによって完全に自由なイメージの選択が可能になると主張しました。彼はこれらのイメージを患者の治療目的（セラピー）に使用しており、シュタイナーの意味におけるイマジネーション認識に非常に近づいていました。それでもなお、そのアプローチは異なります。深層心理学が治療（セラピー）を目指すのに対し、人智学は高次の認識を目指します。ユングにとっては、まさに完全な目覚めの意識と夢の意識の間に位置する「無意識の領域」に、できる限り参入することが重要でした。これに対して、人智学的な意味におけるイマジネーションは、完全に明晰で拡張された意識の圏内において起こるのです。

この違いの中にこそ、ユング心理学が先述のレベルにとどまり、一方で人智学がより高次の精神的（霊的）な目覚めの段階へと導くことができる理由があります。強迫的なイマジネーションを伴う夢をあとに残してさらに進むと、通常の意識が完全に薄暗くなる「睡眠」の領域へと入っていくことができます。ここにおいて、無意識は完全に不可解なもの（侵入不可能なもの）に見えるに違いありません。

睡眠にもまた2つの側面があります。一方では、魂は夢のときよりもさらに身体から引き離されています。他方では、目覚めている状態とは逆の方向、かつ異なる目的のために、魂は身体のプロセスへとさらに深く潜り込んでいます。目覚めている状態が疲労や消耗をもたらすのに対し、睡眠は再生と若返りをもたらします。

ユングは、睡眠状態の深い無意識をもたらす、この身体と魂のユニークで緊密な融合について、間違いなくある種の予感を抱いていました。彼はかつて次のように語っています。

「もし認識の光を無意識に当てることができたなら、物質とプシュケー（心・魂）の真の性質が明らかになるだろう」

私たちが人智学的な意味における「インスピレーション認識」の段階に達すると、私たちの意識は、睡眠状態とはさらに真逆の方向へと進んでいきます。意識を失う代わりに、私たちはより目覚めた状態（覚醒状態）になるのです。ここで、人智学の探求の道におけるもう一つの重要な側面を指摘しておかなければなりません。イマジネーション認識からインスピレーション認識への上昇は、単にエクササイズを重ねれば次の段階が付け足されるというような、単純な進歩ではありません。

まず、イメージの世界を「消去」できなければならないのです（これは、私たちが夢から睡眠へと移行するときに自然に起こることです）。修行者は、自らの意志によって今しがた参入したばかりのイメージの世界を、自ら消去しなければなりません。この行為を行うためには、「私（自我）」が十分に強くあらねばならないのです。イメージを消去すると、そこに真空（空虚）が生じます。人は精神的な空虚の深淵の前に立たされることになるのです。

しかし、この真空が「精神的な吸引力」を生み出し、それによってインスピレーション認識の中で経験される「宇宙の言葉（ロゴス）」が引き込まれてきます。この局面においてこそ、事前の準備のエクササイズ

がその真価を発揮します。強化された「私（自我）」がなければ、イメージの世界を消去し、必要な精神的真空を作り出すパワーを持つことはできないのです。

イマジネーションとインスピレーションの間の境域を越えることは、精神科学者にとって確実に最も重要で、かつ最も深い体験です。これにより、研究者は高次の精神的（霊的）存在たちと、意識的かつ能動的な接触を持つことが可能になります。この関を越えることによって、人智学者は古代において「秘儀参入（イニシエーション）」と呼ばれていたものと同等のものを獲得します。古代においてそれは、神官の助けを借りて神殿の中で達成されるものでした。しかし現代においては、現代的な意識に見合った方法で達成することができるのです。

ここで、深層心理学と人智学を比較する上で根本的に重要な、もう一つのことについて言及しなければなりません。

〔神人の元型と歴史の超歴史的秘密〕

昨日私は、インスピレーションの段階に達した人には、すべての人間が熟睡している間に特定の精神的（霊的）存在たちと接触しているという事実が明らかになる、というお話をしました。私たちはこのことに気づいていませんが、目覚めるときに夢の圏内を通過するため、熟睡中に得た印象が、ユングが「集合的無意識の元型」と呼んだあのイメージを身にまとうことがあるのです。

今日、私はこれらの元型のうちの一つをより詳しく見ていきます。それは、キリスト教においてイエス・キリストとして表現されている「神人（神なる人間）」の元型です。ユングにとって、キリストはあらゆる元型のなかの元型です。なぜなら、キリストは人類の最高目標、すなわち「個性化プロセスの成就」の象徴だからです。この成就によって、人間の「私（自我）」は、常に全人類を包み込む集合的無意識であるとみなされてきた「自己（セルフ）」の担い手となります。

集合的無意識は、超人間的、超個人的、そして神聖なものとして感じられてきました。個人の意識への発達はまだ始まっていなかった古い時代において、集合的無意識の象徴は、最初の間である「アダム」でした。しかし、個人意識の出現に伴ってその象徴は変化し、現在では聖パウロが「新しいアダム」と呼ぶ姿として現れています。現代の人類にとっての最高目標は、私が最初の講義で引用した聖パウロの次の言葉で特徴づけることができます。

「生きているのは、もはや私ではない。キリストが私のうちに生きておられるのである」

探求の道を歩むなかで、精神科学者はキリストの本質に、実在する神聖な存在として出会うこととなります。この出会いは、まさにイマジネーション認識からインスピレーション認識、この境域を越えること自体を可能にしてくれている主であると認識します。

こうして、キリストとの出会いは、精神科学者が自らの道を歩む上での本質的な体験となります。キリストという存在は、精神世界（霊界）の秘密と、同時に探求者自身の存在のより深い秘密を授けてくれる「イニシエーター」となるのです。

この瞬間、福音書に記録されているような、パレスチナにおける一連の出来事の全景もまた、目の前を通り過ぎていきます。すなわち、ナザレのイエスという人物におけるキリストの受肉、その受難、そしてその復活です。シュタイナーは自伝のなかで、この瞬間のことを次のように記述しています。

「私の内的な発達は、深い内的な献身をもってゴルゴタの秘儀の前に立った瞬間に、その頂点に達した」

この言葉が意味するのは、「ゴルゴタの秘儀」という出来事があって初めて、人間がここで述べられているような道を歩むことが可能になった、ということです。この道においてこそ、「私（自我）」はさらに深い気づきへと目覚め、それによって精神世界と自分自身の存在を意識的な形で経験することができるようになるのです。

古代においても、特定の個人が高次の世界に関する知識へと参入し（イニシエーションを受け）、神聖な存在たちと対話する可能性を手にしていましたが、これは「神殿睡眠」を通じてしか起こり得ないことでした。修行者は、深く、死のような睡眠に落ちるよう促され、儀式的に埋葬されたのちに、再び呼び覚まされました。そうして、彼は高次の知識を手に入れたのです。

神秘神殿のコミュニティ全体がこのプロセスに関与しており、新しい参入者がその道を歩むのを助け、先述したような危険から彼を保護していました。その結果、その秘密の知識は彼自身の個人的な事柄ではなく、神秘コミュニティに帰属するものとなりました。これこそが、秘密の知識を漏洩する行為が死罪に値するとされた理由です。

古代の神秘学校においては、いつの日か重要な出来事が起こることが知られていました。それは、参入者たちが秘密裏に対話することのできた「神」が、肉体を持って受肉するだろうということです。古代世界のあらゆる場所（インド、エジプト、ギリシャ、ケルト文化など）において、神聖な子供を胸に抱く、あるいは膝にのせる母親のイメージが、多くのバリエーションを持って見出されるのはそのためです。しかし、それは予言的な意義しか持っていませんでした。

今や、福音書に記述されている出来事は、イエスという人格が経験しなければならなかった内的な体験の「象徴的なイメージ」として、確かに見なすことができます。ヨルダン川での洗礼、受難、死、埋葬、そして精神（霊）の完全な栄光の中への復活。これらは、かつての神秘神殿において参入者たちが経験した事柄を思い起こさせるものです。

しかし、それらの出来事は内的な、象徴的な意味だけを持っているわけではありません。それらは宇宙的な意義を持つ「現実の出来事」であり、人間の肉体における「神の受肉」だったのです。誕生、生涯、死、そして復活は、歴史という舞台の上で完全に可視化され、繰り広げられた現実の出来事です。これこそがパレスチナにおける出来事の深い意義であり、そこには二重の意味があります。それらはナザレのイエスという個人にとっては内的な、神秘主義的な体験でしたが、同時に「歴史的な出来事」でもあったのです。

それは、イエスという男が生きて精神的な目覚めを経験し、それによっていくつかの驚くべき行為を行い、そのために十字架の死という処罰を受けた、というような単に世俗的な意味での歴史ではありません。いいえ、それははるかにそれ以上のものであり、ひとつの「超歴史的」な宇宙的事実を表しているのです。シュタイナーが一連の出来事全体をそう呼んだように、「ゴルゴタの秘儀」を通じて、自分自身に対する、そして精神世界に対する人間の根本的な状況そのものが変更されたのです。

ユングは、キリスト教のミサにおける変容の象徴性に関する論文の中で、キリストという存在の元型的な（アーキタイプとしての）性質を断言し、人間は自らの内なるキリストを見出し、彼を誕生させ、それによって「クリストフォロス（キリストを背負う者）」にならなければならないと強調しています。彼はこれを、単なる「内的なプロセス」として描写しており、それがキリスト教によって唯一無二の歴史的出来事として描かれ、ミサの儀式において象徴化されているのだと主張します。

「パレスチナで実際に何が起こったのか？」という問いは、そこには入ってきません。彼の名誉のために言うならば、それは当然のことかもしれません。この問いは心理学の枠を超えてしまうものであり、彼は自らの考察において心理学的な領域に留まることを望んでいるからです。

論文の最後で、彼は次のように強調しています。「私がそのような形而上学的な出来事を心理学的なプロセスとみなすという主張は、私の批評家たちが好んで言うように、それが『単なる身体的（あるいは心理的）なもの』にすぎないと言っているわけでは決していない」

それにもかかわらず、ユングはキリスト教のミサの儀式を、あくまで「魂の内的な生活」に対してのみ意義を持つものとして描写しています。そして、それらの儀式は人類が存在して以来、何らかの形で教えられ、実践されてきたと付け加えています。なぜなら、それらは人間に根ざしており、人間の魂の生活の一部だからです。ここにおいて、キリスト以前（前キリスト教的）とキリスト以後（後キリスト教的）の状況のあいだにある、深い違いは認識されていません。

たしかにユングは、神秘主義とグノーシス主義の双方が、キリストの受肉をほとんど「魂の内的な、神秘主義的な発達の隠喩」として捉えており、歴史的な現実をほとんど無視していたことを指摘しています。そのため、彼らは「自らの内なるキリストを誕生させる」という自らの能力によって、「心理的な肥大化」に陥る危険をはらんでいました。一方で教会は、この危険性を認識していたからこそ、キリストの出来事が持つ「現実の、歴史的に唯一無二の性質」の重要性を常に支持してきたのだ、とユングは指摘します。そして、ユングは話をそこで止めている（それ以上の踏み込みはしていない）のです。

人智学にとって、これまでも述べたように、キリストの出来事の意義はまさにその「二重の側面」にあります。それは確かに「神秘主義的な事実」です。なぜなら、内的なプロセスとして何度も何度も再現することができるからです。それは、キリスト以前およびキリスト以後の秘儀参入（イニシエーション）において、多様な変容（メタモルフォーゼ）を遂げて現れてきました。キリスト以前のそれは「予言」の性質を帯びており、キリスト以後のそれは「キリストに倣いて（イミタティオ・クリスティ）」を意味していました。

（中世のエソテリック・キリスト教〔神秘的キリスト教〕において、秘儀参入の道は本質的に、ヨハネによる福音書に記述されている「十字架の7つの段階」を内的に体験することから構成されていました。この福音書は、キリストの受難が持つ参入伝授的な性質をきわめて明確に示しています。）

しかし同時に、キリストの出来事は「歴史的な出来事」でもあります。それは、人類の内的な構成を永遠に変えてしまったという意味においてであり、そのために参入の方法そのものも変容せざるを得なかったのです。

人智学は、純粹に精神的（靈的）な体験に到達できる——言い換えれば、客観的に実在する精神世界（靈界）の体験に到達できる——がゆえに、魂の主観的な体験よりもさらに先へと私たちを導くことができます。前回の講義で見たように、人智学は自然現象の「背後」に創造的な「形成力」の働きが見出される自然の領域へと浸透するだけではありません。人間の歴史の背後にある、歴史に真の意味を与える「超歴史的（メタヒストリカル）」な秘密をも発見したのです。

この秘密は、人間の意識の進化において、舞台裏で働いています。例えば、キリスト以前の時代において、人間が高次の知識を獲得するためには、自分の「私（自我）」の意識を完全に失わなければなりません。しかしキリスト以後の時代においては、私たちはそれをより高次の、精神的（靈的）な「私」の意識へと変容させることができるのです。

これはまた、もし人がキリストを「あらゆる元型の中で唯一無二の元型」として本当に捉えたいのであれば、キリスト以前の時代には、魂の最も奥深いところでキリストを見出すことはできなかったということも意味します。これが可能になったのは、ひとえに「ゴルゴタの秘儀」の結果としてなのです。キリストは、他のすべての元型とは対照的に、精神的な体験から物理的な存在へと（内側から）もたらされることはあり得ず、まず歴史的事実として物理的な感覚世界において見出されなければなりません。そうして初め

て、精神的な目覚めの道において、キリストはその元型的な意義を自ら明らかにする（現す）ことになるのです。

前回の講義のなかで、私は異なる意識レベルを説明するためにスケッチ（図5）を描きました。そこでは、日常の目覚めている意識が、いわば、その下にあるレベルと、それに対応して上にあるレベルとの間の「支点」として示されています。あのスケッチはまた、人間が歴史の過程で到達してきた意識のレベルも示しています。このスケッチを90度回転させると（図6）、人間の意識の進化が、キリストの出来事に関わる歴史の超歴史的な秘密とどのように結びついているかを見ることができます。

【図5】

インテュイション（直覚認識）
 インスピレーション（靈感認識）
 イマジネーション（画像認識）
 目覚めている意識（覚醒意識）
 夢を見ている状態（夢意識）
 眠っている状態（睡眠）
 死

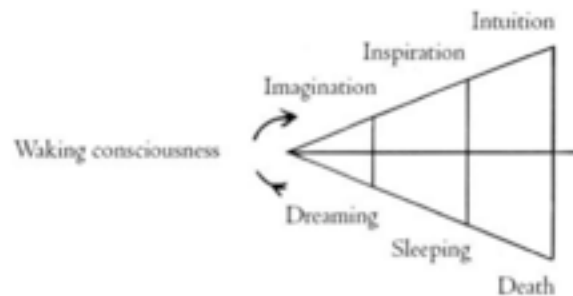


FIGURE 5

図5

【図6】

インテュイション（直覚認識）—— 誕生、死
 インスピレーション（靈感認識）—— 眠っている状態（睡眠）
 イマジネーション（画像認識）—— 夢を見ている状態（夢意識）
 目覚めている意識（覚醒意識）



FIGURE 6

図6

この図から、人類が始まった最初期には、外なる世界（物質世界）に対する意識は非常に薄暗かったものの、死と新しい誕生（転生）の間に魂が生きるあの世界を見通す能力を持っていた、ということが分かります。次のステップは、人間が睡眠中に起こることを知覚できた段階であり、その次は、夢のような神話的画像（イメージ）を認識していた段階です。

そして最終的に、私たちは現在の意識状態へと「下降」しました。この状態において、私たちは外なる世界には明らかに馴染んでいますが、自分自身の精神的（霊的）な本質については完全に気づいていません。私たちはある種の「私（自我）」の意識を持つてはいるものの、これまでの講義でも見てきたように、自らの物理的な身体と過度に一体化しているため、その「私」は非常に利己的（エゴイスト的）な性質を帯びて

います。この下降は、キリスト教の用語では、人間が地球上の存在の始まりにおいて経験し、それ以来ずっと苦しんできた「墮落（原罪）」として特徴づけられます。

ゴルゴタの秘儀という出来事を通じて、この「罪深い『私』」は救済されました。これにより、人間は自らを発達させ、浄化し、拡張し、そして一步一步、より高次の気づきへと自らを高めていく能力を手にしたのです。そうして人間は再び精神世界（霊界）と結ばれることになりますが、今度は完全に目覚めた「覚醒意識」において結ばれることになります。このようにして、キリストの受肉は、個性化プロセスを完遂することを確かに可能にしたのです。

〔個体と全人類〕

以上の意味において理解されるとき、人智学は明確にキリスト教的な基盤の上に立っています。だからこそ人智学は、独自の精神的トレーニング（修行）の道を通じて、現代において到達可能な最高の認識段階である「秘儀参入（イニシエーション）」へと至ることができたのです。これは、ユングの用語における「人間の個性化プロセスの完了」に対応しています。この最高の認識段階において、人間の「輪廻転生」という事実を認識することも可能となりました。これにより、個人の人間の「自己（セルフ）」と、種（人類）の「集合意識」との関係という、古くからの謎に対する答えがもたらされるのです。

ユングの心理学は、この謎に対して満足のいく答えを与えることができませんでした。ユングが「自己（セルフ）」の絶対的に個別的な（固有の）性質を主張する場面もあります。しかし別の場面では、彼は「自己」を、その種の集合的無意識の代表（代理人）として扱ってしまうのです。このアンビバレンス（両価性・矛盾）もまた、ユングがその科学的な探求において、魂の領域を越えることができなかったことの帰結です。そのため、先ほど私が呼んだ「超歴史的な秘密」を認識することは、彼には不可能だったのです。

精神科学（人智学）は、人間の内なる核である「私（自我）」が、他のすべての個人とは異なる、真に個別的で唯一無二の存在であることを肯定してきました。しかしながら、「私」は繰り返される転生（受肉）のなかで、あらゆる文化秩序（文化期）に参加し、さらなる発達に必要なすべての知識を獲得していくため、その意味において、単一の時代だけでなく「世界市民」となります。この意味で、人間は普遍的な存在なのです。

この普遍性を「集合的」あるいは「種に縛られたもの」と呼ぶのは誤りでしょう。むしろそれは、歴史のあらゆる段階を通じて全人類の発達に参加しているがゆえに、「超歴史的（メタヒストリカル）」と呼ばれるべきもののなのです。

〔知識と信仰の和解〕

人智学的な認識の道について、これまで皆さんに説明してきたことは、ユング心理学が追い求め、その最高かつ究極の目標であると宣言した「宗教と科学の和解」、すなわち「信仰と知識の和解」に到達できる唯一の現代的な道が人智学である、と理解する助けになるでしょう。

確かに、これら2つの領域の間の対立は、ここ数世紀の間にますます明白になってきました。その理由は、無意識の世界に隠されている宝が、私たちの文化や意識の中でますます抑圧されてきたという事実にあることができます。そして、この事態がひとつの「文化の病」を引き起こしたことも認めざるを得ません。ユングとその弟子たちは、集合的無意識の元型が持つ宗教的内容の価値と重要性を強調することによって、この文化の病に新しい治癒の衝動をもたらそうと試みてきました。彼らは患者に対して、無意識から湧き出る「織りなされるイメージ」の世界と再びつながる道を示し、意識と無意識の間の境界へと注意を向けるよう促します。

ユングとその学生たちが、宗教的な思想や概念に新しい妥当性を与えることができたという事実は、近年、「ユング派」とキリスト教の両教会（プロテスタントとカトリックの双方）の代表者との間に、非常に友好的な接触をもたらすことになりました。心理療法と牧会ケア（魂の配慮）には多くの共通点があるため、これは極めて自然なことです。例えば、ドイツの有名な組織である『Arzt und Seelsorger（医師と聖職者）』は、長年にわたり、心理療法と牧会ケアの両方の関心を扱う、参加者の多いカンファレンスを何年も開催し続けています。

しかし、こうした状況があるからといって、知識と信仰の間のギャップのせいで、今日の宗教生活が依然として不安定な状況にあり、最終的にはユング心理学によって救われ得るものではない、という事実から目を背けてはなりません。なぜならユングは、無意識を再発見したものの、シュタイナーが「イマジネーション」と呼んだ精神的（霊的）認識の第一段階で立ち止まってしまったからです。彼はその本質、すなわち「私（自我）」を意識化することができませんでした。彼はそれを「不可能である」と宣言したのです。

あるいは、別の表現をするならば、ユングはどこまでも心理学者であり、心理学者でありたいと願っていたため、プシュケー（心・魂）だけに関心を持っていました。彼が無意識について語るとき、それは「魂の現象」だけを意味しています。彼は、人間におけるいわゆる無意識が「精神（霊）的なもの」であり、それが人間を現実の精神世界（霊界）へと結びつける領域を構成しているということを、知ることしなければ、知ろうともしなかったのです。したがって、彼は宗教体験の心理学的な側面にのみ焦点を当てており、その「形而上学的（実在的）な側面」には関心を持っていません。それによって、宗教体験には主に個人的・心理学的な意義しかないという見解に、一種のお墨付き（根拠）を与えてしまっているのです。

私の考えでは、宗教体験の本質とは、人間が現実の、超個人的で神聖な世界との真の関係を確立できるようにすることにあります。このことは、人類が存在し始めた最初期から理解されてきました。だからこそ、宗教生活は、その内容に対する単なる心理学的な説明だけでは決して満足することはありません。たとえ心理学によって、どれほど多くの価値あるものが発掘されるとしてもです。

確かに、宗教体験は「感情」や「信仰」に関わるものであり、「認識」に関わるものではないという点において、精神科学（人智学）とは異なります。この点において、宗教体験は、精神的（霊的）な認知には関心を持たない深層心理学の方に、実際にはより近いと言えます。この類似性こそが、深層心理学の代表者たちと伝統的な教会との間で、多くの活発な協力関係が築かれている理由であることは疑いありません。

ここで私たちは2つの問いを投げかけることができます。宗教体験に対する「心理学的な説明」は、私たちの今の時代において本当に未来（永続性）を持ち得るのでしょうか。何と言っても、私たちの時代は「科学」の兆候のもとにあり、また「明晰な意識的自覚」への要求がますます高まっている時代なのです。

宗教団体と心理学者たちのこのような協力関係において、科学と宗教の和解はひとつの「妥協」によって達成されています。つまり、宗教体験が単なる心理学的な意義へと還元されているのです。そこには、科学と宗教の「真の和解」はありません。この事実は多くの人々、特に深層心理学の味方たちに対して激しく反対しているカトリック教会の内部において、明確に認識されています。

これとはまったく異なるものを達成したのが、私たちの時代における宗教生活の真の要求を満たすのにより適している人智学です。人智学はいわゆる無意識の「完全な解明」への道を開き、それによって人間の内的核が、現実には精神世界（霊界）と結びついていることを発見し、この世界を体験するための道を開きました。人智学は、人類が精神世界とどのように結びついているかを示すことに成功し、この知識のための概念的な基盤を創り出しました。それによって、宗教に新しい意義を与えたのです。

同時に、精神科学（人智学）は、自然と人間に関する自らの理解を精神世界の知識と統合し、それによって全体的で調和のとれた世界観を創り出しました。私は先ほどのキリストの出来事の特徴づけのなかで、こ

の世界観のイメージを皆さんに提示しようと試みました。このようにして、科学と宗教は「真の意味で和解」し、そのどちらも自らの本質を放棄することはありません。人智学は、完全に「認識」に基づいているがゆえに、新しく創設された宗教などではありませんし、多くの批評家が主張するように、あまりに科学的であることによって真の宗教的感情を破壊するようなものでもありません。

私が皆さんに説明してきた高次の認識レベルにおいて、知的な理解は「深い宗教的感情」の性質を帯びるようになります。なぜなら、宗教体験を得るために、その体験の対象が暗闇のなかに包まれている必要はないからです。そのような感情は、その対象を明晰な「意識的認識」の光のなかで見ることができるとき、そのすべての純粋さにおいて、さらにいっそう開花させることができます。事実、私たちの時代は、真の献身（崇敬）を再覚醒させるために、そのような明晰な視界を要求しているのです。このようにして、人智学は刷新された宗教体験の源泉となることができ、すでに多くの人々にとってそうになっています。

確かに、人智学が持つこの「二重の性質」は、今なお多くの現代人にとっての「つまずきの石」となっています。ある人々にとっては宗教的すぎ、別の人々にとっては科学的すぎるのです。しかし、私たちの時代にとっての決定的な課題——そして、付け加えるなら、特に私たちの時代のドイツおよび中央ヨーロッパの精神生活にとっての課題——は、疑いもなくこれです。すなわち、「科学の精神から宗教生活の刷新を誕生させ、それによって宗教と科学の和解をもたらすこと」です。偉大なドイツの哲学者シェリングは、150年前にこのことを認識していました。彼はその論文『ドイツ科学の性質について』の中で、次のように書いています。

「ドイツ国民はその全存在をかけて宗教へと向かうが、その特有の性質に従って、認識と結びつき、科学に基礎を置いた宗教をも目指している。こうして、『浅薄な哲学は神から遠ざけるが、真に深く理解された哲学は神へと連れ戻す』というベーコンの有名な格言は、注目すべき方法で真実であることが証明された。科学を通じた宗教の再生、これこそが真にドイツ精神の課題であり、そのすべての努力の明確な目標である」

人智学は宗教と科学の和解のための基盤を創り出したため、現代人の内的な不和（葛藤）の原因を癒すことができます。この不和とは、今日における非常に多くの精神的危機や病の根底にある「知識と信仰の間の衝突」のことです。

しかしながら、内的な危機がすでに急性の精神疾患へとつながってしまっているケースにおいては、人智学を直接的な治療薬として使用することは不可能であると認めざるを得ません。もちろん、同じことは深層心理学の理論それ自体にも当てはまります。しかし、深層心理学の理論から治療方法が開発されてきたのと同様に、人智学を治療の基礎として活用する方法も存在しています。2 これらの治療法について記述することは、深層心理学の治療法についての記述と同様に、本講義の範囲を超えてしまいます。

最後に申し上げたいのは、現代の文明のなかに投げ込まれ、知識と信仰、自然科学と宗教という対立する見解に日々さらされている現代人は、これらの極性のあいだでバランスを保つために絶えず奮闘することを余儀なくされている、ということです。これは、彼らが人智学の認識の道に入っている場合であっても同様です。私たちの魂の生活は、しばしばまだどちらか一方の方向へと大きく揺れ動き、ある種の一面性を創り出してしまいます。このことが、伝統的な教会の信奉者たち、あるいは現代の科学的思考に関わる知識人たちの双方から、私たちが批判を受ける原因となっています。

しかし、これらの講義において、私たちが特に関心を寄せていたのは、（他のあらゆる認識の道と同じように）人智学の道において生じ得る困難や危険ではなく、その道を忠実にたどるならば期待することのできる「成果（達成）」についてでした。そして言うまでもなく、これらの成果は、最初期において人智学の創始者であるルドルフ・シュタイナーによって確かに達成されたもののなのです。

人智学的心理学 (anthroposophic psychology) について

William Bento

『Lifting the Veil of Mental Illness:

An Approach to Anthroposophical Psychology』

『The Counselor... As If Soul and Spirit Matter』

ここまでユングとシュタイナーについて、
主にゲルハルト・ヴェーア『ユングとシュタイナー』の
英語版に収録されている
ロバート・サルデロによる序文と
ハンス・エアハルト・ラウアーの講義を
とりあげてきたが、
その後、人智学においては、
北米のAssociation for Anthroposophic Psychology (AAP) や
国際的なIFAPA (International Federation
of Anthroposophical Psychotherapy Associations) を中心に、
シュタイナーの人智学を基盤にしながら、
現代の主流心理学や深層心理学（特にユング心理学）を
積極的に取り入れながら、
人間を「体・魂・霊」の三次元存在として捉え、
臨床に応用する試みがなされている。

ユング心理学との統合という観点においては、
共通点として、夢・イメージ・能動的想像 (active imagination)、
象徴・神話の重視、個性化 (Individuation) と
魂の変容プロセス、集合的無意識的な深層が共有されているが、

そこにシュタイナーの精神科学を加えることで、
ユングの心理的現実を超えた霊的実在、階層的宇宙観や
カルマ、体・魂・霊による視点のもとに補完・拡張している。

そのことによって、ユングの「魂の心理学」を
準備段階や心理的層として扱い、
そこにさらに霊的次元を加えるアプローチが取られている。

以下、。ユング心理学関係を取りいれているポイントについて
整理しておきたい。

○集合的無意識と元型 (Archetypes) の概念

ユングの「集合的無意識」（人類共通のイメージの基盤）
および元型（母、影、賢者、自己など普遍的パターン）は、
シュタイナーの「魂の領域」や
霊的視点（十二感覚、思考・感情・意志）と親和性が高く
取り入れられている。

また、夢分析やイメージワークにおいて、

個人的体験を超えた普遍的象徴を扱う点が共通しており、これをさらに霊的現実（霊界の影響）や運命（カルマ）の文脈で解釈。魂の霊的発展ツールとして用いている。

○影（Shadow）や個性化（Individuation）のプロセス

ユングの影統合や自己（Self）への道筋は、シュタイナーの「Ich（自我）」の発展や二元性（ルシファー・アーリマンなど）の克服と重ねられ、心理的危機や精神疾患を「魂の成長機会」として見る視点で統合される。

また、「影」の仕事は、シュタイナーの霊的試練や「代表的人間像」（Christ-centered balance）と関連づけられることがある。

（※代表的人間像：人間が「キリスト的な調和」をもって、二つの精神的な極端（悪の勢力）の狭間でバランスを保ちながら生きる姿を象徴した概念）

○・夢・イメージ・能動的想像（Active Imagination）

ユングの夢分析や能動的想像は、人智学的心理学の芸術療法（オイリュトミー、絵画療法など）やバイオグラフィー・ワークに取り入れられ、イメージを単なる心理現象ではなく、魂と精神の橋渡しや霊的洞察の入口として扱っている。

○全体論的・超越的視点

両者とも物質還元主義を超え、魂・精神を重視するが、ユングが心理学的・経験的な枠に留まるのに対し、人智学ではシュタイナーの精神科学で拡張される。ユング自身はシュタイナーを一部批判的に見ていたが、影響関係（相互の間接的影響）が指摘されている。

なお、人智学的心理学についての主な開拓者・創始者の一人が William Bento, Ph.D.（1951年-2015年6月5日）。

シュタイナーの精神科学を基盤に、現代の心理学・カウンセリングに魂（soul）と精神（spirit）の次元を統合する独自のアプローチを開発・普及させた。

Bentoの心理学は「体験的・人間的」であることを重視。精神的不均衡を単なる病理ではなく、魂の成長の機会や現代人間の尊厳にふさわしい心理学として位置づけている。

また、アストロソフィー（星の叡智）との統合も特徴で、個人のバイオグラフィーと宇宙のリズムを結びつけるアプローチを取っていたことも特徴に挙げられる。

亡くなったのは、2015年6月5日（64歳前後）、AAP（Association for Anthroposophic Psychology）の基礎を築いた直後のことだが、以下の主著・共著があり、その基本的な視点を知ることができる。

『Lifting the Veil of Mental Illness:
An Approach to Anthroposophical Psychology』（2004年頃）

精神疾患を抽象的な症状ではなく、人間的な経験として捉え、人智学的な視点から魂の不均衡を扱い、身体・魂・精神、環境の影響などを統合的に論じている。

『The Counselor... As If Soul and Spirit Matter』（共著・寄稿）

現代のカウンセリングに魂と精神の次元を導入している。

上記の二著作については、今後随時紹介していく予定。